

Oracle Enterprise Manager

構成ガイド

リリース 2.2

2000 年 11 月

部品番号 : J02260-01

ORACLE®

Oracle Enterprise Manager 構成ガイド リリース 2.2

部品番号 : J02260-01

原本名 : Oracle Enterprise Manager Configuration Guide, Release 2.2

原本部品番号 : A85247-01

Copyright © 1996, 2000, Oracle Corporation. All rights reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）の使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当プログラムのリバース・エンジニアリング等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

* オラクル社とは、Oracle Corporation（米国オラクル）または日本オラクル株式会社（日本オラクル）を指します。

危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションを用途として開発されておりません。オラクル社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、日本オラクル株式会社と開発元である Oracle Corporation（米国オラクル）およびその関連会社は一切責任を負いかねます。当プログラムを米国国防総省の米国政府機関に提供する際には、『Restricted Rights』と共に提供してください。この場合次の Notice が適用されます。

Restricted Rights Notice

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are "commercial computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs, including documentation, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are "restricted computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software - Restricted Rights (June, 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

目次

はじめに	ix
------------	----

1 Oracle Enterprise Manager の概要

Oracle Enterprise Manager のアーキテクチャ	1-2
基本用語	1-7
リポジトリとは	1-7
リポジトリ・ユーザーとは	1-7
管理ユーザーとは	1-7
コンソールとは	1-8
Oracle Management Server とは	1-8
Oracle Intelligent Agent とは	1-8
サービス検出とは	1-8
管理対象ノードとは	1-9
管理対象サービス / 管理対象ターゲットとは	1-9
優先接続情報リストとは	1-9
Oracle Enterprise Manager システムおよびハードウェアの要件	1-10
Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 の動作保証	1-11
Oracle Enterprise Manager 構成の概要	1-12
Oracle Enterprise Manager のクイック構成（クイック・スタート）	1-12
大企業向けの Oracle Enterprise Manager の構成	1-14
Oracle Enterprise Manager フレームワークおよび Management Pack のアップグレード	1-17
リポジトリの移行	1-18

2 リリース 2.2 のリポジトリの作成

リリース 2.2 の新しいリポジトリの作成	2-4
Enterprise Manager Configuration Assistant の起動	2-5
ステップ 1 「構成操作」	2-6
ステップ 2 「リポジトリのデータベースを選択」	2-7
ステップ 3 「リポジトリへのログイン情報」	2-9
ステップ 4 「リポジトリ・ユーザー表領域を選択」	2-10
ステップ 5 「リポジトリ作成のサマリー」	2-14
ステップ 6 「Configuration Assistant の進行」 ウィンドウ	2-15
リポジトリ・データベースで推奨される init.ora 設定	2-16

3 Management Server の管理

Management Server の起動	3-1
Windows NT または Windows 2000 での Management Server の起動	3-2
UNIX での Management Server の起動	3-3
Management Server のステータスのチェック	3-4
Management Server の停止	3-6
Management Server のチューニング	3-7
ping 間隔の設定	3-7
最大発信接続数の設定	3-7
最大着信接続数の設定	3-8
Management Server 再試行間隔の設定	3-8

4 Management Server の追加

追加の Management Server のインストール	4-2
追加の Management Server の設定	4-2
ステップ 1 「構成操作」	4-2
ステップ 2 「構成パラメータ」	4-2
ステップ 3 「構成パラメータを変更」	4-3

5 Intelligent Agent の起動および停止

Windows NT または Windows 2000 での Oracle Intelligent Agent の起動および停止	5-2
Windows NT または Windows 2000 での Intelligent Agent の起動	5-2
Windows NT または Windows 2000 での Intelligent Agent の停止	5-3

Windows NT または Windows 2000 での Intelligent Agent の実行の確認	5-3
コマンド・プロンプトからの起動、停止およびステータスの確認	5-3
UNIX での Oracle Intelligent Agent の起動および停止	5-4

6 コンソールの設定

Enterprise Manager コンソールの起動	6-2
サービスの検出	6-4
管理者アカウントの作成	6-5
Web ブラウザからの Oracle Enterprise Manager の実行	6-6
イベント・システムの設定	6-13
ジョブ制御システムの設定	6-14
ジョブ実行のための Windows NT または Windows 2000 ユーザー・アカウントの作成	6-14
Windows NT または Windows 2000 の新規ユーザー・アカウントの作成	6-15
既存の Windows NT または Windows 2000 ユーザー・アカウントへの権限の割当て	6-15
Intelligent Agent としての Windows NT または Windows 2000 ドメイン・ユーザーの構成	6-16
管理対象サービスの優先接続情報リストの設定	6-17
ポケットベル・サービスの構成および起動	6-18
ポケットベルの設定	6-19
ポケットベル・サーバーの追加	6-20
ポケットベル・キャリアの追加	6-22
ポケットベル通知の作業環境の指定	6-24
その他のポケットベル・サーバー操作	6-24
ポケットベル・サーバーの削除	6-24
ポケットベル・サーバーに関する情報の表示	6-25
ポケットベル・サーバーの ping	6-25
ポケットベル・サービスのステータスの問合せ	6-25
ポケットベル・サービスの停止	6-25
ポケットベル・キャリアの削除	6-26
ポケットベル・キャリアの編集	6-26
ポケットベル・キャリアに関する情報の表示	6-26
ポケットベル・キャリアのテスト	6-27
電子メール通知およびポケットベル通知の設定	6-27
SMTP ゲートウェイの設定	6-27
電子メールとポケットベルの通知の設定	6-27
フィルタ	6-28
電子メール	6-30

ポケットベル	6-32
数字ポケットベルのポケットベル・ステータス・コード	6-33
電子メール / ポケットベルのメッセージ本文の定義	6-34
ポケットベル・サーバー	6-35
Management Server 接続にダイヤルアップ回線を使用する場合のコンソールの構成	6-37
バックアップまたは SYSDBA 管理のためのリモート・データベースの構成	6-38
サーバー側 (Windows NT または Windows 2000)	6-38
サーバー側 (UNIX)	6-39
日付書式の設定	6-41

7 リリース 1.x のリポジトリからリリース 2.2 のリポジトリへの移行

重要な注意	7-2
移行の段階	7-2
リリース 1.x とリリース 2.2 の違いが移行に与える影響	7-3
リポジトリ移行の準備	7-6
リリース 2.2 の新しい管理者の作成	7-7
リリース 1.x のコンソールの全サービスのリフレッシュ	7-7
リリース 1.x のコンソールとリリース 2.2 の Management Server の停止	7-8
リリース 1.x の現在のリポジトリの情報確認	7-8
リリース 1.x の既存のリポジトリのバックアップ	7-8
Migration Assistant を使用したリポジトリの移行	7-9
ステップ 1 「イントロダクション」	7-10
ステップ 2 「コンポーネントの選択」	7-11
ステップ 3 「ソース・リポジトリ・ログイン」	7-12
ステップ 4 「ターゲット・リポジトリ・ログイン」	7-13
ステップ 5 「管理者データ」	7-14
進行中の作業	7-15
リリース 1.x のコンソールからのすべてのアクティブ・ジョブおよびイベントの削除と登録解除	7-15
移行成功の確認	7-16
移行の取消し	7-17
リリース 1.x のオブジェクト・リファレンス	7-18
リリース 2.2 へ移行されるリリース 1.x のオブジェクト	7-18
再作成が必要なリリース 1.x のオブジェクト	7-20
使用不可になるリリース 1.x のオブジェクト	7-20

8 DBA Studio の設定

スタンドアロンまたは Oracle Management Server (OMS) モードの DBA Studio	8-3
データベースへの直接接続	8-3
Oracle Management Server による接続	8-3
スタンドアロン・モードの DBA Studio の設定	8-4
スタンドアロン・モードでの DBA Studio の起動	8-4
スタンドアロン・モードの DBA Studio のツリーにデータベースを追加	8-5
スタンドアロン・モードの DBA Studio でデータベースへ接続	8-6
スタンドアロン・モードの DBA Studio のローカル優先接続情報リストの編集	8-8
OMS モードの DBA Studio の設定	8-10
Management Server へ接続するための DBA Studio の設定	8-10
OMS モードでの DBA Studio の起動	8-11
OMS モードの DBA Studio でデータベースへ接続	8-12
DBA Studio のその他の手順	8-13
DBA Studio の Quick Tour へのアクセス	8-13
データベースに別のユーザーとして接続	8-13
DBA Studio への接続で使用しているロールの参照	8-14
スタンドアロン・モードの DBA Studio のツリーからデータベースを削除	8-14
OMS モードのナビゲータからデータベースを削除	8-15
OMS モードの DBA Studio のナビゲータ・ツリーにデータベースを追加	8-15
OMS モードからスタンドアロン・モードへの変更	8-16
スタンドアロン・モードから OMS モードへの変更	8-16
JServer への接続	8-17
7.3.4 データベースに対して DBA Studio への非 DBA ユーザー・アクセスを設定	8-17

A ディレクトリ構造

Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 のディレクトリ構造	A-1
\$ORACLE_HOME¥sysman のディレクトリ構造	A-1
その他の重要なディレクトリ	A-3

B Configuration Assistant の操作

リリース 2.0 または 2.1 のリポジトリからリリース 2.2 のリポジトリへのアップグレード	B-2
ステップ 1 「構成操作」	B-3
ステップ 2 「リポジトリのデータベースを選択」	B-3

ステップ 3「リポジトリを選択」	B-4
ステップ 4「リポジトリへのログイン情報」	B-4
ステップ 5「リポジトリ・サマリーの更新」	B-5
ステップ 6「Configuration Assistant の進行」	B-5
既存リポジトリの削除	B-6
ステップ 1「構成操作」	B-6
ステップ 2「リポジトリのデータベースを選択」	B-6
ステップ 3「リポジトリを選択」	B-7
ステップ 4「リポジトリの削除オプションを選択」	B-7
ステップ 5「リポジトリ削除のサマリー」	B-8
ステップ 6「Configuration Assistant の進行」	B-8
構成パラメータの編集	B-8
ステップ 1「構成操作」	B-9
ステップ 2「構成パラメータ」	B-9
ステップ 3「構成パラメータを変更」	B-10
構成ファイルにアクセス不能	B-11

C Intelligent Agent および Data Gatherer のアップグレード

Intelligent Agent のアップグレード	C-1
Enterprise Manager リリース 2 での Agent アップグレードのガイドライン	C-1
Enterprise Manager ジョブ / イベントの 8.1.5 または 8.1.6 の Agent から 8.1.7 の Agent への移行	C-2
旧バージョンの Data Gatherer のアップグレード	C-3

D トラブルシューティング

オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問題の報告	D-1
マニュアル	D-2
MetaLink	D-2
オラクル社カスタマ・サポート・センター	D-3
ロギングとトレースの設定	D-4
Management Server のトレースとロギング	D-4
ロギング・プロパティとトレース・プロパティ	D-4
Management Server ログ	D-6
クライアントのトレース	D-6
Web ブラウザのトレース	D-7

ポケットベルのトレース	D-8
Management Server のトラブルシューティング	D-9
Management Server がデフォルト以外の Oracle ホームから正しく実行できない場合	D-9
Management Server が起動されない場合	D-10
oms.log ファイル	D-10
oms.nohup ファイル	D-10
Windows NT のイベント・ログ	D-10
OEMCTRL バッチ・ファイル	D-11
Management Server 起動時のエラー・メッセージ	D-12
クライアント・アクセス用の Management Server の変更	D-12
ポケットベル・サービスのトラブルシューティング	D-13
ポケットベルの通知失敗	D-13
Web ブラウザのトラブルシューティング	D-13
パスワードの再設定	D-14
Enterprise Manager Configuration Assistant のトラブルシューティング	D-14
Enterprise Manager Configuration Assistant のエラー	D-14
リポジトリ・データベースのデフォルト表領域に十分な空き領域がない	D-16
OEM_REPOSITORY 表領域が存在しない場合の作成	D-17
別の表領域の作成	D-17
既存の表領域のサイズを拡張	D-18
リポジトリ操作には不十分なデータベース・パラメータ	D-19
omsconfig.properties ファイルに関する許可の変更	D-21
SGA サイズの決定	D-22
ジョブ通知のトラブルシューティング	D-23

E リポジトリのサイズ設定

F Web サーバーの構成とディレクトリ・マッピング

Apache 1.3.9 以上 (UNIX)	F-1
Internet Information Server (IIS) 4.0	F-2

G キーボード・ショートカット

索引

はじめに

この章では、このマニュアルの目的と構成について説明します。「はじめに」には、次の情報が含まれています。

- [このマニュアルの目的](#)
- [このマニュアルの対象読者](#)
- [このマニュアルの構成](#)
- [ドキュメント・セット](#)
- [関連資料](#)
- [このマニュアルの表記規則](#)

このマニュアルの目的

このマニュアルでは、Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 の構成方法を説明します。

Oracle Enterprise Manager は、異種環境を管理するための統合ソリューションを提供するシステム管理ツールです。グラフィカル・コンソール、Agent、共通サービスおよびツールの組合せにより、Oracle 製品を管理するための統合された総合システム管理プラットフォームを提供します。

プログラムの更新および Oracle Enterprise Manager の使用上の重要な注意は、『Oracle Enterprise Manager 日本語リリース・ノート』を参照してください。

構成手順の完了後、Oracle Enterprise Manager の使用方法について、Oracle Enterprise Manager のオンライン・ヘルプまたは『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

このマニュアルの対象読者

このマニュアルは、Oracle Enterprise Manager を構成するデータベース管理者およびシステム管理者を対象としています。読者は、Oracle と、実行する管理作業に精通している必要があります。

Oracle8i の一般情報とその機能については、『Oracle8i 概要』を参照してください。データベース管理手順の詳細は、Oracle8i ドキュメント・セットを参照してください。Oracle8i ドキュメント・セットには、Oracle Enterprise Manager の各種ツールで実行できるデータベース管理作業について、具体的で詳細な説明が記載されています。また、Oracle8i ドキュメント・セットには、データベースの最適な管理方法についてのアドバイスも記載されています。

読者は、使用している Microsoft Windows または UNIX システムの操作についても精通している必要があります。必要に応じて、ご使用の Windows または UNIX システムのドキュメントを参照してください。

このマニュアルの構成

このマニュアルは、次の章から構成されています。

章	説明
第 1 章「Oracle Enterprise Manager の概要」	Oracle Enterprise Manager 構成の概要について説明します。
第 2 章「リリース 2.2 のリポジトリの作成」	Enterprise Manager Configuration Assistant を使用して新規のリポジトリを作成する方法を説明します。
第 3 章「Management Server の管理」	Oracle Management Server の開始、停止、ステータスのチェック方法について説明します。
第 4 章「Management Server の追加」	新しい Management Server を追加して、既存のリポジトリを管理する方法について説明します。
第 5 章「Intelligent Agent の起動および停止」	Oracle Intelligent Agent の起動方法について説明します。
第 6 章「コンソールの設定」	Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 の構成方法および起動方法について説明します。

章	説明
第 7 章「リリース 1.x のリポジトリからリリース 2.2 のリポジトリへの移行」	<p>ユーザーのリリース 1.x プライベート・リポジトリを、新しいリリース 2.2 リポジトリの特定のユーザーに移行する方法について説明します。</p> <p>リリース 2.0 または 2.1 のリポジトリをリリース 2.2 のリポジトリへアップグレードする場合の詳細は、B-2 ページの「リリース 2.0 または 2.1 のリポジトリからリリース 2.2 のリポジトリへのアップグレード」を参照してください。</p>
第 8 章「DBA Studio の設定」	DBA Studio のセットアップ方法について説明します。
付録 A「ディレクトリ構造」	Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 のディレクトリ構造について説明します。
付録 B「Configuration Assistant の操作」	リポジトリのアップグレード方法と削除方法、および別のリポジトリを使用するため、またはリポジトリのユーザー・パスワードの変更に対応するために、ローカル Management Server をリダイレクトする方法について説明します。
付録 C「Intelligent Agent および Data Gatherer のアップグレード」	Intelligent Agent および Data Gatherer のアップグレード・プロセスについて説明します。
付録 D「トラブルシューティング」	発生する可能性のあるトラブルシューティングについて説明します。
付録 E「リポジトリのサイズ設定」	リポジトリのサイズ設定に関する推奨事項が記載されています。
付録 F「Web サーバーの構成とディレクトリ・マッピング」	デフォルトで Enterprise Manager に同梱されている Oracle HTTP Server をインストールしていない場合に、Web サーバーとディレクトリ・マッピングを構成する方法について説明します。
付録 G「キーボード・ショートカット」	一般的な Windows キーボード・ショートカットのリストを記載します。

ドキュメント・セット

Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 のドキュメント・セットには、次のドキュメントが含まれています。

- 『Oracle Enterprise Manager 日本語リリース・ノート リリース 2.2』には、Oracle Enterprise Manager の最新情報に関する重要な説明とその他の最新ニュースに加えて、製品の実際の動作とドキュメントの説明との違いが記載されています。
- 『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド リリース 2.2』には、Oracle Enterprise Manager システムの構成に関する情報が記載されています。
- 『Oracle Enterprise Manager 概説 リリース 2.2』には、Enterprise Manager システムの概要が記載されています。
- 『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド リリース 2.2』には、Oracle Enterprise Manager システムのコンポーネントと機能について記載されています。
- 『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド リリース 8.1.7』には、Oracle Intelligent Agent の管理方法について記載されています。
- 『Oracle Enterprise Manager メッセージ・マニュアル リリース 2.2』には、Oracle Enterprise Manager のエラーについて、考えられる原因と推奨される処置が記載されています。

Oracle Enterprise Manager ドキュメント・セットの他にも、Oracle Enterprise Manager では、各種コンポーネントの詳しいオンライン・ヘルプが提供されています。

関連資料

『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』では、関連資料の重要な情報を参照しています。このマニュアルで参照されている関連書籍は、次のとおりです。

- Oracle8i の一般情報とその機能については、『Getting to Know Oracle8i 』および『Oracle8i 概要』を参照してください。
- Oracle8i 管理の詳細は、『Oracle8i 管理者ガイド』を参照してください。
- Oracle の以前のバージョンからの移行手順は、『Oracle8i 移行ガイド』を参照してください。
- Oracle の SQL コマンドおよび関数の詳細は、『Oracle8i SQL リファレンス』を参照してください。
- Oracle8i にバンドルされているユーティリティの詳細は、『Oracle8i SQL リファレンス』を参照してください。
- Oracle メッセージおよびコードの詳細は、『Oracle8i エラー・メッセージ』を参照してください。

- Oracle ネットワーキング・システムの詳細は、ネットワーク固有のドキュメントを参照してください。
- Oracle Parallel Server の詳細は、『Oracle8i Parallel Server セットアップおよび構成ガイド』を参照してください。このドキュメントには、Oracle Parallel Server および Oracle Enterprise Manager で Oracle8i を使用するための準備に必要な情報が記載されています。「Oracle Parallel Server の概要」の章には、Oracle Parallel Server の概念およびコンポーネントの概要が記載されています。この情報は、Oracle8i の環境で Oracle Parallel Server のインストールおよび構成を準備し、計画する際に役立ちます。

このマニュアルの表記規則

ここでは、このマニュアルで使用されている表記規則を説明します。

例

このマニュアルには、コードの例が記載されています。例のテキストは、このマニュアルの本文とは違う書体で示されていますので注意してください。次に示すのは、SELECT 文の例です。

```
SELECT * FROM emp
```

このマニュアルで示す例は、大文字と小文字を次の表記規則に基づいて使い分けています。

- CREATE、NUMBER などのキーワードは大文字で表記してあります。キーワードには特別な意味があります。キーワードは大文字または小文字のどちらでも指定できますが、それらを使用する場合はコード例と同じ表記をする必要があります。
- データベース・オブジェクトとそれらの部分の名前は、emp や empno のように、小文字で表記してあります。ただし、このマニュアルの本文中では、データベース・オブジェクトとその部分の名前は、大文字で示されています。
- 例では、パラメータがプレースホルダの役割を果たします。パラメータは小文字で表記されます。パラメータは、通常、スキーマ・オブジェクトの名前、Oracle データ型または式です。構文図にパラメータがある場合、該当する型のオブジェクトまたは式を代入してください。このマニュアルの本文では、パラメータ名はイタリック体で表記されますので注意してください。

コマンド構文

- イタリック体は、*application_name* などの変数に使用します。実際に使用する値を指定してください。
- | は、選択肢を示します。
- {*param1* | *param2* | ...} は {} 内のパラメータの 1 つを指定する必要があることを示します。カッコは入力しないでください。
- [] は、オプション・パラメータを示します。カッコは入力しないでください。

Oracle Enterprise Manager の概要

Oracle Enterprise Manager は、異種環境を集中管理するための統合ソリューションを提供するシステム管理ツールです。Oracle Enterprise Manager では、コンソール、Oracle Management Server、Oracle Intelligent Agent、共通サービス、および Oracle 製品管理用の統合された包括的システム管理プラットフォームを提供するツールなど、管理アプリケーションが組み合わされています。

この概要の内容は、次のとおりです。

- [Oracle Enterprise Manager のアーキテクチャ](#)
- [基本用語](#)
- [Oracle Enterprise Manager システムおよびハードウェアの要件](#)
- [Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 の動作保証](#)
- [Oracle Enterprise Manager 構成の概要](#)

Oracle Enterprise Manager のアーキテクチャ

Oracle Enterprise Manager は、非常にスケーラブルな 3 層モデルを基礎にしています。

図 1-1 3 層アーキテクチャ

1)

Java コンソール



2)

Management
Server



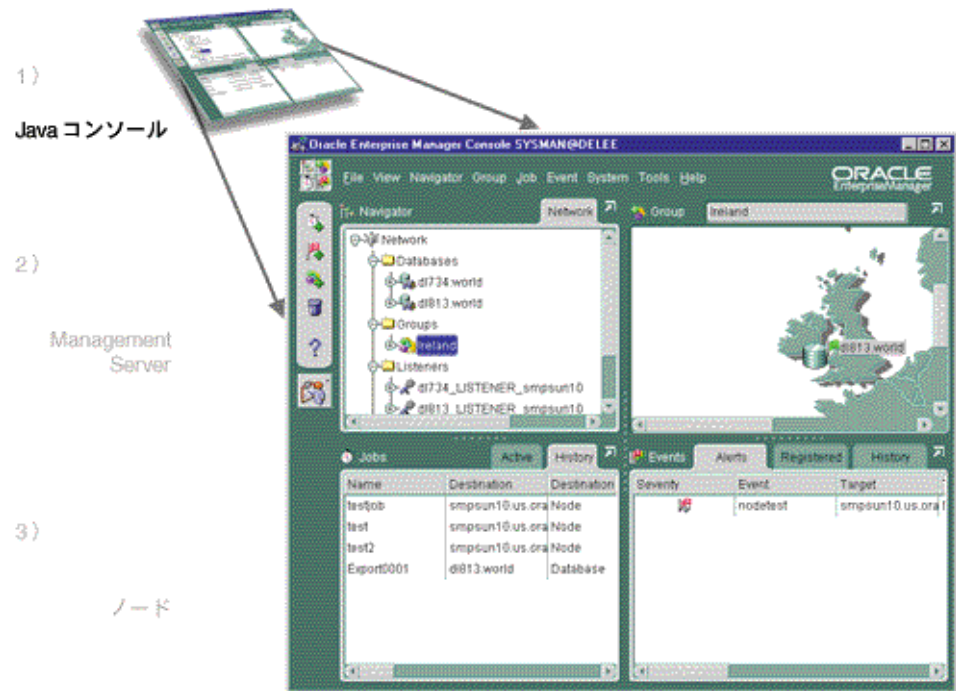
3)

ノード



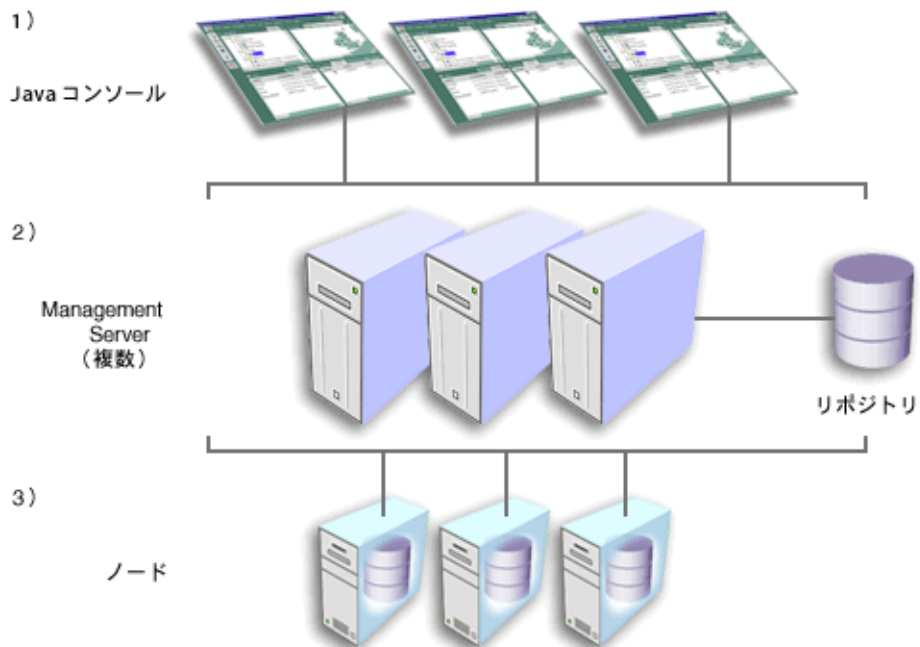
第1層のクライアントは、Java ベースのコンソールと統合アプリケーションで構成されています。

図 1-2 第1層



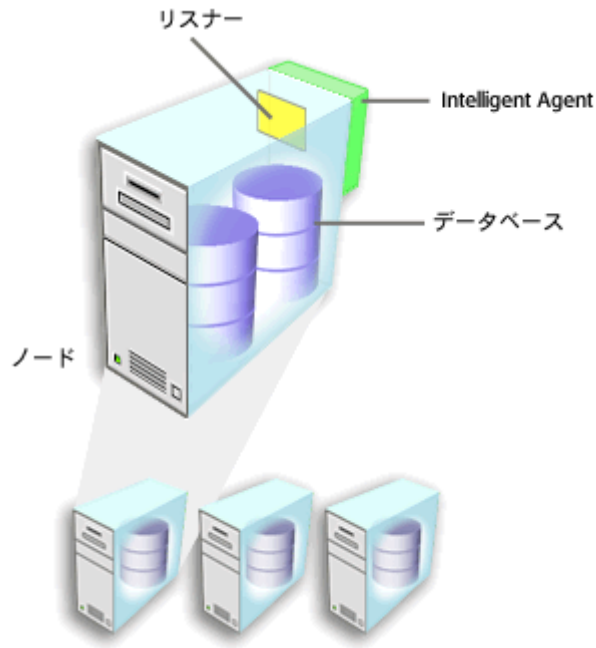
第2層は、Management Server または指定した Management Server グループであり、クライアントおよびターゲット間の情報のフローを管理します。

図 1-3 第2層



第3層は、データベース、ノードまたはその他の管理対象サービスなどのターゲットで構成されています。Intelligent Agent は、ターゲット・ノードごとに1つ存在して、そのターゲットのサービスに登録イベント（潜在的な問題の発生）がないかどうかを監視し、Oracle Management Server を介してコンソールによって送られたジョブを実行します。マシン上のサービス数に関係なく、1台のマシンでは1つの Intelligent Agent しか稼働できません。

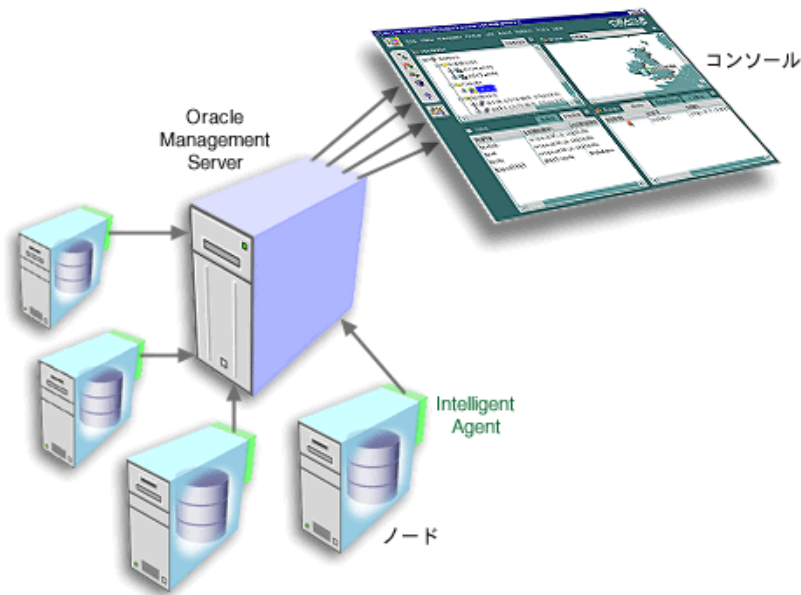
図 1-4 第3層



Oracle Enterprise Manager の 3 つの主要コンポーネントは、次のとおりです。

コンポーネント	機能
コンソール	コンソールでは、強力的かつ確実なシステム管理を実現する直観的なグラフィカル・ユーザー・インタフェース（GUI）により、Oracle 環境を一元的に制御できます。
Management Server	Oracle Management Server では、Oracle Enterprise Manager 管理者の認証および管理機能の処理を行い、管理情報の集中化されたデータ・ストアを実現します。管理情報には、ジョブ、イベント、グループおよび優先接続情報が含まれます。管理対象ターゲット（データベースなど）に対する職責を共有する管理者どうしは、そのターゲットの管理情報を共有できます。
Intelligent Agent	Intelligent Agent は、ネットワーク内の管理対象ノードで稼働するプロセスです。Management Server を介してコンソールから送られたジョブやイベントを実行します。

図 1-5 Oracle Enterprise Manager のコンポーネント



基本用語

リポジトリとは

リポジトリは、管理対象環境の Enterprise Manager の内部状態情報と、Management Pack に関する情報が格納されているデータベース内の表の集合です。クライアントと管理対象ノードの間で分散制御が実現されている場合は、リポジトリは、Oracle Management Server でバックエンドの格納場所として使用されます。

リポジトリ・ユーザーとは

Enterprise Manager リポジトリの所有者は、データベース・ユーザーです。リポジトリを作成する際に、このデータベース・ユーザーの作成に使用するリポジトリ・ユーザー名を指定します。

リポジトリ・ユーザー名は、このリポジトリの名前にもなります。ネットワーク内では、このリポジトリ内のオブジェクトはすべてこの名前で識別されます。リポジトリ名は、管理対象ネットワーク内で一意のスキーマ名である必要があります。

リポジトリの作成時に、リポジトリのユーザー名および暗号化されたパスワードが保存されている場合は、Management Server は、これらを使用してリポジトリにログインします。保存されていない場合は、リポジトリを起動する前に、ユーザー名とパスワードを入力するように要求されます。

管理ユーザーとは

Oracle Enterprise Manager 管理ユーザーは、管理作業を実行し管理情報にアクセスするためのユーザー権限を提供するアカウントです。通常、管理アカウントは管理チームの各メンバーに作成されます。優先接続情報リスト、ログイン・パスワード、電子メールおよびポケットベルの通知スケジュールなどの作業環境は、管理者ごとに設定する必要があります。一般的には、各人が1つの管理ユーザー・アカウントを持ち、このアカウントを使用して複数のターゲットを管理します。

管理ユーザー・アカウントは、スーパー管理者が作成します。Oracle Enterprise Manager では、インストール時にデフォルトのスーパー管理者アカウントが1つ設定されており、これを使用して最初のログインを行います。スーパー管理者アカウントは sysman、初期パスワードは oem_temp です。パスワードは、最初のログインの後で変更してください。スーパー管理者アカウントは UNIX の root または Windows NT の Administrator のように、削除も名前変更もできないユーザーです。

注意： 管理者ユーザー・アカウントは、Oracle Enterprise Manager に固有のアカウントで、Oracle データベース・ユーザーとは異なります。

コンソールとは

コンソールは管理者用のグラフィカル・インタフェースであり、すべてのアプリケーション（統合アプリケーションを含む）の中央起動ポイントです。コンソールは、シン・クライアントまたはファット・クライアントとして実行できる Java ベースのアプリケーションです。シン・クライアントでは、コンソール・ファイルがインストールされているサーバーに接続する際に Web ブラウザを使用しますが、ファット・クライアントでは、コンソール・ファイルをローカルにインストールする必要があります。

コンソールをどのように実行する場合でも、システム管理タスクを実行するには、Oracle Management Server と Oracle Intelligent Agent が必要です。

Oracle Management Server とは

Management Server は、Enterprise Manager フレームワークの中核となるものです。Management Server では、管理ユーザー・アカウントを提供し、ジョブおよびイベントなどの管理機能を処理し、各層間の情報の流れを管理します。

ネットワーク内のノード数および管理対象のサービス数が増加した場合、または現行の Management Server がオーバーロードになった場合には、中間層に Oracle Management Server を追加してワークロードを分散し、平均化することができます。Management Server を追加すると、いずれかの Management Server が使用できなくなった場合にも、システム全体に影響を与えずに運用できます。同じノード群を管理する Management Server は、すべて 1 つのリポジトリを共有します。リポジトリには、その環境全体のシステム・データ、アプリケーション・データ、管理対象ノードの状態が全部格納されています。

Oracle Intelligent Agent とは

Oracle Intelligent Agent は、管理対象サーバー上のプロセスであり、登録済イベントを監視し、そのサーバーで検出されたすべてのサービスに対してスケジュール済ジョブを実行します。マシン上に存在するサービスの数に関係なく、1 つのノードに必要な Intelligent Agent は 1 つのみです。Intelligent Agent は、Management Server やコンソールのクライアントから独立しているばかりでなく、サポートするデータベースやサービスとも無関係に機能します。

サービス検出とは

検出は、次の 2 つのタイプに分かれます。

- 管理可能なサービス全部のリストを記録するために Intelligent Agent によって実行される自動検出
- Intelligent Agent からサービス・リストを取得してコンソールの「ナビゲータ」にサービスを表示するために、コンソールによって実行されるサービス検出

Intelligent Agent による検出がなければ、コンソールによる検出も行われません。両方の検出が正しい順序で実行されて完了して初めて、サービスはコンソールの「ナビゲータ」に表示されます。

コンソールで検出ウィザードを使用すると、Management Server は、そのノードにインストールされている Intelligent Agent に接続し、ノードにインストールされている Oracle サービスを検出します。

Intelligent Agent は、起動時にシステムを走査して、管理する Oracle サービスの検出を実行します。Intelligent Agent では、サービス検出が記録されます。コンソールによりノードの検出が要求されると、Intelligent Agent は、検出したサービス検出情報を Management Server に送信します。

次に、Management Server は新しい情報をリポジトリに格納し、コンソールのナビゲータを更新して、全ノードおよびそれぞれのサービスのビューを表示します。

サービス検出により、管理者はノードでのジョブの実行と、イベントの監視ができ、情報はコンソールで集中管理されます。

管理対象ノードとは

管理対象ノードとは、コンソールで検出された Intelligent Agent により監視されるマシンのことです。

管理対象サービス / 管理対象ターゲットとは

管理対象ノードで実行されているサービスは、すべて管理対象サービスあるいは管理対象ターゲットです。1 台のマシン（ノード）に、複数のサービス（ターゲット）が存在する場合があります。

優先接続情報リストとは

この項では、次の事項について説明します。

- Oracle Enterprise Manager コンソールによって保存される優先接続情報リスト
- DBA Studio によって保存されるローカル優先接続情報リスト

Oracle Enterprise Manager コンソールによって保存される優先接続情報リスト

各管理者は、ネットワーク内で管理するノード、リスナー、データベースおよびその他のサービスに対して、特定のユーザー名、パスワードおよびロール（NORMAL、SYSOPER または SYSDBA）を設定できます。

優先接続情報リストを設定すると、管理対象のターゲットに接続するたびに、接続情報を要求されることはなくなります。

コンソールで設定した優先接続情報リストを使用すると、優先接続情報リストが必要なターゲットに対して、ジョブおよびイベント・システムを使用できます。コンソールで設定したログイン接続情報は、リポジトリ内では暗号化されます。

DBA Studio によって保存されるローカル優先接続情報リスト

DBA Studio には、DBA Studio のナビゲータ・ツリーに表示されるデータベースのリストが格納されています。これらのデータベースのいずれかの優先接続情報リストが指定されると、ユーザー名、暗号化されたパスワードおよびロールが、ローカル・ファイルに追加されます。

優先接続情報リストを保存または編集するオプションも用意されており、これによって、ユーザー名、パスワード、ロール（NORMAL、SYSOPER または SYSDBA）などのログイン情報を格納できます。パスワードは、必ず暗号化されて保存されます。データベースへの接続が確立したときに、その都度ユーザー名とパスワードを入力するのではなく、かわりにこのログイン情報が使用されます。

Oracle Enterprise Manager システムおよびハードウェアの要件

Oracle Enterprise Manager のコンポーネントは、管理環境によって異なるどのような構成でも実行できます。たとえば、各層を個別のマシンで実行することも、1 台のマシンで 3 つの層すべてを実行することもできます。

注意： Windows ベースのマシンの要件の例を次に示します。

Enterprise Manager のコンポーネントを個別のマシンで実行するには、次の要件を満たす必要があります。

クライアントのみ

コンソールと DBA Management Pack のみを実行するマシンの要件は、次のとおりです。

- Pentium 266MHz または SPARC 20
- 128MB RAM
- (NTFS の) ハード・ディスク空き容量 190MB。FAT の場合、NTFS の 4 倍のディスク領域が必要になることがあります。

クライアント / サーバー

1 台のマシンで Enterprise Manager のすべてのバンドル（コンソール、DBA Management Pack、Oracle Management Server およびデータベース・リポジトリ）を実行する場合のマシンの要件は、次のとおりです。

- Pentium II 400MHz または SPARC Ultra 1
- 256MB RAM
- (NTFS の) ハード・ディスク空き容量 190MB。FAT の場合、NTFS の 4 倍のディスク領域が必要になることがあります。190MB の中には、リポジトリを構成するために必要な 6 ～ 26MB が含まれます。リポジトリがどれだけ大きくなるかを予想するには、[付録 E 「リポジトリのサイズ設定」](#) を参照してください。

Web ブラウザで Enterprise Manager コンソールを実行するには、128MB の RAM が必要です。

Web サーバーから Enterprise Manager をダウンロードするには、50MB のディスク領域が必要です。

注意： この要件では、Enterprise Manager リポジトリに対してデータベースがすでに存在していると仮定しています。データベースがインストールされていない場合は、インストールする必要があります。Oracle データベースに対して推奨されるシステムおよびハードウェアの要件は、対象のデータベース・リリースのインストール・ガイドを参照してください。

デフォルトの Enterprise Manager パッケージ（各自の環境で 1 つの Oracle Management Server を使用するパッケージ）は、次の特性を持つ環境を最適にサポートするようにチューニングされています。

- 管理対象ノード数が最大 64
- 管理対象データベース・インスタンスまたはその他の管理対象ターゲットの数が最大 256（1 つのノードにおける管理対象ターゲット数は最大 10）
- 同時に使用されるコンソール数が最大 15

使用可能な Management Server 数が CPU により制限される（CPU の使用が限界になる）場合、さらに Management Server を追加して、Management Server を実行するノードの容量を増やすこともできます。

コンソール、ジョブまたはイベントの数が増加した場合にパフォーマンスを改善するには、リポジトリ・データベース・マシンのリソース容量を増やすことをお勧めします。

Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 の動作保証

Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 は、次のオペレーティング・システムで動作が保証されています。

- Windows 95
- Windows 98
- Windows NT、SP4 およびそれ以上
- Windows 2000
- Solaris 2.6
- Solaris 2.7

Management Server は、Windows 95 および Windows 98 では動作が保証されていません。

ブラウザベースの Oracle Enterprise Manager は、Windows 95、Windows 98、Windows NT および Windows 2000 のオペレーティング・システムでサポートされています。

Oracle Enterprise Manager 構成の概要

この後の各表では、様々な Enterprise Manager 構成に必要なステップを概説しています。

- [Oracle Enterprise Manager のクイック構成（クイック・スタート）](#)
- [大企業向けの Oracle Enterprise Manager の構成](#)
- [Oracle Enterprise Manager フレームワークおよび Management Pack のアップグレード](#)
- [リポジトリの移行](#)

関連するステップの詳細は、示された項に記載されています。

Oracle Enterprise Manager のクイック構成（クイック・スタート）

ほとんどの中小規模の環境では、次の構成を使用できます。中小規模の環境とは、管理対象ノードが 64 未満の環境です。

この構成では、中間層とクライアント層の Oracle Enterprise Manager コンポーネントが同じノード上に配置されます。

注意： 次の情報は、新規インストールに対して適用されます。旧 2.x リリースの Oracle Enterprise Manager フレームワークおよび Management Packs をリリース 2.2 にアップグレードする際のガイドラインは、1-17 ページの「[Oracle Enterprise Manager フレームワークおよび Management Pack のアップグレード](#)」を参照してください。

表 1-1 クイック・スタート — ターゲット・ノード層の構成

手順	参照先
<p>1. 管理対象のノードに Intelligent Agent がインストールされていることを確認します。インストールされていない場合、マシンに存在するデータベースの最上位バージョンと同じかそれより上位バージョンの Intelligent Agent をインストールします。</p> <p>Intelligent Agent のバージョンがデータベースのバージョンと同じ場合、両方を同じ ORACLE_HOME にインストールできます。そうでない場合は、Intelligent Agent を別の ORACLE_HOME にインストールする必要があります。</p>	対象のデータベース・リリースのインストール・ガイドを参照してください。
<p>2. Intelligent Agent を起動し、すべてのサービスが ORACLE_HOME/network/agent ディレクトリの services.ora ファイルに記録されていることを確認します。</p>	問題が発生した場合は、『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』で詳細を参照してください。

表 1-2 クイック・スタート — 中間層およびクライアント層の構成

手順	参照先
<p>1. Oracle Management Server リポジトリに既存のデータベースを使用するか、または新規の Oracle データベースをインストールして使用します。</p>	対象のデータベース・リリースのインストール・ガイドを参照してください。
<p>2. 新規の ORACLE_HOME に、Management Server をインストールし、Oracle Enterprise Manager クライアント・ソフトウェアをインストールします。</p> <p>データベース CD からインストールする場合は、インストール・タイプとして「Oracle8i Management and Integration」→「Oracle Management Server」を選択します。</p> <p>個別にライセンスを取得できるバック CD からインストールする場合は、インストール・タイプとして「Oracle Enterprise Manager Packs および管理インフラストラクチャ」を選択します。</p>	対象のデータベース・リリースのインストール・ガイド、または個別にライセンスを取得できるバックのインストール・ガイドを参照してください。
<p>3. インストールの終了時に、データベース内にリポジトリを作成します。選択したインストール・タイプによっては、Oracle Enterprise Configuration Assistant が自動的に実行されます。</p>	Oracle Enterprise Configuration Assistant を使用してリポジトリを作成する場合は、2-1 ページの「 リリース 2.2 のリポジトリの作成 」を参照してください。

表 1-2 クイック・スタート — 中間層およびクライアント層の構成（続き）

手順	参照先
4. Management Server が稼働していることを確認します。 注意： Management Server を起動する前に、リポジトリ・データベースを起動してオープンし、リスナーを起動しておく必要があります。そうしない場合、エラーが発生します。	3-1 ページの「 Management Server の管理 」を参照してください。
5. コンソール（クライアント）を起動し、ログイン時には同じノード上の Management Server を指定します。	6-2 ページの「 Enterprise Manager コンソールの起動 」を参照してください。

大企業向けの Oracle Enterprise Manager の構成

管理対象データベースおよびサービスが多数存在する大規模な環境では、次のような構成が最適です。大規模な環境とは、64 以上の管理対象ノードが管理される環境です。

注意： 次の情報は、新規インストールに対して適用されます。旧 2.x リリースの Oracle Enterprise Manager フレームワークおよび Management Packs をリリース 2.2 にアップグレードする際のガイドラインは、1-17 ページの「[Oracle Enterprise Manager フレームワークおよび Management Pack のアップグレード](#)」を参照してください。

表 1-3 大企業 — ターゲット・ノード層構成 — マシン A

手順	参照先
1. 管理対象のノードに Intelligent Agent がインストールされていることを確認します。インストールされていない場合、マシンに存在するデータベースの最上位バージョンと同じかそれより上位バージョンの Intelligent Agent をインストールします。 Intelligent Agent のバージョンがデータベースのバージョンと同じ場合、両方を同じ ORACLE_HOME にインストールできます。そうでない場合は、Intelligent Agent を別の ORACLE_HOME にインストールする必要があります。	対象のデータベース・リリースのインストール・ガイドを参照してください。
2. Intelligent Agent を起動し、すべてのサービスが ORACLE_HOME/network/agent ディレクトリの services.ora ファイルに記録されていることを確認します。	問題が発生した場合は、『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』で詳細を参照してください。

表 1-4 大企業 — 中間層（リポジトリ）構成 — マシン B

手順	参照先
<p>Oracle Management Server リポジトリに既存のデータベースを使用するか、または新規の Oracle データベースをインストールして使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 既存のデータベースを使用する場合は、Oracle Enterprise Configuration Assistant を使用してリポジトリを作成します。 ■ 新規のデータベースをインストールする場合は、インストールの終了時に、データベース内にリポジトリを作成します。選択したインストール・タイプによっては、Oracle Enterprise Configuration Assistant が自動的に実行されます。 	<p>対象のデータベース・リリースのインストール・ガイドを参照してください。</p> <p>Oracle Enterprise Configuration Assistant を使用してリポジトリを作成する場合は、2-1 ページの「リリース 2.2 のリポジトリの作成」を参照してください。</p>

表 1-5 大企業 — 中間層（Management Server）構成 — マシン C

手順	参照先
<p>1. 新規の ORACLE_HOME に Management Server をインストールします。</p> <p>データベース CD からインストールする場合は、インストール・タイプとして「Oracle8i Management and Integration」→「Oracle Management Server」を選択します。</p> <p>個別にライセンスを取得できるパック CD からインストールする場合は、インストール・タイプとして「Oracle Enterprise Manager Packs および管理インフラストラクチャ」→「カスタム」→「Oracle Management Server」を選択します。</p>	<p>対象のデータベース・リリースのインストール・ガイド、または個別にライセンスを取得できるパックのインストール・ガイドを参照してください。</p>
<p>2. Oracle Enterprise Configuration Assistant を実行して、既存リポジトリを管理するように Management Server を設定します。</p>	<p>B-8 ページの「構成パラメータの編集」を参照してください。</p>
<p>3. Management Server が稼働していることを確認します。</p> <p>注意： Management Server を起動する前に、リポジトリ・データベースを起動してオープンし、リスナーを起動しておく必要があります。そうしない場合、エラーが発生します。</p>	<p>3-1 ページの「Management Server の管理」を参照してください。</p>

表 1-6 大企業 — クライアント層構成 — マシン D

手順	参照先
新規の ORACLE_HOME に Oracle Enterprise Manager クライアント・ソフトウェアをインストールします。	対象のデータベース・リリースのインストール・ガイド、または個別にライセンスを取得できるパックのインストール・ガイドを参照してください。
データベース CD からインストールする場合は、インストール・タイプとして「Oracle8i Client」→「管理者」を選択します。	
個別にライセンスを取得できるパック CD からインストールする場合は、インストール・タイプとして「Oracle Enterprise Manager Packs および管理インフラストラクチャ」を選択します。	
コンソール（クライアント）を起動し、ログイン時に Management Server を指定します。	6-2 ページの「 Enterprise Manager コンソールの起動 」を参照してください。

注意： 複数のクライアントを同時に実行する場合は、複数のクライアントにクライアント・ソフトウェアをインストールしてください。

表 1-7 大企業 — 中間層（追加の Management Server）構成 — マシン E、F、...

手順	参照先
1. 現行の Management Server への負荷が大きすぎる場合、別のマシンに追加の Management Server をインストールします。 データベース CD からインストールする場合は、インストール・タイプとして「Oracle8i Management and Integration」→「Oracle Management Server」を選択します。 個別にライセンスを取得できるパック CD からインストールする場合は、インストール・タイプとして「Oracle Enterprise Manager Packs および管理インフラストラクチャ」→「カスタム」→「Oracle Management Server」を選択します。	対象のデータベース・リリースのインストール・ガイド、または個別にライセンスを取得できるパックのインストール・ガイドを参照してください。
2. 各マシンで Oracle Enterprise Configuration Assistant を実行して、既存リポジトリを管理するように Management Server を設定します。	
3. Management Server が稼働していることを確認します。 注意： Management Server を起動する前に、リポジトリ・データベースを起動してオープンし、リスナーを起動しておく必要があります。そうしない場合、エラーが発生します。	4-1 ページの「 Management Server の追加 」を参照してください。 3-1 ページの「 Management Server の管理 」を参照してください。

Oracle Enterprise Manager フレームワークおよび Management Pack のアップグレード

旧 2.x リリースの Oracle Enterprise Manager フレームワーク（コンソール、Management Server、リポジトリおよび Intelligent Agent）および Management Pack をリリース 2.2 にアップグレードする場合、後述の順序で実行してください。

重要： Enterprise Manager コンソール、DBA Management Pack、個別にライセンスを取得できるパック、Management Server およびリポジトリでは、すべて同じリリースを使用してください。たとえば、リリース 2.2 のコンソールでリリース 2.1 の Management Server およびリポジトリを使用することも、リリース 2.1 のパックでリリース 2.2 の Management Server およびリポジトリを使用することもできません。

現在の Management Server およびリポジトリが以前のバージョンである場合は、それらを最新バージョンに移行またはアップグレードできます。Management Server およびリポジトリをリリース 2.2 に移行またはアップグレードする場合には、リポジトリで使用するすべての Enterprise Manager 製品がリリース 2.2 となるようにしてください。たとえば、Diagnostics Pack リリース 2.1 または Change Management Pack リリース 2.1 を使用したまま、Management Server およびリポジトリをリリース 2.2 にアップグレードしないでください。

表 1-8 フレームワークおよび Management Pack のアップグレード

手順	参照先
1. Oracle Enterprise Manager コンソール、Management Server、DBA Studio、その他の個別にライセンスを取得できるインストール済パックを含めて、すべてのコンポーネントをアップグレードします。	対象のデータベース・リリースのインストール・ガイド、および個別にライセンスを取得できるパックのインストール・ガイドを参照してください。
2. リポジトリをリリース 2.x からリリース 2.2 にアップグレードします。Intelligent Agent 以外のすべての Oracle Enterprise Manager コンポーネントが Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 にアップグレードされるまで、リポジトリ更新はスケジュールしないでください。	B-2 ページの「 リリース 2.0 または 2.1 のリポジトリからリリース 2.2 のリポジトリへのアップグレード 」を参照してください。

表 1-8 フレームワークおよび Management Pack のアップグレード（続き）

手順	参照先
<p>3. 管理対象ノードごとに、Intelligent Agent をリリース 8.1.7 にアップグレードします。</p> <p>注意： リリース 8.1.7 の Intelligent Agent が新規のホームにインストールされている場合は、その新規ホームに .Q ファイルをコピーする必要があります。</p> <p>注意： Intelligent Agent および Agent Data Gatherer のコンポーネントは最後にアップグレードしてください。これは、Intelligent Agent がリリース 8.1.7 にアップグレードされると、Management Server などの 2.2 以前のコンポーネントが Intelligent Agent を無効であるとみなすためです。</p>	<p>C-1 ページの「Intelligent Agent および Data Gatherer のアップグレード」を参照してください。</p>
<p>4. 収集のために構成したノードごとに、Agent Data Gatherer をリリース 8.1.7 にアップグレードします。</p>	<p>C-1 ページの「Intelligent Agent および Data Gatherer のアップグレード」を参照してください。</p>

リポジトリの移行

Oracle Enterprise Manager リリース 1.x のリポジトリ・スキーマは、Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 の共有リポジトリ・スキーマとは異なります。Enterprise Manager リリース 1.x では、各管理者が個別のリポジトリ・スキーマを持っており、そこにネットワーク内の現行のビューとユーザー固有の情報が格納されていました。Enterprise Manager リリース 2.2 では、1 つの共有リポジトリ・スキーマに、それぞれの管理者がアカウントを持ち、アカウントの中に作業環境が保存されています。

リリース 1.x の各リポジトリは、別々に新規のリリース 2.2 のリポジトリに移行してください。

次の手順では、リポジトリを移行するための基本ステップを説明します。

表 1-9 リリース 2.2 の新しいリポジトリの作成

手順	参照先
1. Oracle Management Server リリース 2.2 の新規リポジトリに既存のデータベースを使用するか、または新規の Oracle データベースをインストールして使用します。	対象のデータベース・リリースのインストール・ガイドを参照してください。
2. 新規の ORACLE_HOME に、Management Server、Enterprise Manager Migration Assistant および Oracle Enterprise Manager クライアント・ソフトウェアをインストールします。 データベース CD からインストールする場合は、インストール・タイプとして「Oracle8i Management and Integration」→「Oracle Management Server」を選択します。 個別にライセンスを取得できるバック CD からインストールする場合は、インストール・タイプとして「Oracle Enterprise Manager Packs および管理インフラストラクチャ」を選択します。	対象のデータベース・リリースのインストール・ガイド、または個別にライセンスを取得できるバックのインストール・ガイドを参照してください。
3. インストールの終了時に、データベース内にリリース 2.2 の新しいリポジトリを作成します。選択したインストール・タイプによっては、Oracle Enterprise Configuration Assistant が自動的に実行されます。	Oracle Enterprise Configuration Assistant を使用してリポジトリを作成する場合は、2-1 ページの「 リリース 2.2 のリポジトリの作成 」を参照してください。
4. リリース 2.2 の Management Server が稼働していることを確認します。 注意： Management Server を起動する前に、リリース 2.2 のリポジトリ・データベースを起動してオープンし、リスナーを起動しておく必要があります。そうしない場合、エラーが発生します。	3-1 ページの「 Management Server の管理 」を参照してください。
5. リリース 2.2 のコンソール（クライアント）を起動し、ログイン時には同じノード上の Management Server を指定します。	6-2 ページの「 Enterprise Manager コンソールの起動 」を参照してください。

表 1-10 移行の準備

手順	参照先
1. 管理者アカウントを作成します。	6-5 ページの「 管理者アカウントの作成 」を参照してください。
2. リリース 1.x のコンソールの全サービスをリフレッシュします。	リリース 1.x の『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。
3. リリース 1.x のコンソールを停止します。	リリース 1.x の『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。
4. リリース 2.2 の Management Server を停止します。	3-1 ページの「 Management Server の管理 」を参照してください。
5. リリース 1.x の既存のリポジトリをバックアップします。	エクスポート・ユーティリティの詳細は、『Oracle8i ユーティリティ・ガイド リリース 2 (8.1.6)』を参照してください。

表 1-11 リリース 1.x のリポジトリからリリース 2.2 のリポジトリへの移行

手順	参照先
リリース 2.2 の Oracle Enterprise Manager Migration Assistant を実行して、リリース 1.x の環境で使用しているデータを、1 つまたは複数のプライベート・リポジトリからリリース 2.2 の新しいリポジトリの特定のユーザーに移行します。	7-1 ページの「 リリース 1.x のリポジトリからリリース 2.2 のリポジトリへの移行 」を参照してください。

リリース 2.2 のリポジトリの作成

Oracle Enterprise Manager のリポジトリには、管理対象の環境についての状態情報、および Management Pack についての情報が格納されています。クライアントと管理対象ノードの間で分散制御が実現されている場合は、リポジトリは、Oracle Management Server でバックエンドの格納場所として使用されます。

リリース 2.0 では、Enterprise Manager Configuration Assistant で、ベースの Oracle Enterprise Manager 製品に対するリポジトリのみが作成されました。その他のリポジトリ・パーツは、必要な場合にのみ作成されていました。

リリース 2.1 以降では、Oracle Enterprise Manager のすべての製品に対してリポジトリが作成されます。後でリポジトリにコンポーネントを追加する必要はありません。Enterprise Manager Configuration Assistant では、Oracle Enterprise Manager のリポジトリは 1 つのエンティティと見なされます。1 つのリポジトリを作成すると、他の製品をインストールしているかどうかに関係なく、リポジトリのすべての部分が作成されます。

注意： リポジトリ・データベースの推奨される `init.ora` 設定の詳細は、2-16 ページの「[リポジトリ・データベースで推奨される init.ora 設定](#)」を参照してください。

この設定は、リポジトリの作成前でも作成後でも変更できます。

Enterprise Manager Configuration Assistant は、データベース管理者によるリポジトリ作成、削除、アップグレードおよび構成パラメータのメンテナンスを支援します。リポジトリはスキーマです。各リポジトリは異なるスキーマであるため、1 つのデータベース内に複数のリポジトリを配置できます。

リリース 2.0 または 2.1 のリポジトリを使用している場合に、リリース 2.2 のリポジトリへアップグレードするには、B-2 ページの「[リリース 2.0 または 2.1 のリポジトリからリリース 2.2 のリポジトリへのアップグレード](#)」を参照してください。リリース 2.2 より前の既存リポジトリは、インストール時に自動的にアップグレードされません。

注意： Intelligent Agent 以外のすべての Oracle Enterprise Manager コンポーネントが Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 にアップグレードされるまで、リポジトリ更新はスケジュールしないでください。旧 2.x リリースの Oracle Enterprise Manager フレームワークおよび Management Packs をリリース 2.2 にアップグレードする際のガイドラインは、1-17 ページの「[Oracle Enterprise Manager フレームワークおよび Management Pack のアップグレード](#)」を参照してください。

Enterprise Manager のリリース 1.x を使用している場合に、リリース 1.x のリポジトリをリリース 2.2 のリポジトリへ直接移行するには、リリース 2.2 のリポジトリを作成した後で、Enterprise Manager Migration Assistant を使用して追加のステップを実行する必要があります。リリース 1.x の 1 つ以上のリポジトリをリリース 2.2 の共有リポジトリ・スキーマへ移行する場合の詳細は、[第 7 章「リリース 1.x のリポジトリからリリース 2.2 のリポジトリへの移行」](#)を参照してください。

重要： Enterprise Manager コンソール、DBA Management Pack、個別にライセンスを取得できるパック、Management Server およびリポジトリでは、すべて同じリリースを使用してください。たとえば、リリース 2.2 のコンソールでリリース 2.1 の Management Server およびリポジトリを使用することも、リリース 2.1 のパックでリリース 2.2 の Management Server およびリポジトリを使用することもできません。Enterprise Manager リリース 2.2 の製品では、リリース 2.2 の Management Server およびリポジトリを使用してください。具体的な製品には、次のものがあります。

- Oracle Enterprise Manager コンソール
- Oracle DBA Management Pack (Management Server モード)
- Oracle Tuning Pack
- Oracle Diagnostics Pack
- Oracle Change Management Pack
- Oracle Management Pack for Oracle Applications
- Oracle Standard Management Pack

現在の Management Server およびリポジトリが以前のバージョンである場合は、それらを最新バージョンに移行またはアップグレードできます。Management Server およびリポジトリをリリース 2.2 に移行またはアップグレードする場合には、リポジトリで使用するすべての Enterprise Manager 製品がリリース 2.2 となるようにしてください。たとえば、Diagnostics Pack リリース 2.1 または Change Management Pack リリース 2.1 を使用したまま、Management Server およびリポジトリをリリース 2.2 にアップグレードしないでください。使用するリリース 2.2 パックのソフトウェアを取得する前に Management Server とリポジトリをリリース 2.2 にアップグレードすると、以前のパック製品は使用できなくなります。

リリース 2.2 の新しいリポジトリの作成

Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 のリポジトリは、リリース 1.x のリポジトリとは異なります。Enterprise Manager リリース 1.x では、各管理者が独自のリポジトリ・スキーマを持っており、そこにネットワーク内の現行のビューとユーザー固有の情報が格納されています。Enterprise Manager リリース 2.2 では、1 つの共有リポジトリ・スキーマに、それぞれの管理者のアカウントと作業環境が格納されます。すべての管理データが中央リポジトリに格納されるため、管理者は、他のデータベース管理者が監視するものも含めて、ジョブ定義を共有し、ネットワーク内のすべてのマシンの状態を取得できます。

次のいずれかのインストール・シナリオを実行している場合は、インストール後構成フェーズで Enterprise Manager Configuration Assistant が自動的に起動されます。

- 「Oracle8i Enterprise Edition 8.1.7.0.0」 → 「カスタム」
- 「Oracle8i Management and Integration 8.1.7.0.0」 → 「Oracle Management Server」
- 「Oracle8i Management and Integration 8.1.7.0.0」 → 「カスタム」

「Oracle8i Enterprise Edition」 → 「標準」のインストールを実行している場合は、Enterprise Manager Configuration Assistant は自動的に起動されません。このタイプのインストールでは、リポジトリを作成、削除、編集または更新するには、Enterprise Manager Configuration Assistant を手動で起動する必要があります。

(インストール後構成時かスタンドアロン・モードかにかかわらず) リリース 2.2 の新しいリポジトリを作成するために Enterprise Manager Configuration Assistant を起動すると、Enterprise Manager Configuration Assistant では次のタスクが実行されます。

- Enterprise Manager および Management Pack のリポジトリの所有者となる、新しいデータベース・ユーザーを作成します。
- 新しいデータベースに、適切な権限とロールを割り当てます。
- Enterprise Manager および Management Pack のリポジトリに対して新しい表領域を作成するか、使用可能な場合は既存の表領域を使用します。
- ユーザーのデフォルト表領域および一時表領域を設定します。
- Oracle Enterprise Manager の実行時に必要な情報をリポジトリにロードします。
- ローカル Management Server 構成ファイル
ORACLE_HOME/sysman/config/omsconfig.properties を作成または更新（あるいはその両方）します。
- システムで実行されるコンソールの接続先の Management Server リストに Management Server が含まれるように、クライアント・レジストリに必要な情報を入力します。

- Oracle Management Service が存在しているかどうかを確認します（Windows NT および Windows 2000 のみ）。存在しない場合、Oracle Management Server サービスが作成されます。存在する場合は、新たな Oracle Management Server サービスは作成されません。
- Management Server サービスを起動し、サービスを「手動」に設定します（Windows NT および Windows 2000 のみ）。

Enterprise Manager Configuration Assistant の起動

注意： Oracle Enterprise Manager リポジトリ・スキーマを作成する前に、必ずデータベースをインストールし、実行しておいてください。

Enterprise Manager Configuration Assistant を起動するには、次のステップを実行します。

- Windows NT および Windows 2000 の場合

Windows の「スタート」メニュー→「プログラム」→
「Oracle-<Oracle_Home_Name>」→「Enterprise Manager」→「Configuration Assistant」を選択して、Enterprise Manager Configuration Assistant を起動します。

また、コマンド行から次のコマンドを使用しても、Enterprise Manager Configuration Assistant を起動できます。

```
emca
```

- UNIX の場合

コマンド行から次のコマンドを使用して、Enterprise Manager Configuration Assistant を起動します。

```
emca
```

注意： emca コマンドを実行するには、omsconfig.properties ファイルの所有者（このファイルに対する許可を持つユーザー）としてログインする必要があります。

ステップ1「構成操作」

Enterprise Manager Configuration Assistant をスタンドアロン・アプリケーションとして起動すると、「構成操作」ページが表示されます。

インストール・セッションから Configuration Assistant を起動し、インストール・ダイアログ・ボックスから新しいリポジトリを作成するように選択すると、構成操作の画面は表示されません。「リポジトリのデータベースを選択」画面が表示されます。この場合は、2-7 ページのステップ 2 に進んでください。

リポジトリ操作のリストから、「新規リポジトリの作成」を選択し、「次へ」を押します。「リポジトリのデータベースを選択」ページが表示されます。

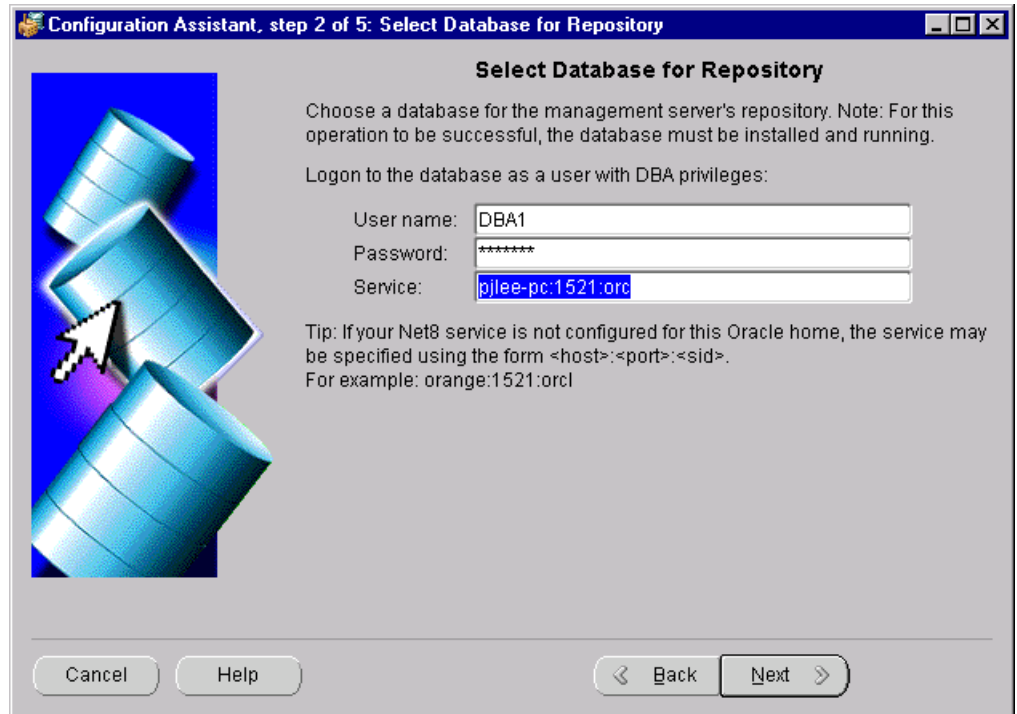
図 2-1 「構成操作」



ステップ 2 「リポジトリのデータベースを選択」

リポジトリを作成するデータベースにログインします。

図 2-2 「リポジトリのデータベースを選択」



リポジトリを作成する場合には、次の条件に適合するデータベースを選択してください。

- データベースは常に使用できる状態となっている必要があります。
- データベースが他の管理者によって停止されないようにします。
- データベースが、稼働中のマシン上で他のリソースと競合しないようにします。

ユーザー名とパスワード： データベースには DBA 権限を持つユーザーとして接続してください。新規のユーザーをデータベース内に作成する必要が生じたときに、リポジトリが組み込まれ、Configuration Assistant でそのデータベース / リポジトリの照会ができるように、Enterprise Manager Configuration Assistant では DBA アカウントが要求されます。

これは個人のデータベース・ユーザー・アカウントで、Oracle Enterprise Manager 管理者アカウントではありません。

たとえば、`system/manager` を使用します。

サービス： サービスは、次の形式で指定します。

`<host>:<port>:<sid>`

ここで

`host` は、データベースが格納されるマシン名を表します。

`port` は、データベース・リスナーのポート・アドレスで、通常は 1521 または 1526 となります。

`sid` は、データベースのシステム ID を表します。

例：

`my_em_machine:1521:em22`

このように指定すると、`my_em_machine` マシンでポート 1521 を使用して `em22` データベースに接続します。

注意： サービスは `<host>:<port>:<sid>` のように指定することをお勧めしますが、Net8 クライアントが適切に構成されていれば、Net8 の名前を使用することもできます。

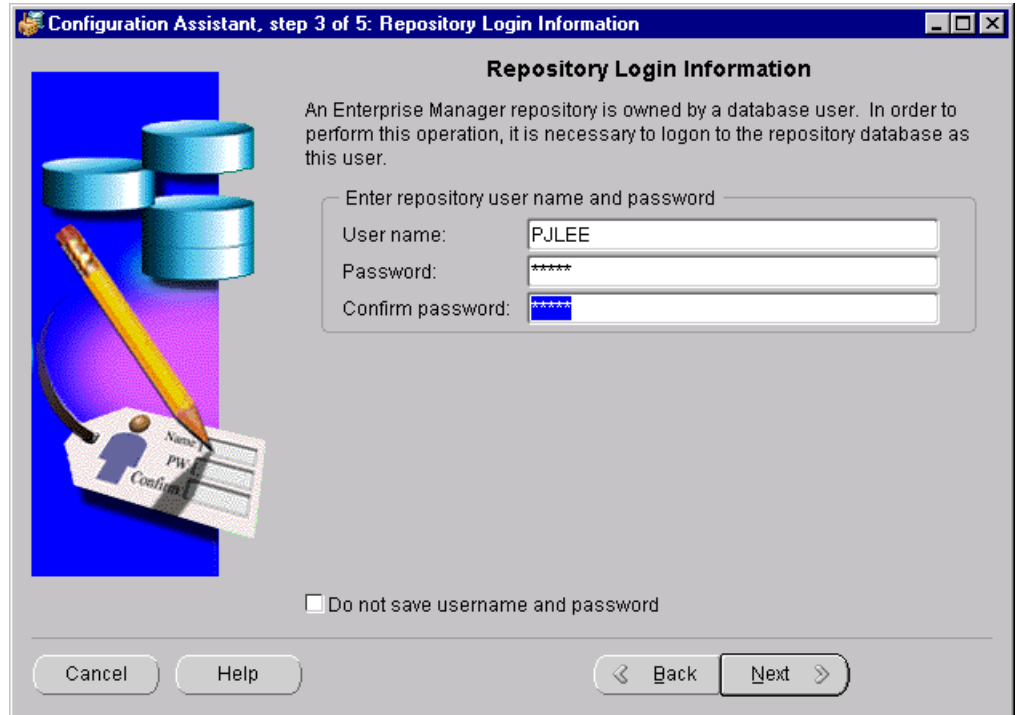
「次へ」を押して、操作を継続します。

エラー・メッセージの詳細は、D-14 ページの「[Enterprise Manager Configuration Assistant のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

ステップ3 「リポジトリへのログイン情報」

Enterprise Manager リポジトリの所有者は、データベース・ユーザーです。リポジトリの作成時に、Enterprise Manager Configuration Assistant は、このページで指定するユーザー名とパスワードを使用して、リポジトリの所有者であるデータベース・ユーザー（リポジトリ・スキーマ・ユーザー）を作成します。

図 2-3 「リポジトリへのログイン情報」



Configuration Assistant, step 3 of 5: Repository Login Information

Repository Login Information

An Enterprise Manager repository is owned by a database user. In order to perform this operation, it is necessary to logon to the repository database as this user.

Enter repository user name and password

User name: PJLEE

Password: *****

Confirm password: *****

☐ Do not save username and password

Cancel Help Back Next

ユーザー名： リポジトリのユーザー名を指定します。リポジトリの所有者となるデータベース・ユーザーが、この名前で作成されます。リポジトリ・ユーザー名は、ネットワーク全体で一意的な名前にしてください。マシンの TCP/IP ホスト名は一意的であると考えられるため、これがデフォルトとして使用されます。別の名前を選択する場合は、それが一意であることを確認してください。

Intelligent Agent では、各 Management Server はそのリポジトリ名で識別されます。異なるデータベース内に同名のリポジトリが 2 つ存在する場合、Intelligent Agent が Management Server に接続する際に問題が発生します。

パスワード： ユーザーのパスワードを入力します。

パスワード確認： パスワードをもう一度入力して確認します。

ユーザー名および暗号化されたパスワードを、`omsconfig.properties` ファイルに保存するかどうかを選択できます。保存された内容は、起動時に Management Server によって読み込まれます。これらのリポジトリ接続情報がファイルに格納されていれば、Management Server はこの情報を使用してリポジトリにログインします。

Windows NT および Windows 2000 では、リポジトリ接続情報が保存されていない場合、Management Server を起動するときに「コントロール パネル」の「スタートアップパラメータ」にリポジトリ接続情報を入力できます。「スタートアップパラメータ」フィールドにリポジトリ接続情報を入力しない場合は、ダイアログでリポジトリ接続情報を入力するように要求されます。

UNIX では、リポジトリ情報が保存されていない場合、Management Server の起動前にユーザー名およびパスワードを入力するように要求されます。

ユーザー名および暗号化されたパスワードを `omsconfig.properties` ファイルに保存しない場合は、「ユーザー名とパスワードを保存しない」チェックボックスを選択してください。リポジトリ接続情報を格納しないオプションは、セキュア Management Server モードといいます。

リポジトリ・アカウント情報は、リポジトリ・スキーマ内のメンテナンス操作（作成、アップグレードまたは削除など）を実行する場合に使用されます。

リポジトリ・スキーマ・ユーザーに必要なロールおよび権限は、次のとおりです。

- ロール： CONNECT
- 権限： CREATE TRIGGER、CREATE PROCEDURE、EXECUTE ANY PROCEDURE および SELECT ANY TABLE

セキュリティの問題や、Oracle Enterprise Manager 外部のオブジェクトへの不要なアクセスが発生しないようにするため、リポジトリ・スキーマ・ユーザーに必要以上の権限を付与しないでください。

ステップ4「リポジトリ・ユーザー表領域を選択」

次の場合には、「リポジトリ・ユーザー表領域を選択」ページは表示されません。

- リポジトリ・ユーザーが存在し、完全かつ最新の Enterprise Manager リポジトリがそれに含まれている場合
または
- 次のようなときに、Enterprise Manager Configuration Assistant がインストール・セッションから実行されている場合
 - OEM_REPOSITORY 表領域がすでに存在する場合、かつ
 - OEM_REPOSITORY 表領域に適切なサイズ属性が定義されている場合

注意： Oracle Enterprise Manager のリポジトリを、SYSTEM（具体的には製品データベースの SYSTEM 表領域）、ROLLBACK または TEMPORARY 表領域にインストールしないでください。

SYSTEM 表領域で使用する表領域パラメータ設定は、Oracle Enterprise Manager で使用するには適切ではありません。SYSTEM 表領域は、system エントリに対してのみ使用してください。ツール、ユーザーおよび（Oracle Enterprise Manager などの）管理製品は、他の表領域に格納されます。

ROLLBACK 表領域は、ロールバック・セグメントの作成で使います。Oracle ユーザー・プロセスは、ロールバック・セグメントを使用してロールバック情報を保存します。

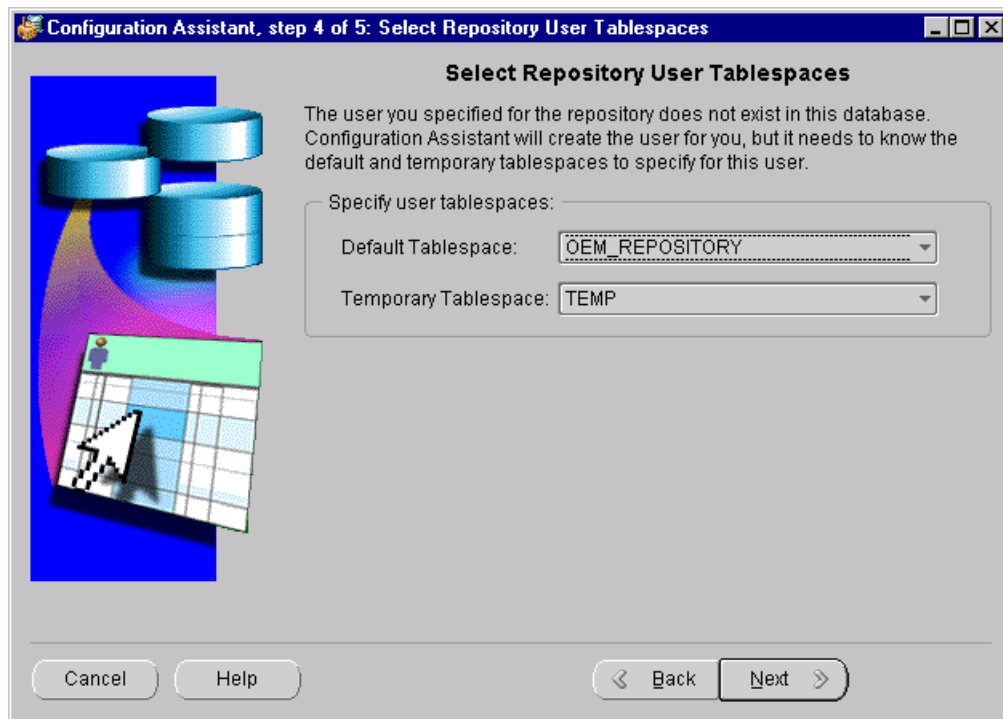
TEMPORARY 表領域は、ユーザーの TEMPORARY 表領域に割り当てられ、Oracle ユーザー・プロセスによって一時領域として使われます。データベースの稼働中は、これら 2 つの表領域の使用率が変化します。TEMPORARY 表領域は、ユーザーの一時表領域として使うことができません。

Configuration Assistant では、SYSTEM 表領域は一時表領域としてもデフォルト表領域としても使えません。

詳細は、『Oracle8i 概要』を参照してください。

スタンドアロン・モードでは、OEM_REPOSITORY 表領域がすでに存在している場合に、「リポジトリへのログイン情報」ページでリポジトリを管理するユーザーとは異なるリポジトリ・ユーザー名を入力すると、「サービス "<service>" でユーザー "<user>" が所有するリポジトリを管理するように変更しますか。」というエラー・メッセージが表示されます。「はい」または「いいえ」ボタンをクリックすると、次の画面が表示されます。

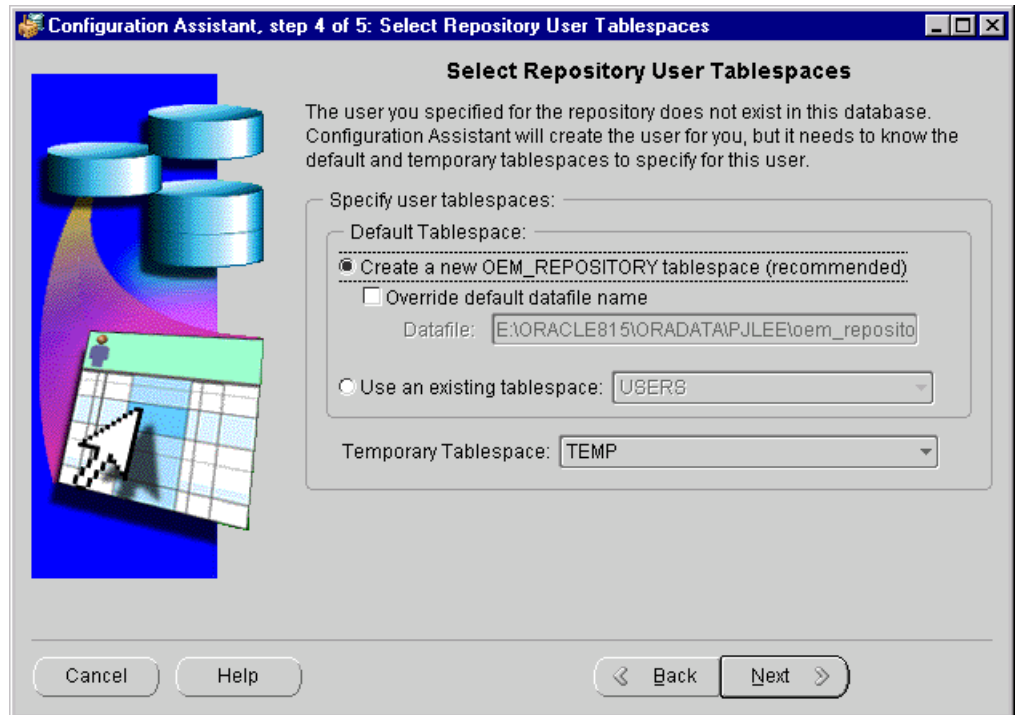
図 2-4 OEM_REPOSITORY が存在する場合の「リポジトリ・ユーザー表領域を選択」



Enterprise Manager のリポジトリで使用するデフォルトの一時表領域を選択します。

OEM_REPOSITORY 表領域が存在しない場合は、次の画面が表示されます。

図 2-5 OEM_REPOSITORY が存在しない場合の「リポジトリ・ユーザー表領域を選択」



デフォルト表領域：

- 新規の OEM_REPOSITORY 表領域の作成（推奨）
OEM_REPOSITORY 表領域を作成する場合は、このオプションを選択します。これは、Enterprise Manager のリポジトリに対して特別な特性を持つ表領域で、リポジトリ・ユーザーのデフォルト表領域として使用されます。
- デフォルトのデータファイル名の上書き
OEM_REPOSITORY 表領域のデータファイルのデフォルト名を変更する場合は、このチェックボックスを選択します。通常、これは推奨されません。
- 既存の表領域を使用
プルダウン・リストから、既存の表領域を選択します。

一時表領域

プルダウン・リストから一時表領域を選択します。

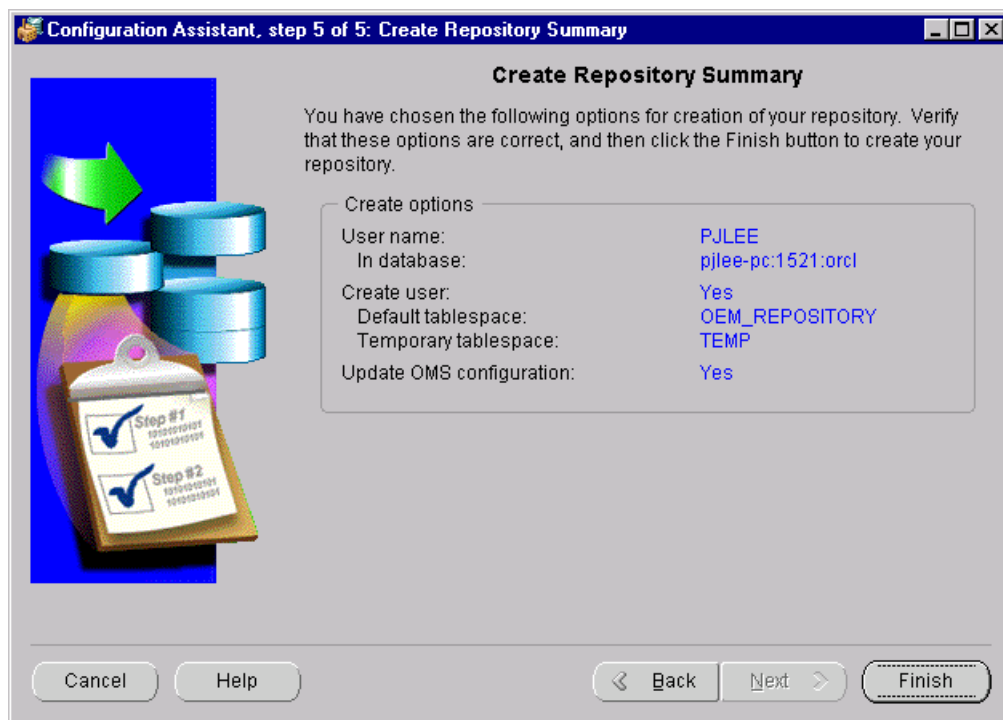
「次へ」をクリックして処理を続行します。

Enterprise Manager Configuration Assistant で、リポジトリのデフォルト表領域に必要な空き領域があることが確認されると、「リポジトリ作成のサマリー」ページが表示されます。それ以外の場合は、エラーが表示されます。

ステップ5「リポジトリ作成のサマリー」

「リポジトリ作成のサマリー」ページが表示され、実行する処理のサマリーが示されます。「リポジトリを作成」ウィザードの処理で提供された情報が正しいことを確認します。

図 2-6 「リポジトリ作成のサマリー」



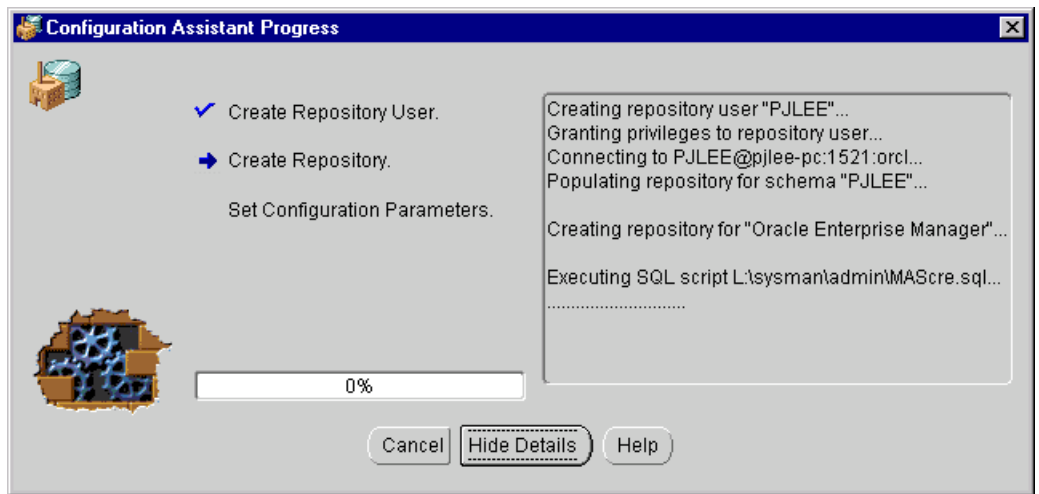
「完了」をクリックしてリポジトリの作成を開始するか、または「戻る」をクリックして、前のページに戻って設定を変更します。

「完了」ボタンをクリックすると、「Configuration Assistant の進行」ウィンドウが表示され、実行された処理と、実行中の操作の処理ステップが表示されます。

ステップ 6 「Configuration Assistant の進行」ウィンドウ

処理の詳細情報（発生した可能性のあるエラーなど）が必要な場合は、「詳細を表示」ボタンをクリックし、ダイアログ・ボックスを拡張してテキスト領域を表示してください。「詳細を非表示」ボタンをクリックすると、詳細情報を非表示にすることができます。

図 2-7 「Configuration Assistant の進行」



結果のいかんにかかわらず、処理が完了すれば、「取消」ボタンは「閉じる」ボタンに変わります。

エラーなくすべてのステップが完了した場合、「処理完了」メッセージが表示されます。

「取消」ボタンをクリックすれば、要求された操作を完了前に取り消せます。

注意： 処理の進行中にリポジトリの作成を取り消すと、リポジトリは不正な状態になります。このような場合は、Enterprise Manager Configuration Assistant を使用してリポジトリを削除します。

Configuration Assistant を終了するには、「閉じる」ボタンをクリックします。

リポジトリの作成に失敗した場合、リポジトリを削除し、omsconfig.properties に適切なトレース・プロパティを追加して Management Server のトレースをオンにし、再びリポジトリ作成手順を実行します。Management Server のトレースおよびロギングの詳細は、D-4 ページの「[Management Server のトレースとロギング](#)」を参照してください。

リポジトリの削除の詳細は、B-6 ページの「[既存リポジトリの削除](#)」を参照してください。

リポジトリ・データベースで推奨される init.ora 設定

この設定は、リポジトリの作成前でも作成後でも変更できます。

リポジトリ・データベースで推奨される init.ora 設定は、次のとおりです。この設定は、特に Oracle Enterprise Manager Events システムを使用する場合に推奨されます。

- sessions = 200
- open_cursors = 200
- db_block_buffers = 23040
- log_buffer = 524288
- sort_area_size = 262144
- sort_area_retailed_size = 262144
- shared_pool_reserved_size = 0
- db_block_lru_latches = 2

上の設定で init.ora ファイルを編集した後に、変更を有効にするには、データベースを停止して再起動してください。

特定のサイトに対してはチューニングが必要になることがあります。また、このような場合、個別にライセンスを取得できる Oracle Tuning Pack の一部として組み込まれた Oracle Expert を使用することをお勧めします。

Management Server の管理

Management Server は、クライアントと管理対象ノード間の制御の分散を実現します。通知の中央エンジンである Management Server では、すべてのシステム管理作業の処理と、これらの作業の企業全体での分散管理が行われます。

この章の内容は、次のとおりです。

- [Management Server の起動](#)
- [Management Server のステータスのチェック](#)
- [Management Server の停止](#)
- [Management Server のチューニング](#)

Management Server の起動

Management Server を起動する前に、リポジトリ・データベースを起動してオープンし、リスナーを起動しておく必要があります。

Management Server を起動するには、次のステップを実行します。

注意： Oracle Enterprise Manager では、ローカル・マシンからのリモート Management Server の停止または起動はサポートされていません。

Windows NT または Windows 2000 での Management Server の起動

Windows NT または Windows 2000 で Management Server を起動するには、次の手順に従います。

1. 「スタート」メニュー→「設定」→「コントロール パネル」を選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックします。
2. リポジトリの作成時に、リポジトリ接続情報を保存するように選択していない場合（セキュア Management Server モードと呼ばれる）は、Management Server の起動時に、データベース・ユーザーの作成に使用されたりポジトリのユーザー名とそのユーザーのパスワードを「コントロール パネル」の「スタートアップパラメータ」フィールドに入力できます。「スタートアップパラメータ」フィールドは、サービス・リストの下にあります。データベース・ユーザーおよびパスワードは、<username>/<password> の形式で指定してください。

「コントロール パネル」の「スタートアップパラメータ」フィールドに無効または不完全なリポジトリ接続情報を入力した場合、Management Server は起動されず、エラー・メッセージが表示されます。

セキュア・モードの場合、「スタートアップパラメータ」フィールドにリポジトリ接続情報を入力しないと、後でダイアログで情報を入力するように要求されます。

Management Server が起動されない場合のトラブルシューティングの詳細は、D-10 ページの「[Management Server が起動されない場合](#)」を参照してください。

3. 「Oracle<Oracle_Home_Name>ManagementServer」サービスを選択します。
4. 「スタートアップ」ボタンをクリックして、「サービス」ダイアログ・ボックスを表示します。

注意： ステップ 4 は、サービスを起動するたびではなく、1 回だけ実行してください。

- a. 「スタートアップの種類」セクションで「自動」または「手動」を選択し、Management Server サービスをどのように起動するかを指定します。「手動」を選択した場合は、ユーザーが Management Server を起動します。「自動」を選択すると、システムを起動するたびに Management Server が自動的に起動されます。「無効」を選択した場合は、Management Server を起動できません。デフォルトでは、Configuration Assistant によりサービスは「手動」に設定されます。
- b. 「ログオン」セクションで、次の設定を確認します。
 - * 「システム アカウント」オプションが選択されていることを確認します。このオプションは、Management Server を実行するためにサポートされている方法です。ローカル・アカウントを使用する場合、Management Server は稼働しません。

- * 「デスクトップとの対話をサービスに許可」ボックスが選択されていることを確認します。選択されていない場合、Management Server は稼働しません。

5. 「起動」ボタンをクリックして、Management Server を起動します。

注意： リポジトリの作成時に、Enterprise Manager Configuration Assistant をインストール・セッションから起動し、リポジトリ接続情報を保存するように選択した場合は、Management Server サービスはリポジトリ作成時に Windows NT または Windows 2000 で自動的に起動され、「手動」に設定されます。

リポジトリ接続情報を保存しないように選択した場合は、Management Server の起動時に「コントロール パネル」の「サービス」内の「スタートアップ パラメータ」フィールドにリポジトリ接続情報を入力できます。「スタートアップ パラメータ」フィールドにリポジトリ接続情報を入力しない場合は、ダイアログでリポジトリ接続情報を入力するように要求されます。

UNIX での Management Server の起動

UNIX で Management Server を起動するには、コマンド行から次のように入力します。

```
% oemctrl start oms
```

リポジトリの構成時に、リポジトリ接続情報を保存しないように選択した場合は、(データベース・ユーザーの作成で使用された) リポジトリのユーザー名、およびそのユーザーのパスワードを、接続情報を要求された際に入力します。リポジトリ所有者の定義の詳細は、2-9 ページの「[ステップ 3 「リポジトリへのログイン情報」](#)」を参照してください。

注意： ORACLE_HOME 環境変数が、Management Server が稼働している Oracle ホームに設定されていると、Management Server は、正しい Oracle ホームではなく、デフォルトの Oracle ホームでクラス・ファイルを探そうとするため、Management Server は正しく起動されません。Oracle 環境の設定の詳細は、D-9 ページの「[Management Server がデフォルト以外の Oracle ホームから正しく実行できない場合](#)」を参照してください。

Management Server のステータスのチェック

Management Server が実行されているか停止しているかをチェックするには、オペレーティング・システムのプロンプトで次のように入力します。

```
% oemctrl ping oms
```

Management Server のステータスをチェックするには、オペレーティング・システムのプロンプトで、次のように入力します。

```
% oemctrl status oms
```

Oracle Enterprise のスーパー管理者のユーザー名とパスワードを入力するよう要求されます。Oracle Enterprise Manager のスーパー管理者の定義の詳細は、1-7 ページの「[管理ユーザーとは](#)」を参照してください。

リモート Management Server のステータスをチェックする場合は、Management Server が稼働しているマシンのホスト名も指定する必要があります。

Management Server のステータスをチェックすると、次の情報が示されます。

- Management Server 全体のステータス
- Management Server が実行されてからの経過時間
- Management Server のパフォーマンスに関する統計

たとえば、次のような出力が示されます。

```
OEMCTRL for Windows NT: Version 2.2.0.0.0
```

```
Copyright (c) 1998, 2000, Oracle Corporation. All rights reserved.
```

```
Oracle Server Version null
```

```
Loaded njssl8 shared object
```

```
Loading njssl8 dll
```

```
In OracleSSLSocketImpl Static portion
```

```
The Oracle Management Server on host [pjlee-pc2.us.oracle.com] is functioning properly.
```

```
The server has been up for 0 09:08:37.734
```

```
Target database session count: 1 (session sharing is off)
```

```
Operations queued for processing: 0
```

```
Number of OMS systems in domain: 1 (pjlee-pc2)
```

```
Number of administrators logged in: 1
```

```
Repository session pool depth: 15
```

```
Repository session count: 7 in-use and 3 available, pool efficiency: 100%
```


パラメータの詳細は、次のセクションを参照してください。

- Target database session count

Target database session count は、セッション内のターゲット・データベースの数を示します。

- Operations queued for processing

Operations queued for processing は、処理を待機しているアクティビティの数を示します。

- Number of OMS systems in domain

Number of OMS systems in domain は、企業内で稼働している Management Server の数を示します。

- Number of administrators logged in

Number of administrators logged in は、システムにログインした Enterprise Manager 管理者の数を示します。

- Repository session pool depth

Repository session pool depth は、Oracle Management Server により使用されているセッション数を示します。システムの全体の状態は、システム上のユーザーおよびアクティビティの数に依存します。

デフォルトでは、コンソールで使用するセッション数は最大 3 つです。件数が 3 の場合、通常はセッションが解除されるのを待たなくても操作（ジョブまたはイベントの発行）を実行できます。

コンソールが Management Server に接続するときには使用できる有効セッションの数は 15 です。1 つのコンソール接続について 3 つのセッションが必要になるため、セッション・プールの深さが 15 の場合には 5 つのコンソール接続が許可され、それぞれの接続で 3 つのセッションが使用されます。コンソール接続の数が減少した場合、セッション・プールの深さ限度は 15 のまま変わりません。コンソール接続の数が増加した場合、セッション・プールの深さ限度は内部的に増加します。

オーバーヘッド・セッション数の最適な値を判断するには、後述の式を使用してください。

同時ユーザーの数が多いほど、使用可能なセッション数も多くする必要があります。セッション数の計算には、次の式を使用します。

1.1 × 3 × 頻繁に操作を実行するユーザーの数

1.1 は、値が絶対数 3 にならないように余剰値を計算するための係数です。

3 は、設定するオーバーヘッド数です。

頻繁に操作を実行するユーザーの数は、同時ユーザーの数です。

たとえば、次のようになります。ユーザー数が 1 の場合、式は $1.1 \times 3 \times 1 = 3.3$ となり、3 セッションで十分になります。

ユーザー数が 4 の場合、式は $1.1 \times 3 \times 4 = 13.2$ となります。13 は、すべてのユーザーが間断なくイベントまたはジョブを登録している場合のオーバーヘッド・セッションの数です。それ以外の場合は、オーバーヘッドは 3 で十分です。

- Repository session count
リポジトリ・セッションの数です。

Management Server の停止

注意： 各自のマシンにローカルに設定されていない Management Server (つまりリモート Management Server) の停止はサポートされていません。

Management Server を停止するには、次のステップを実行します。

Windows NT または Windows 2000 の場合

1. 「スタート」メニュー→「設定」→「コントロール パネル」を選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックします。
2. 「Oracle<Oracle_Home_Name>ManagementServer」サービスを選択します。
3. 「停止」ボタンをクリックして、Management Server を停止します。

Oracle Enterprise のスーパー管理者のユーザー名とパスワードを入力するよう要求されます。Oracle Enterprise Manager のスーパー管理者の定義の詳細は、1-7 ページの「[管理ユーザーとは](#)」を参照してください。

UNIX の場合

コマンド行で、次のように入力します。

```
% oemctrl stop oms
```

Oracle Enterprise のスーパー管理者のユーザー名とパスワードを入力するよう要求されます。Oracle Enterprise Manager のスーパー管理者の定義の詳細は、1-7 ページの「[管理ユーザーとは](#)」を参照してください。

Management Server のチューニング

企業が多数のノードを管理しているような特殊な環境では、Management Server をチューニングしてパフォーマンスを向上させる必要があります。次の Management Server 構成パラメータを設定すると、チューニングを実行できます。

- `oms.vdp.ping_interval`
- `oms.vdg.max_out_conns`
- `oms.vdg.max_in_conns`
- `oms.repository.connect_timeout`
- `oms.repository.connect_numTries`

`omsconfig.properties` ファイルを編集した後に変更を有効にするには、Management Server をいったん停止してから再起動してください。

ping 間隔の設定

Management Server は、すべてのターゲットに対して定義済の間隔で ping を実行し、すべての管理対象ターゲットの状態を監視するように設計されています。

ping を実行する間隔を管理するには、`omsconfig.properties` ファイルで次のプロパティを使用して、ping の間隔を設定します。

```
oms.vdp.ping_interval=<integer; time in minutes; default 2>
```

ノードの動作 / 停止テストが含まれているイベントで設定したポーリング頻度に関係なく、この間隔の設定によって、Management Server がノードの動作 / 停止をテストする間隔（分）が決まりますので注意してください。

時間のデフォルトは 2 です。多数のノード（64 個以上）を管理する Management Server の場合、このパラメータを調整して、すべてのノードに対して ping を実行するのに十分な時間を Management Server に提供します。

最大発信接続数の設定

Management Server は、異なる Intelligent Agent への同時接続数を一定に維持できるように設計されています。

同時発信接続数を管理するには、`omsconfig.properties` ファイルで次のプロパティを使用します。

```
oms.vdg.max_out_conns =<integer; default 64>
```

デフォルトは 64 です。パフォーマンスが低下しないように、この値は、Management Server で管理されるノード数と同じか、それより大きく設定することをお勧めします。管理対象ノードの最大数が 64 未満の場合は、デフォルト値を適用することをお勧めします。管理対象ノードの最大数が 64 以上の場合は、値をノード数と同じに設定してください。

最大着信接続数の設定

Management Server は、同時着信接続数を一定に維持できるように設計されています。

同時着信接続数を管理するには、omsconfig.properties ファイルで次のプロパティを使用します。

```
oms.vdg.max_in_conns=<integer; default 32>
```

パフォーマンスが低下しないように、この値は oms.vdg.max_out_conns の値の半分に設定することをお勧めします。

Management Server 再試行間隔の設定

Management Server は、定義済の間隔で再試行するように設計されています。

再試行間隔を指定するには、omsconfig.properties ファイルで次のプロパティを使用して、再試行間隔を設定します。

```
oms.repository.connect_timeout=<time in seconds>
oms.repository.connect_numTries=<integer>
```

oms.repository.connect_timeout は、Management Server がリポジトリ・データベースの起動を待機する最大時間（秒）です。

oms.repository.connect_numTries は、Management Server サービスの起動前に Management Server がリポジトリに接続試行する最大回数です。

再試行間隔は、oms.repository.connect_timeout の値を oms.repository.connect_numTries の値で割った値です。

デフォルトでは、プロパティは次のように設定されます。

```
oms.repository.connect_timeout=120
oms.repository.connect_numTries=12
```

Management Server は、起動時に 10 秒間隔で合計 12 回、リポジトリ接続を試行します。

Management Server の追加

複数の Oracle Management Server がある環境では、複数の Management Server で同じリポジトリを共有します。

この章では、既存のリポジトリを管理するために Management Server を設定または追加する方法を示し、複数の Management Server が必要になる理由を説明します。

注意： 既存のリポジトリを管理するために、Management Server を設定、または追加する必要がない場合は、この章を省略して先に進んでください。

ネットワーク内のノード数および管理対象のサービス数が増加した場合、または既存の Management Server がオーバーロードになった場合には、中間層に Oracle Management Server を追加してワークロードを分散し、平均化することができます。

Oracle Management Server を複数使用することにより、互いの耐障害性が確保されます。1 つの Oracle Management Server に障害が発生しても、他のサーバーは引き続き稼働します。障害が発生した Management Server に登録されているクライアントは、ただちにログインし直し、同じリポジトリを使用または共有している他の Management Server のいずれかに登録すれば、残っている使用可能な Oracle Management Server で作業を継続できます。障害が発生したサーバー以外の Oracle Management Server に登録するように構成されているクライアントは、障害の影響を受けません。

使用可能な Management Server 数が CPU により制限される（CPU の使用が限界になる）場合、さらに Management Server を追加して、Management Server を実行するノードの容量を増やすこともできます。

注意： 同じリポジトリに接続する Management Server はすべて、同じ DNS ドメイン内に置く必要があります。

追加の Management Server のインストール

特定のマシンで Oracle Management Server を実行する場合は、そのマシンに Oracle Management Server ソフトウェアをインストールしておく必要があります。

詳細な手順は、対象のデータベース・リリースのインストレーション・ガイドを参照してください。

追加の Management Server の設定

新しい Management Server を追加する場合には、Enterprise Manager Configuration Assistant を実行して、対象ノードの構成ファイルを更新する必要があります。

Enterprise Manager Configuration Assistant の起動の詳細は、2-5 ページの「[Enterprise Manager Configuration Assistant の起動](#)」を参照してください。

ステップ 1 「構成操作」

Enterprise Manager Configuration Assistant を起動すると、「構成操作」ページが表示されます。

構成操作のリストから「構成パラメータの編集」を選択し、「次へ」を押して操作を続けます。「構成パラメータ」ページが表示されます。

ステップ 2 「構成パラメータ」

必要に応じてパラメータを変更します。

ユーザー名

このマシンの Management Server で使用する、既存リポジトリのユーザー名を入力します。

パスワード

上のユーザー名のパスワードを入力します。この情報は、Management Server が次回起動するときに使用されます。

パスワードを変更する場合、「確認」フィールドもそれにあわせて変更してください。

サービス

リポジトリが存在するサービスを入力します。

この情報は、このマシンの Management Server が次回起動するときに使用されます。無効な情報があると、Management Server は起動しません。

ユーザー名とパスワードを保存しない

ユーザー名および暗号化されたパスワードを、omsconfig.properties ファイルに保存するかどうかを選択できます。保存された内容は、起動時に Management Server によって読み込まれます。ユーザー名および暗号化されたパスワードがファイルに格納されている場合、Management Server はその情報を使用してリポジトリにログインします。

Windows NT または Windows 2000 では、リポジトリ接続情報が保存されていない場合、Management Server を起動するときに「コントロールパネル」の「サービス」内の「スタートアップパラメータ」にリポジトリ接続情報を入力できます。「スタートアップパラメータ」フィールドにリポジトリ接続情報を入力しない場合は、ダイアログでリポジトリ接続情報を入力するように要求されます。

UNIX では、リポジトリ情報が保存されていない場合、Management Server の起動前にユーザー名およびパスワードを入力するように要求されます。

ユーザー名とパスワードを保存しない場合は、「ユーザー名とパスワードを保存しない」チェックボックスを選択してください。リポジトリ接続情報を格納しないオプションは、セキユア Management Server モードといいます。

注意： 次のページに進むには、このページのパラメータを少なくとも 1 つ変更する必要があります。何も変更せずに「次へ」ボタンを押すと、「構成パラメータは変更されていません。変更するか、取り消してください。」というエラー・メッセージが表示されます。この場合、Enterprise Manager Configuration Assistant では、次のページに移動できません。

ステップ 3 「構成パラメータを変更」

「構成パラメータを変更」ページには、構成パラメータ変更ウィザード操作時に指定した全情報のサマリーが表示されます。「完了」をクリックして変更を開始するか、または「戻る」をクリックして前のページに戻り、設定を変更します。

Intelligent Agent の起動および停止

Oracle Intelligent Agent は、ネットワーク内のリモート・ノードで実行されるプロセスです。Oracle Enterprise Manager は、ネットワークで Intelligent Agent と連携して動作し、Intelligent Agent が常駐するノードで実行されているサービスの検出、イベントの監視、ジョブの実行、およびリアルタイム・パフォーマンス監視と履歴分析のためのランタイム・データの収集を行います。Intelligent Agent を実行するプラットフォームは、Oracle Enterprise Manager 中間層と Intelligent Agent 間の TCP/IP 通信が可能であれば、Oracle Enterprise Manager フレームワークと統合できます。

Intelligent Agent に関するトラブルシューティングの詳細は、『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Management Server に対してローカルな Intelligent Agent は、起動されていれば、Management Server が起動されると自動的に検出されます。分散サービスを検出するには、それらのサービスが存在するノードの Intelligent Agent を起動する必要があります。

この章の内容は、次のとおりです。

- [Windows NT または Windows 2000 での Oracle Intelligent Agent の起動および停止](#)
- [UNIX での Oracle Intelligent Agent の起動および停止](#)

Enterprise Manager をインストールまたは使用する前に、『Oracle Enterprise Manager 日本語リリース・ノート』の Intelligent Agent 互換表を確認してください。

Windows NT または Windows 2000 での Oracle Intelligent Agent の起動および停止

この項には、Windows NT または Windows 2000 の「コントロール パネル」およびコマンド・プロンプトからの Intelligent Agent の制御に関する情報が記載されています。

注意： Oracle Enterprise Manager および Intelligent Agent は、Net8 を使用してデータベースと通信します。Intelligent Agent を使用できるかどうか確認する前に、Net8 がそれぞれの SID と接続できることを確認してください。

Windows NT または Windows 2000 での Intelligent Agent の起動

Windows NT または Windows 2000 で Intelligent Agent を起動するには、次のステップを実行します。

1. 「スタート」メニュー→「設定」→「コントロール パネル」を選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックします。
2. 「Oracle<Oracle_Home_Name>Agent」サービスを選択します。
3. 「起動」ボタンをクリックして、Intelligent Agent を起動します。

Intelligent Agent の「スタートアップの種類」は「自動」に設定されており、システムの起動時に、Intelligent Agent が自動的に起動されます。ユーザーが Intelligent Agent を起動するには、「スタートアップの種類」を「手動」に設定します。

1. 「スタート」メニュー→「設定」→「コントロール パネル」を選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックします。
2. 「Oracle<Oracle_Home_Name>Agent」サービスを選択します。
3. 「スタートアップ」ボタンをクリックします。「サービス」ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. 「スタートアップの種類」で「手動」を選択します。
5. 「サービス」ダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。

Windows NT または Windows 2000 での Intelligent Agent の停止

Windows NT または Windows 2000 で Intelligent Agent を停止するには、次のステップを実行します。

1. 「スタート」メニュー→「設定」→「コントロール パネル」を選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックします。
2. 「Oracle<Oracle_Home_Name>Agent」サービスを選択します。
3. 「停止」ボタンをクリックして、Intelligent Agent を停止します。

Windows NT または Windows 2000 での Intelligent Agent の実行の確認

Intelligent Agent が実行中であることを確認するには、「コントロール パネル」の「サービス」でステータスを検索するか、コマンド・プロンプトで `net start` と入力します。サービスのリストに、Oracle<Oracle_Home_Name>Agent が表示されます。

「Windows NT タスク マネージャ」を表示して、`dbnmp.exe` プロセスの情報を参照することもできます。

コマンド・プロンプトからの起動、停止およびステータスの確認

コマンド・プロンプトから Intelligent Agent を起動または停止するには、適切なコマンドを入力します。コマンド・プロンプトからは、サービスが稼働中であることも確認できます。

目的	入力するコマンド
プロンプトから Intelligent Agent を起動	<code>net start Oracle<Oracle_Home_Name>Agent</code>
プロンプトから Intelligent Agent を停止	<code>net stop Oracle<Oracle_Home_Name>Agent</code>
プロンプトから Intelligent Agent のステータスを確認	<code>net start</code>

注意： Windows NT または Windows 2000 では、Intelligent Agent を起動するのに `lsnrctl` コマンドを使用しないでください。このコマンドはサポートされていません。Windows NT または Windows 2000 では、`net` コマンドを使用してください。

UNIX での Oracle Intelligent Agent の起動および停止

UNIX では、Oracle Enterprise Manager は `lsnrctl` コマンドを使用して Intelligent Agent を起動および停止します。UNIX Intelligent Agent を制御するための関連する `lsnrctl` コマンドは、次のとおりです。

目的	入力するコマンド
UNIX プラットフォームでの Intelligent Agent の起動	<code>lsnrctl dbsnmp_start</code>
UNIX プラットフォームでの Intelligent Agent の停止	<code>lsnrctl dbsnmp_stop</code>
Intelligent Agent のステータスの確認	<code>lsnrctl dbsnmp_status</code>

また、コマンド・プロンプトで `ps -ef | grep dbsnmp` と入力しても Intelligent Agent のステータスを検査できます。

注意： Intelligent Agent の停止および起動は、Intelligent Agent ソフトウェアの所有者が行ってください。そうしない場合、Intelligent Agent の内部情報の作成時に許可問題が発生する可能性があります。

コンソールの設定

Oracle Enterprise Manager コンソールは、管理者用のグラフィカル・インタフェースです。コンソールからは、次のタスクを実行できます。

- 複数のデータベースの集中的な管理、診断およびチューニング
- Oracle 製品およびデータベース以外のサービスの管理
- 使用している Oracle 製品ファミリおよびサードパーティ・サービスの状態の、1 日 24 時間にわたる効率的な監視と対応
- 複数のノードで実行されるジョブの、様々な間隔によるスケジュール
- ネットワーク・サービスでのイベントの監視
- データベースやその他のサービスを論理的な管理グループごとにまとめて、表示をカスタマイズ

この章の内容は、次のとおりです。

- [Enterprise Manager コンソールの起動](#)
- [サービスの検出](#)
- [管理者アカウントの作成](#)
- [Web ブラウザからの Oracle Enterprise Manager の実行](#)
- [イベント・システムの設定](#)
- [ジョブ制御システムの設定](#)
- [ポケットベル・サービスの構成および起動](#)
- [電子メール通知およびポケットベル通知の設定](#)
- [Management Server 接続にダイヤルアップ回線を使用する場合のコンソールの構成](#)
- [バックアップまたは SYSDBA 管理のためのリモート・データベースの構成](#)
- [日付書式の設定](#)

Enterprise Manager コンソールの起動

コンソールでは、強力かつ確実なシステム管理を実現する直観的なグラフィカル・ユーザー・インタフェース（GUI）により、Oracle 環境を一元的に制御できます。

リポジトリを作成して、Management Server と Intelligent Agent を起動すると、Enterprise Manager コンソールを起動できるようになります。

Enterprise Manager コンソールを起動するには、次のステップを実行します。

1. Enterprise Manager コンソールを起動します。

- Windows プラットフォームの場合

「スタート」メニュー→「Oracle-<Oracle_Home_Name>」→「Enterprise Manager」で「コンソール」を選択します。

コンソールは、コマンド行で

```
oemapp console
```

と入力しても起動できます。

- UNIX の場合

コマンド行で、次のように入力します。

```
oemapp console
```

コマンド文字列は大文字・小文字が区別されるので、小文字で入力してください。

注意： Web ブラウザから Enterprise Manager を起動することもできます。Enterprise Manager Web サイトのインストール、および Web ブラウザを設定して Enterprise Manager を実行する方法の詳細は、6-6 ページの「[Web ブラウザからの Oracle Enterprise Manager の実行](#)」を参照してください。

Oracle Enterprise Manager ログイン画面が表示され、管理者名とパスワードを入力するように要求されます。

2. Oracle Enterprise Manager に初めてログインする場合は、デフォルトの接続情報（管理者名とパスワード）を入力します。

管理者 = sysman

パスワード = oem_temp

これらの接続情報は、デフォルトのスーパー管理者アカウントのもので、Enterprise Manager を最初に起動する場合は、スーパー管理者としてログインしてください。スーパー管理者アカウントを使用して別の管理者アカウントがすでに作成されている場合は、別の管理者としてログインできます。

3. プルダウン・リストから、Management Server が稼働しているノード名を選択します。選択したノード上の Management Server は、アクセスするリポジトリで構成されている必要があります。

注意： このステップを実行する前に、Management Server をインストールして構成しておく必要があります。

Management Server が稼働しているノード名がプルダウン・リストに表示されない場合、次の手順に従います。

- a. 「Management Server」フィールドの右側にある「Management Server」ボタンをクリックします。「Management Server」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- b. 「追加」ボタンをクリックします。「Management Server の追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- c. Management Server が稼働しているノード名を指定して、「OK」をクリックします。
- d. プルダウン・リストから、Management Server が稼働しているノード名を選択します。

注意： Oracle Enterprise Manager によりノード名が解決され、マシンの標準名が使用されることがあります。以降のダイアログ画面では、この名前が使用されます。たとえば、orange-pc という名前は orange-pc.us.oracle.com という名前に変更される場合があります。

4. 最初にログインしたときに、セキュリティ・ログインのダイアログ・ボックスが表示され、ここでデフォルトのスーパー管理者パスワードを変更できます。パスワードはただちに変更してください。

注意： パスワードは、半角英数字 8 文字までです。

最初にコンソールを起動すると、検出ウィザードが表示されます。これを使用して、ネットワーク・サービスを識別し、コンソールのナビゲータ・ツリーに簡単に移入できます。

サービスの検出

Oracle Enterprise Manager には、ネットワーク・サービスを識別し、コンソールのナビゲータ・ツリーに移入するための、サービスの検出ウィザードがあります。データベースやリスナーなどのサービスは、Enterprise Manager のコンポーネントによって管理できます。

Management Server が稼働しているマシンに Intelligent Agent がインストールされていて稼働している場合、コンソールの起動時には、そのマシンで管理可能なサービスが自動的に検出されます。コンソールのナビゲータには、Management Server マシンで検出されたサービスがすべて表示されます。

その他のノードを検出するには、次のようにします。

1. コンソールの「ナビゲータ」メニューで「ノードの検出」を選択します。
2. 検出ウィザードが表示された場合は、イントロダクションを確認し、「次へ」を押して処理を続行します。
3. 「ノードの指定」ページが表示された場合は、テキスト・ウィンドウにノード名または IP アドレスを指定します。テキスト・ウィンドウに、検出するノードまたは IP アドレスを、空白、カンマ、タブで区切るか、または改行して入力すると、複数ノードのサービスを一度に検出できます。「次へ」をクリックして処理を続行します。
4. 「進行」ページが表示され、ノード検出の状態が示されます。ノードが正常に検出された場合は、チェックマークが表示されます。ノードの検出に失敗した場合は、「X」が表示されます。エラーが発生した場合、エラーの理由を説明するエラー・テキストが表示され、処理を続行するのに必要な情報が示されます。検出プロセスが終了した後で、「完了」ボタンをクリックします。
5. 「検出結果」ダイアログ・ボックスが表示され、自動的に検出された、または検出されなかったノードが示されます。「OK」ボタンをクリックして、ダイアログ・ボックスを取り消します。

ノードで自動検出に失敗した場合は、「進行」ページの「次へ」ボタンをクリックします。「エラー」ページが表示され、ここで失敗したノードに対して、再試行、スキップまたは手動による検出を行うかどうかを選択できます。

検出に失敗したノードの一部で Intelligent Agent が稼働している場合は、そのノードをナビゲータに追加し、手動検出を使用してそのノードにデータベースを追加できます。データベースのみが追加されます。手動検出では、次の情報を入力するように要求されます。

- データベース名
- SID
- 通信に使用する TCP/IP ポート

手動で追加したノードに対しては、ジョブをスケジュールすることも、イベントを登録することもできません。このノードの情報を収集するには、別のノードの Data Gatherer を使用します。

注意： 手動で検出されたノードは、自動検出を行う前にナビゲータ・ツリーから削除しておく必要があります。

ノードが検出できない場合は、そのノードが停止していないか、またはノードで Intelligent Agent が稼働しているかを確認してください。また、TCP/IP ネットワーク・プロトコルを使用しているかどうかを確認します。サービスの検出の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

注意： 同じ名前のサービスが2つ以上検出された場合、サービス・タイプに関係なく、検出されたサービスの一方のみがナビゲータに表示されます。

管理者アカウントの作成

Enterprise Manager リリース 2.2 は、複数管理者システムです。つまり、Enterprise Manager を使用してシステムを管理する人それぞれが、コンソールへのログインに使用する管理者アカウントを持ちます。

Enterprise Manager をインストールすると、sysman という名前のスーパー管理者が1つ作成されます。スーパー管理者 sysman は、「システム」メニューの「管理者の管理」項目を使用して管理者を作成できます。各アカウントには、管理者名とパスワードの他に、スーパー管理者アカウントであるか、またはジョブまたはイベント（あるいはその両方）のみにアクセスできるアカウントであるかを指定できます。この2種類のアカウントには、次のような違いがあります。

- **スーパー管理者**には、すべてのオブジェクトに対する完全な権限が自動的に設定されます。大部分のスーパー管理者は、日常的な操作用に別のアカウントも持ちますが、Management Server の起動および停止、Oracle Enterprise Manager の新規管理者の作成、ポケットベル・サーバーの構成、または他の管理者のスケジュール・チェックなど、スーパー管理者のみが実行できる特別な操作にはスーパー管理者アカウントを使用します。日常の管理作業での sysman アカウントの使用は、お薦めできません。スーパー管理者アカウントは、UNIX の root または Windows NT または Windows 2000 の Administrator のように、削除も名前変更もできないユーザーです。これは、どのようなタスクも実行できるユーザーです。このため、このアカウントは、環境を設定する場合にのみ使用してください。必要な DBA アカウントを作成した後は、sysman を使用しないでください。
- **通常の管理者**は、コンソールの他のすべての操作に完全にアクセスできますが、参照し、変更できるのは、アクセス権のあるジョブ、イベントまたはグループに限られます。

通常、すべての管理者が Enterprise Manager リリース 2.2 のリポジトリ 1 つを共有するため、管理者どうして情報を共有できます。複数のリポジトリを設定できますが、異なるリポジトリを使用する管理者は他の管理者の情報にアクセスできないため、リポジトリ間でのデータの共有はできません。リポジトリに格納されている管理データは、管理者の持つ許可に基づいてフィルタ処理されます。

管理者アカウントごとに、優先接続情報リストを設定する必要があります。管理者がナビゲータまたはスタンドアロン・アプリケーションを介して接続する場合、その管理者に定義された優先接続情報リストが使用されます。

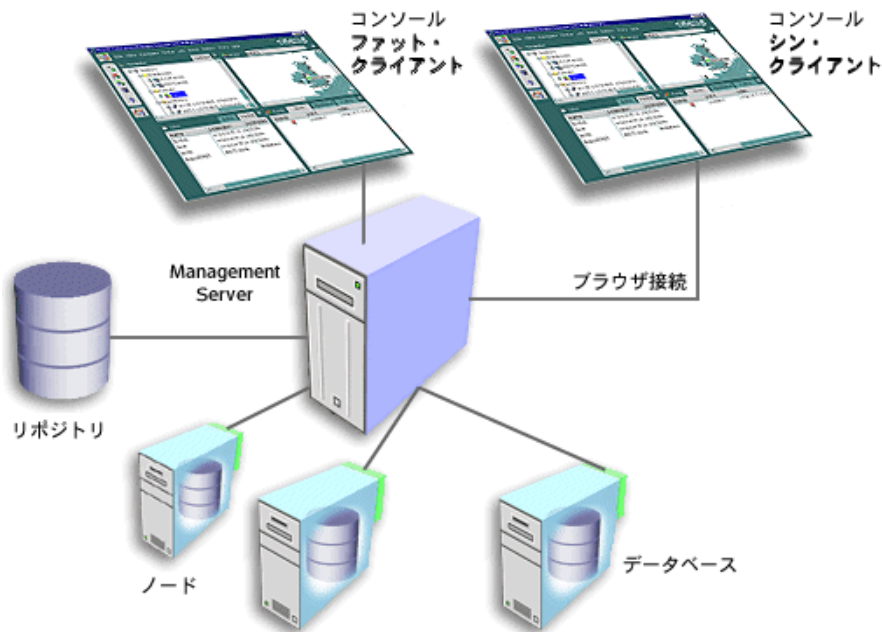
コンソールの「システム」メニューの「管理者の管理」で、Enterprise Manager の管理者を作成、編集および削除する方法の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

Web ブラウザからの Oracle Enterprise Manager の実行

Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 では、管理者は、任意のマシンでサービスを管理できます。管理者は、Oracle Enterprise Manager を、ファット・クライアントまたはシン・クライアントとして実行できます。

注意： ブラウザベースの Oracle Enterprise Manager は、Windows 2000、Windows NT、Windows 95 および Windows 98 のオペレーティング・システムでサポートされています。

図 6-1 クライアントのタイプ



ファット・クライアントは、ローカルにインストールされている Oracle Enterprise Manager ファイルを使用します。シン・クライアントは、Web ブラウザを使用して、Oracle Enterprise Manager ファイルがインストールされている Web サーバーに接続します。いずれのタイプのクライアントでも、使用できる機能は同じです。つまり、管理者はファット・クライアントまたはシン・クライアントのどちらからでも、同じ管理タスクを行うことができます。ただし、Oracle Enterprise Manager の製品ファミリのすべてのコンポーネントが、Web ブラウザでサポートされているわけではありません。詳細は、次の表を参照してください。

製品	ブラウザで 実行可	ブラウザで実行 不可
Oracle Enterprise Manager コンソール	○	
Oracle DBA Management Pack	○	
Oracle Diagnostics Pack または Oracle Management Pack for Oracle Applications で使用できる Oracle Advanced Events	○	
Oracle Tuning Pack		○
Oracle Diagnostics Pack		○

製品	ブラウザで 実行可	ブラウザで実行 不可
Oracle Change Management Pack		○
Oracle Management Pack for Oracle Applications		○
Oracle Standard Management Pack		○
Oracle Parallel Server Manager（統合アプリケーション）	○	

注意： Oracle Parallel Server Manager は、Web ブラウザからの実行をサポートする唯一の統合アプリケーションです。

Web ブラウザから Oracle Enterprise Manager を実行するには、次のインストールおよび構成ステップを実行します。

例 1 クライアント・インストール

Web ブラウザをインストールします。

サポートされている Web ブラウザは、次のとおりです。

- Netscape Navigator 4.7 以上（Windows 2000、Windows NT、Windows 95 および Windows 98）
- Microsoft Internet Explorer 5.0 以上（Windows 2000、Windows NT、Windows 95 および Windows 98）

注意： Microsoft Active Desktop から実行されている Microsoft Internet Explorer の使用はサポートされていません。

例 2 サーバー側インストール

1. Web サーバーを実行しようとするノード上の Oracle Enterprise Manager ホームに、oem_webstage という名前のディレクトリまたはフォルダがあるか確認します。

このディレクトリが Oracle Enterprise Manager ホームにあれば、Enterprise Manager Web サイトはすでにインストールされています。そうでない場合、次のいずれかのインストールを実行する必要があります。
 - 「Oracle8i Enterprise Edition 8.1.7.0.0」 → 「カスタム」
 - 「Oracle8i Management and Integration 8.1.7.0.0」 → 「Oracle Management Server」

- 「Oracle8i Management and Integration 8.1.7.0.0」 → 「カスタム」

対象のデータベース・リリースのインストール・ガイドを参照してください。

Oracle Enterprise Manager Web サイトには、Oracle Enterprise Manager コンソール、DBA Management Pack、統合アプリケーション、Quick Tour、英語ドキュメントおよび英語 Readme のファイルがインストールされます。

2. デフォルトで Enterprise Manager にパッケージされた Oracle HTTP Server がすでにインストールされている場合、次のステップを実行して開始します。

Windows NT または Windows 2000 の場合

Oracle HTTP Server を起動するには、次のようにします。

- a. 「スタート」メニュー → 「設定」 → 「コントロール パネル」を選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックします。
- b. 「OracleHTTPServer_<Oracle_Home_Name>」 サービスを選択します。
- c. 「起動」 ボタンをクリックして、Oracle HTTP Server を起動します。

UNIX の場合

コマンド行から次のコマンドを使用して、Oracle HTTP Server を起動できます。

```
$Oracle_Home/Apache/Apache/bin/apachectl start
```

Oracle HTTP Server を停止するには、次のステップを実行します。

Windows NT または Windows 2000 の場合

Windows NT または Windows 2000 で Oracle HTTP Server を停止するには、次のステップを実行します。

- a. 「スタート」メニュー → 「設定」 → 「コントロール パネル」を選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックします。
- b. 「OracleHTTPServer_<Oracle_Home_Name>」 サービスを選択します。
- c. 「停止」 ボタンをクリックして、Oracle HTTP Server を停止します。

UNIX の場合

コマンド行から次のコマンドを使用して、Oracle HTTP Server を停止できます。

```
$Oracle_Home/Apache/Apache/bin/apachectl start
```

3. デフォルトで Enterprise Manager にパッケージされた Oracle HTTP Server をインストールしていない場合は、サポートされている Web サーバーをインストールし、そのディレクトリ・マッピングを構成する必要があります。

Oracle HTTP Server 以外の Web サーバーを使用する場合は、次の Web サーバーがサポートされています。

- Apache 1.3.9 以上 (UNIX)
- Internet Information Server (IIS) 4.0 (Windows NT または Windows 2000)

前述の Web サーバーを構成する方法の詳細は、[付録 F「Web サーバーの構成とディレクトリ・マッピング」](#)を参照してください。

例 3 ブラウザベースの Oracle Enterprise Manager の実行

前述のステップを実行すると、ブラウザベースで Oracle Enterprise Manager を実行できるようになります。

注意： Web ブラウザから Enterprise Manager を実行するには、各自の Web ブラウザで使用する目的で構成されているプロキシを削除する必要があります。プロキシを削除するには、次の方法があります。

- Web ブラウザのプロキシ設定を使用して、ネットワークに直接接続するように選択します。または、
- プロキシを手動で構成するように選択します。ここでは、Enterprise Manager Web サイトを実行している Web サーバーのプロキシを使用しないように指定します。

プロキシで問題が発生した場合は、D-13 ページの「[Web ブラウザのトラブルシューティング](#)」を参照してください。

1. Web ブラウザを起動して、Web サーバーがインストールされている場所に関係なく、次の URL を指定します。

`http://<webserver hostname>:<port number>/`

たとえば、次のようになります。

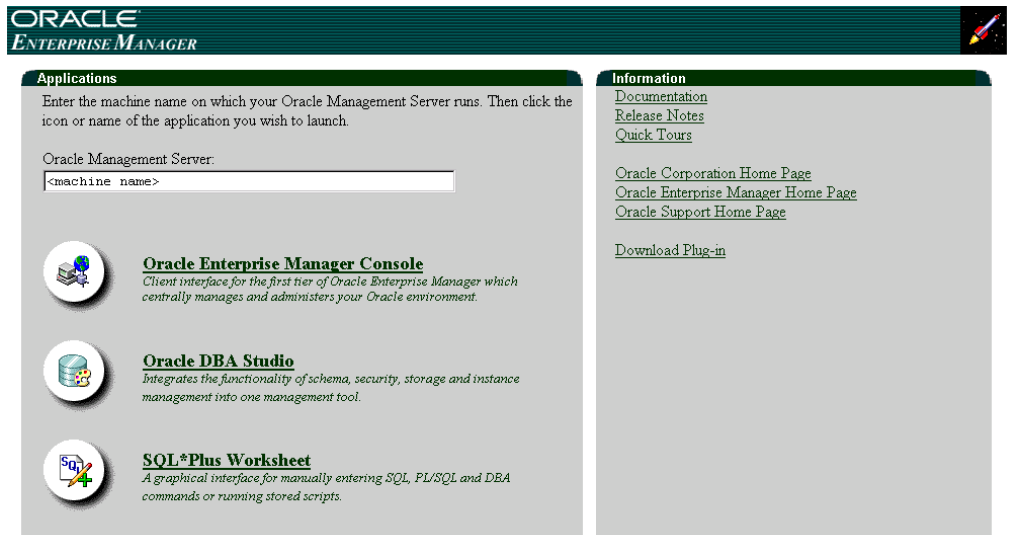
`http://jfox-sun.us.oracle.com:3339/`

注意： Oracle HTTP Server のポート番号は 3339 です。

索引 (EMWebSite.html) ページが表示されます。索引ページでは、様々な製品、ドキュメントおよび Web サイトを起動できます。

2. この索引ページで、接続する Management Server のマシン名を入力して、起動するアプリケーションのアイコンまたはアプリケーション名をクリックします。

図 6-2 EMWebSite.html ページ



3. 最初に URL を入力する場合は、Oracle JInitiator プラグインのリリース 1.1.7.30 をインストールする必要があります。

- Netscape では、プラグインのインストールを自動的に要求されます。

注意： 初回のみプラグインをインストールするように要求されますが、インストール前にこれを終了または取り消すと、次回にブラウザベースの Enterprise Manager を起動しても、インストールは要求されなくなります。このような場合にプラグインをインストールするには、索引ページの「Download Plug-in」リンクをクリックして Java プラグインをダウンロードします。

- Microsoft Internet Explorer では、索引ページの「Download Plug-in」リンクをクリックすると、プラグインをインストールできます。
4. プラグインのページの指示に従って、プラグインをインストールします。ご利用のマシンおよびネットワーク環境によっては、プラグインのインストールに時間がかかることがあります。
 5. Java プラグインをインストールした後、Web ブラウザを起動し、次の URL を入力します。

`http://<webserver hostname>:<port number>/`

索引 (EMWebSite.html) ページが表示されます。索引ページでは、様々な製品、ドキュメントおよび Web サイトを起動できます。

6. この索引ページで、接続する Management Server のマシン名を入力して、起動するアプリケーションのアイコンまたはアプリケーション名をクリックします。
7. するとダイアログ・ボックスが表示され、次のように説明されます。
 - アプリケーションをこのブラウザ・ウィンドウから起動したため、コンソール、DBA Studio または SQL*Plus Worksheet を停止しないと、Oracle Enterprise コンソール 2.2 の画面を閉じることはできません。
 - コンソール、DBA Studio または SQL*Plus Worksheet を停止しなくても、EMWebSite は終了できます。

Java プラグインをインストールすると、「Oracle Enterprise Manager ログイン」ダイアログ・ボックスが表示されます。

注意： ブラウザベースの Oracle Enterprise Manager を最初に起動するときは時間がかかることがあります。また、ダイヤル・アップ接続を行っている場合には、ダウンロード時間が長くなりますが、回線スピードによって時間は異なります。ブラウザベースの Oracle Enterprise Manager を初めて起動するときは、進捗状況ダイアログが表示されます。

8. Oracle Enterprise Manager に初めてログインする場合は、デフォルトの接続情報（管理者名とパスワード）を入力します。

管理者 = sysman

パスワード = oem_temp

これらの接続情報は、デフォルトのスーパー管理者アカウントのもので、Enterprise Manager を最初に起動する場合は、このスーパー管理者としてログインしてください。スーパー管理者アカウントを使用して別の管理者アカウントがすでに作成されている場合は、別の管理者としてログインできます。

注意： 指定した Management Server に接続できない場合は、索引 (EmWebSite.html) ページに戻って、Management Server の別のマシン名を指定してください。Oracle Enterprise Manager ログイン画面で、Management Server のマシン名を入力することはできません。

索引 (EMWebSite.html) ページに戻ると、ドキュメント、リリース・ノート、Quick Tour およびその他の Web サイトを起動できます。また、索引ページは、コンソールを閉じなくても終了できます。

9. URL のブックマークを作成します。

注意： ブラウザベースの Enterprise Manager アプリケーションを実行する場合にアクセスできる URL は 1 つだけです。1 台のマシンから複数の URL を介してブラウザベースの Enterprise Manager アプリケーションにアクセスすることはできません。

イベント・システムの設定

Oracle 8.0.6 以上のデータベースでは、Oracle データベース作成スクリプトによって OEM_MONITOR ロールが作成されます。このロールによって、データベースに対するイベント（表領域満杯、バッファ・キャッシュ・ヒット率）の実行や、コンソールのナビゲータ・ツリーを介したデータベース内のオブジェクトの参照など、Enterprise Manager 内のデータベース機能にアクセスすることができます。このような機能を使用するには、これらの操作を実行するためのデータベース接続情報が必要になります。多くの管理者は、データベース接続情報に高度な DBA ロールを付与するよりも、これらの操作を実行するのに必要最小限の権限を設定するほうを好みます。データベース接続情報に OEM_MONITOR ロールを付与すれば、これらの操作に必要な最小限の権限がユーザーに設定されます。

7.3.x データベースのデータベース・ユーザーは、OEM_MONITOR ロールを手動で定義する必要があります。

注意： OEM_MONITOR ロールは、SYS アカウントを使用して作成する必要があります。

次のステップを実行する必要があります。

1. OEM_MONITOR というロールを作成します。

```
drop role OEM_MONITOR;
create role OEM_MONITOR;
```

2. “connect” ロールを OEM_MONITOR に付与します。

```
grant connect to OEM_MONITOR;
```

3. システム権限の “analyze any” および “create table” を OEM_MONITOR に付与します。

```
grant analyze any to OEM_MONITOR;
```

```
grant create table to OEM_MONITOR;
```

4. sc_role.sql に定義されているように SELECT_CATALOG_ROLE ロールを作成します。
5. SELECT_CATALOG_ROLE を OEM_MONITOR ロールに付与します。

```
grant select_catalog_role to OEM_MONITOR;
```

これで、Enterprise Manager でデータベース優先接続情報リストとして使用される OEM_MONITOR ロールをデータベース・ユーザーに付与できます。ユーザーに OEM_MONITOR ロールを付与する他にも、ユーザー・アカウントの QUOTA が UNLIMITED に設定されていることを確認する必要があります。

「連鎖行」イベント・テストでは、結果を表にして分析する必要があるため、“analyze any” と “create table” の両方の権限が必要です。

注意： “analyze any” 権限は、索引再作成イベントで統計を計算するときに使用されます。

ジョブ制御システムの設定

この項には、ジョブのためにコンソールの設定に関する情報が記載されています。

ジョブ実行のための Windows NT または Windows 2000 ユーザー・アカウントの作成

Intelligent Agent によって、管理対象ノードでジョブを実行するには、次の要件を満たす必要があります。

- 拡張ユーザー権限「バッチ ジョブとしてログオン」を持つ Windows NT または Windows 2000 ユーザー・アカウントがあること。権限は、既存のローカル・ユーザーまたはドメイン・ユーザー、あるいは新規の Windows NT または Windows 2000 ユーザーに割り当てられます。
- Oracle Enterprise Manager コンソールで、そのユーザーにノードの優先接続情報リストが設定されていること。6-17 ページの「[管理対象サービスの優先接続情報リストの設定](#)」を参照してください。
- ユーザーに、ORACLE_HOME¥NETWORK ディレクトリに対する読取り / 書込み権限と、TEMP ディレクトリまたは ORACLE_HOME ディレクトリに対する削除権限があること。

多くのコンポーネントで、Intelligent Agent ノードからサーバー・ノードに対してジョブを発行できるようにするには、Windows NT または Windows 2000 のユーザー・アカウントが必要です。

注意：「バッチ ジョブとしてログオン」権限を設定しない場合、ノードでジョブを実行しようとする、「ユーザー認証に失敗しました。」というメッセージが表示されます。

管理対象ノードごとに、Windows NT または Windows 2000 ユーザー・アカウントを作成する必要があります。次の 3 つの手順のいずれかに従ってください。

Windows NT または Windows 2000 の新規ユーザー・アカウントの作成

Intelligent Agent がインストールされている Windows NT または Windows 2000 マシンで新規の Windows NT または Windows 2000 ユーザー・アカウントを作成し、このユーザーに「バッチ ジョブとしてログオン」権限を付与するには、次の手順を実行します。

1. Windows NT または Windows 2000 の「スタート」メニューで、「管理ツール」から「ユーザー マネージャ」を選択します。このツールの詳細は、Windows NT または Windows 2000 のドキュメントを参照してください。
2. 「ユーザー」メニューから「新しいユーザー」を選択して、次のことを確認します。
 - 「ユーザーは次回のログイン時にパスワード変更が必要」オプション・ボックスがチェックされていません。
 - ユーザー名として“SYSTEM”または“system”を使用できません。
3. Windows NT または Windows 2000 の「ユーザー マネージャ」ユーティリティの「原則」メニューで、「ユーザーの権利」オプションを選択します。
4. 「高度なユーザー権利の表示」ボックスをチェックします。
5. 権限リストから「バッチ ジョブとしてログオン」を選択します。
6. 選択したユーザーにこの権限を付与します。

既存の Windows NT または Windows 2000 ユーザー・アカウントへの権限の割当て

既存のローカル・ユーザー・アカウントに権限を割り当てるには、次の手順を実行してください。

1. 「ユーザー マネージャ」パネルでユーザーを選択し、次のことを確認します。
 - 「ユーザーは次回のログイン時にパスワード変更が必要」オプション・ボックスがチェックされていません。
 - ユーザー名として“SYSTEM”または“system”が使用されていません。

2. Windows NT または Windows 2000 の「ユーザー マネージャ」ユーティリティの「原則」メニューで、「ユーザーの権利」オプションを選択します。
3. 「高度なユーザー権利の表示」ボックスをチェックします。
4. 権限リストから「バッチ ジョブとしてログオン」を選択します。
5. このユーザーに、高度なユーザー権利を追加します。
6. 「追加」ボタンをクリックします。
 - a. 「ドメインまたはコンピュータ」フィールドに入力します。(自分のドメインを選択)
 - b. 「ユーザーの表示」ボタンをクリックします。
 - c. リストボックスでドメイン・ユーザーを選択します。
 - d. 「追加」をクリックします。
 - e. 「OK」をクリックします。
7. 「ユーザー権利の原則」ウィンドウで「OK」をクリックします。

Intelligent Agent としての Windows NT または Windows 2000 ドメイン・ユーザーの構成

注意： Windows NT または Windows 2000 のドメイン・ユーザーは、マシンがプライマリ・ドメイン・コントローラ（PDC）の場合のみ機能します。これ以外の場合は、「VNI-2015: 認証エラー」でジョブが失敗します。PDC 以外のすべての環境では、アカウントはマシンに対してローカルにしてください。

Intelligent Agent ユーザーとしてドメイン・ユーザーを構成するには、次の手順を実行してください。

1. Windows NT または Windows 2000 の「ユーザー マネージャ」ユーティリティの「原則」メニューで、「ユーザーの権利」オプションを選択します。
2. 「高度なユーザー権利の表示」ボックスをチェックします。
3. 権限リストから「バッチ ジョブとしてログオン」を選択します。
4. 「追加」ボタンをクリックします。
 - a. 「ドメインまたはコンピュータ」フィールドに入力します。(自分のドメインを選択)
 - b. 「ユーザーの表示」ボタンをクリックします。

- c. リストボックスでドメイン・ユーザーを選択します。
 - d. 「追加」をクリックします。
 - e. 「OK」をクリックします。
5. 「ユーザー権利の原則」ウィンドウで「OK」をクリックします。

注意： ローカル・ユーザーとドメイン・ユーザーの名前が同じである場合、ローカル・ユーザーが優先されます。

注意： ドメイン・ユーザーを設定する場合には、ドメイン・パスワードにローカル・パスワードと同じものを設定して、このドメイン・ユーザー・アカウントを使用してジョブを発行したときに、スケジュールされたジョブを実行できるようにします。

管理対象サービスの優先接続情報リストの設定

管理対象ノードで Intelligent Agent によってジョブの実行またはイベントの監視を行うには、そのノードで実行されているサービスに対して、各管理者が有効な接続情報を指定する必要があります。優先接続情報リストは、管理対象サービスごとにコンソールから設定されます。

注意： Parallel Server のすべてのインスタンスで、Oracle Parallel Server と同じ優先接続情報リストを使用することをお勧めします。

コンソールで優先接続情報リストを設定するには、次の手順に従ってください。

1. 「システム」→「作業環境」→「優先接続情報リスト」を選択して、Intelligent Agent による管理が可能なサービスを表示します。
2. 認証が必要な管理対象サービスには、ユーザー名、パスワードおよびロールなど、そのサービスに該当する接続情報を入力します。
3. あるタイプの複数のサービスに同じ接続情報が必要な場合、そのサービス・タイプに <デフォルト> の接続情報を選択して、同じタイプのすべてのサービスにその接続情報が使用されるようにします。

たとえば、Administrator_1 が、管理対象のすべてのデータベースで admin1 というユーザー名と pass1 というパスワードを持っているとすると、<デフォルト> データ

ベースのエントリには、接続情報として admin1/pass1 のみを入力することになります。データベース管理作業では、すべてこの <デフォルト> の接続情報が使用されません。

また、admin1 および pass1 以外の接続情報が必要なデータベースが 1 つしかない場合は、その特定のデータベースを選択して、異なる接続情報を入力できます。

Intelligent Agent では、すべてのジョブおよびイベントに対してユーザー名とパスワードの認証が行われます。優先接続情報リストを正しく設定しないと、ジョブやイベントは失敗する可能性があります。

重要： 優先接続情報リストの変更内容は、以前に登録されたジョブおよびイベントに対して自動的に伝播されません。これらのジョブおよびイベントを新しい優先接続情報リストで更新するには、そのジョブとイベントの登録を解除してから再登録する必要があります。

Windows NT または Windows 2000 ユーザーの場合は、(Windows NT または Windows 2000 の Intelligent Agent が存在する) ノードの優先接続情報リストを、「バッチ ジョブとしてログオン」に設定されたユーザーと同じに設定する必要があります。

ポケットベル・サービスの構成および起動

Oracle Enterprise Manager でポケットベル機能を使用して通知を受ける場合は、Oracle Enterprise Manager Paging Server をインストールする必要があります。このポケットベル・サービスは、Oracle Enterprise Manager の基本インストールの一部としてはインストールされず、カスタム・インストール・タイプでインストールされます。詳細は、対象のデータベース・リリースのインストール・ガイドを参照してください。

注意： ポケットベル・サーバーは Windows NT または Windows 2000 でしか使用できませんが、ポケットベル・サーバーの構成は UNIX プラットフォームおよび Windows プラットフォームのどちらでもできます。

Oracle Enterprise Manager 内の通知用にポケットベルを利用する場合、インストールが必要なポケットベル・サービスは 1 つのみです。

ポケットベル・サービスでは、数字または英数字のポケットベルをサポートしており、次のポケットベル・サービス・プロトコルを使用しています（英数字のポケットベルのみ）。

- TAP (Telocator Alphanumeric Protocol)
- GSM (Global System for Mobile Communications)

■ FLEXTD

英数字のポケットベルを使用するには、ポケットベル・サービス・プロバイダでモデムをコールするための電話番号と、ポケットベルの Pin 番号が必要です。コールする電話番号については、ポケットベル・サービス・プロバイダにお問い合わせください。これは、ポケットベルを送信するためのモデムの番号です。

ポケットベル・プロバイダが、ポケットベルへの電子メール送信を行っている場合もあります。その機能が備わっている場合は、通知に電子メールを使用するように管理者の作業環境を構成し、ポケットベルを電子メールの受信機として指定できます。この方法は、多くのプロバイダで携帯電話に通知を送る場合にも使用されます。

ポケットベル・サービスは自動的に構成されません。ポケットベルを構成するには、次の手順に従います。

ポケットベルの設定

ポケットベル・サービスを実行するマシンで、次の指示に従ってください。

1. モデムをインストールします。

注意： モデムは、ポケットベル・サービスを実行する Windows NT または Windows 2000 マシンにインストールしてください。

2. モデム設定を指定します。

- a. 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「モデム」を選択します。
- b. 「モデム プロパティ」ページで「ダイヤルのプロパティ」をクリックし、次のパラメータを設定して、ダイヤル方法を指定します。
 - * ダイヤルする市外局番。
 - * ダイヤルする国。
 - * 外線にアクセスする方法。外線にアクセスする際にダイヤル番号が必要ない場合は、このフィールドは空白にしておいてください。
- c. 「モデム プロパティ」ページの「プロパティ」をクリックして「最高速度」パラメータを設定します。最高速度は 9600 ボーに設定することをお薦めしますが、各々のシステムに最適なボー・レートを設定してください。

注意： ボー・レートを 9600 よりも大きな値に設定すると、ポケットベル・サービス・キャリアでデータが失われることがあります。9600 というモデムのボー・レートは、推奨値にすぎません。ご使用のシステムに最適のボー・レート設定を見つけてください。

3. Oracle Enterprise ポケットベル・サーバーをインストールします。詳細は、対象のデータベース・リリースのインストール・ガイドを参照してください。
4. ポケットベル・サービスを起動します。
 - a. 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「サービス」を選択します。
 - b. 「Oracle<ORACLE_HOME_NAME>PagingService」を選択し、「起動」をクリックします。

コマンド・プロンプトで次のように入力して、ポケットベル・サービスを起動することもできます。

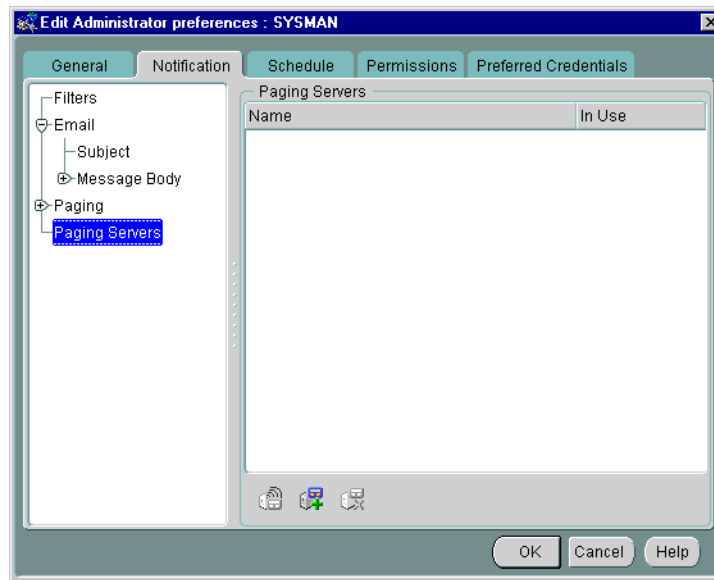
```
oemctrl start paging
```

ポケットベル・サーバーの追加

注意： ポケットベル・サーバーを追加できるのはスーパー管理者のみです。この機能は、通常の管理者には使用できません。

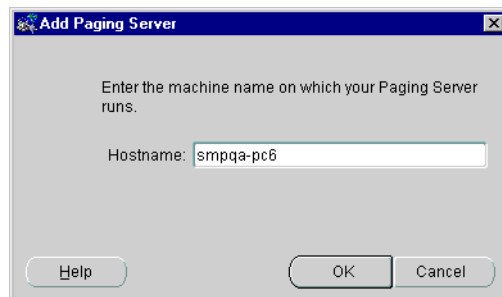
1. Enterprise Manager コンソールで、「システム」メニューの「作業環境」を選択します。「編集 管理者作業環境」プロパティ・シートが表示されます。「通知」タブをクリックして、「通知」ページにアクセスします。
2. 「通知」ページのツリー・リストから「ポケットベル・サーバー」を選択します。

図 6-3 管理者の通知作業環境： ポケットベル・サーバー



3. 「ポケットベル・サーバー」をマウスの右ボタンでクリックしてポップアップ・メニューを表示し、「追加」項目を選択するか、または右側の詳細ビューで「サーバーの追加」アイコンをクリックします。
4. 「ポケットベル・サーバーの追加」ダイアログ・ボックスが表示されたら、ポケットベル・サーバーを実行するマシンの名前を入力します。

図 6-4 「ポケットベル・サーバーの追加」ダイアログ・ボックス



5. 「OK」ボタンを押します。

指定したホスト名のポケットベル・サーバーがコンソールで検出されない場合、「VD-4362: ポケットベル・サーバーを追加できません。ポケットベル・サーバー <hostname> が停止中です。」というエラーが表示されます。

ポケットベル・サーバーが検出されると、ツリー・リストの「ポケットベル・サーバー」オブジェクトの下に新しいポケットベル・サーバー・オブジェクトが追加されます。新しいポケットベル・サーバーにはポケットベル・キャリアはありません。ポケットベルが機能するためには、少なくとも1つのポケットベル・キャリアを追加する必要があります。

ポケットベル・キャリアの追加

注意： 新しいポケットベル・キャリアを追加できるのはスーパー管理者のみです。この機能は、通常の管理者には使用できません。

1. 「通知」ページのツリー・リストから「ポケットベル・キャリア」を選択します。
2. 「ポケットベル・キャリア」をマウスの右ボタンでクリックしてポップアップ・メニューを表示し、「キャリアの追加」項目を選択するか、または右側の詳細ビューで「キャリアの追加」アイコンをクリックします。
3. 「ポケットベル・キャリアの追加」ダイアログ・ボックスが表示されたら、フィールドに入力します。

図 6-5 「ポケットベル・キャリアの追加」ダイアログ・ボックス

The screenshot shows the 'Add Paging Carrier' dialog box. It has a title bar with the text 'Add Paging Carrier' and a close button. The dialog contains the following fields and sections:

- Name:** A text input field.
- Type:** A dropdown menu with 'Alphanumeric' selected.
- Protocol:** A dropdown menu with 'TAP' selected.
- Connection Properties:** A section containing four text input fields: 'Country Code', 'Area Code', 'Number', and 'Suffix'.
- Dialing Properties:** A section containing two text input fields: 'Timeout (in seconds)' with the value '60' and 'Delay (in seconds)' with the value '3'.
- Buttons:** 'OK', 'Cancel', and 'Help' buttons at the bottom.

定義した後は、ツリー・リストで適切なポケットベル・サーバーおよびキャリアのオブジェクトを拡張すると、ポケットベル・キャリアが表示されます。

■ 名前

ポケットベル・キャリアの名前。フィールドでは、英数字およびアンダースコアを使用できます。

■ タイプ

ポケットベル・キャリアのタイプ。Enterprise Manager では、「英数字」または「数字」がサポートされています。

■ プロトコル

「TAP」、「FLEXTD」または「GSM」。プロトコル選択は、キャリアの「タイプ」が「英数字」の場合にのみ使用可能になります。

■ 接続プロパティ

- * 国コード： 国際通話の場合、ポケットベルにダイヤルするときに使用する国コード。
- * 地域コード： このポケットベルが存在する国で使用される地域コード。
- * 番号： ポケットベルのローカル・ダイヤル番号。
- * 接尾辞： これにより、ポケットベル・キャリアからのボイス・メッセージの識別が可能になり、ポケットベルで呼び出される人は、プッシュホン使用時に複数のオプションから選択できます。たとえば、カンマは休止として使用できます。「接尾辞」フィールドでは、整数、カンマ、ボンド記号および星印（アスタリスク）を入力できます。

注意： このオプションは、ポケットベル・キャリア・タイプが「数字」に設定されている場合にのみ使用可能になります。

■ ダイヤル・プロパティ

- * タイムアウト（秒）： ポケットベルの呼出しに成功するまでに許容される最大ダイヤル時間。
- * 遅延（秒）： ダイヤルまでの遅延時間。

4. 「OK」ボタンを押します。

ポケットベル通知の作業環境の指定

ポケットベル・サーバーとそのキャリアを構成するのはスーパー管理者ですが、ポケットベル通知を受けるすべての管理者は、次のステップを実行して自分の通知作業環境を指定する必要があります。

1. コンソールにログインします。
 - a. 「システム」→「作業環境」→「通知」を選択します。次に、ツリー・リストで「ポケットベル」を選択して、右側の詳細ビューに「ポケットベルの設定」を表示します。
 - b. ドロップダウン・リストからポケットベル・サービス・キャリアを選択します。
 - c. 英数字のポケットベルの場合は、Pin 番号を入力します。数字ポケットベルの場合は、このフィールドは空白のままとします。
 - d. 「テスト」ボタンをクリックしてポケットベル通知をテストします。
2. 通知スケジュールを設定します。これを設定しておかないと、ポケットベル通知は受けられません。
 - a. コンソールの「システム」→「作業環境」→「スケジュール」を選択します。
 - b. ポケットベルでの通知を受けるタイミングを選択します。ポケットベルで通知される日付や時刻を選択しない場合は、通知を受け取ることはできません。

通知のスケジュールを設定する方法は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

その他のポケットベル・サーバー操作

ポケットベル・サーバーの削除

注意： ポケットベル・サーバーを削除できるのはスーパー管理者のみです。この機能は、通常の管理者には使用できません。

1. 「通知」ページのツリー・リストから、削除するポケットベル・サーバー・オブジェクトを選択します。
2. ポケットベル・サーバー・オブジェクトをマウスの右ボタンでクリックしてポップアップ・メニューを表示し、「削除」項目を選択するか、または右側の詳細ビューで「サーバーの削除」アイコンをクリックします。

「削除 ポケットベル・サーバー <servername>?」という警戒ダイアログが表示されます。

3. 「はい」をクリックします。コンソールにより、ポケットベル・サーバーからキャリアを現在使用している人がいないかチェックされます。いない場合は、すべてのポケットベル・キャリアが削除され、ポケットベル・サーバーも同様に削除されます。それ以外の場合は、「ポケットベル・サーバーは削除できません。ポケットベル・サーバーは使用中です。」というエラー・ダイアログが表示されます。

ポケットベル・サーバーに関する情報の表示

注意： ポケットベル・サーバーに関する情報を表示できるのはスーパー管理者のみです。この機能は、通常の管理者には使用できません。

「通知」ページで、ポケットベル・サーバー・オブジェクトをクリックします。

右側の詳細ビューに、ポケットベル・キャリア名、ポケットベル・タイプ、プロトコル、および使用されているかどうかなど、ポケットベル・サーバーに関する情報が表示されます。

ポケットベル・サーバーの ping

注意： ポケットベル・サーバーを ping できるのはスーパー管理者のみです。この機能は、通常の管理者には使用できません。

ポケットベル・サーバーのステータスをチェックするには、次の手順に従います。

1. 「通知」ページから、ping するポケットベル・サーバーを選択します。
2. ポケットベル・サーバー・オブジェクトをマウスの右ボタンでクリックしてポップアップ・メニューを表示し、「Ping」項目を選択するか、または右側の詳細ビューで「サーバーの ping」をクリックします。

ポケットベル・サービスのステータスの問合せ

ポケットベルのステータスをチェックするには、キャリア名をマウスで右クリックし、ポップアップ・メニューの「ポケットベル・サービスへの Ping」項目にアクセスします。

ポケットベル・サービスの停止

Windows NT または Windows 2000 サービスの「コントロール パネル」から、ポケットベル・サービスを停止します。

ポケットベル・サービスは、次のコマンドを入力しても停止できます。

```
oemctrl stop paging
```

ポケットベル・キャリアの削除

注意： ポケットベル・キャリアを削除できるのはスーパー管理者のみです。この機能は、通常の管理者には使用できません。

1. 「通知」ページのツリー・リストから、削除するポケットベル・キャリア・オブジェクトを選択します。
2. ポケットベル・キャリア・オブジェクトをマウスの右ボタンでクリックしてポップアップ・メニューを表示し、「削除」項目を選択するか、または右側の詳細ビューで「キャリアの削除」アイコンをクリックします。
「削除 ポケットベル・キャリア <carrier name>?」というメッセージが表示されます。
3. 「はい」をクリックします。コンソールにより、キャリアを現在使用している人がいないかチェックされます。いない場合、キャリアが削除され、「通知」ページのツリーが更新されます。

ポケットベル・キャリアの編集

注意： ポケットベル・キャリアを編集できるのはスーパー管理者のみです。この機能は、通常の管理者には使用できません。

1. 「通知」ページで、ポケットベル・キャリア・オブジェクトを選択します。ポケットベル・キャリアの情報が、右側の詳細ビューに表示されます。
2. 変更を行います。
3. 「OK」ボタンをクリックします。

コンソールによりすべてのキャリア情報が検証され、「通知」ページのツリーが更新されます。このキャリアを使用するように選択したすべての管理者は、自動的に新しい変更内容を継承します。

検証が失敗した場合、検証に失敗したエントリと、入力すべきタイプを示すエラー・ダイアログが表示されます。エラー・ダイアログで「OK」ボタンをクリックすると、ポケットベル・キャリアの全エントリが最初の設定値に戻ります。

ポケットベル・キャリアに関する情報の表示

「通知」ページで、ポケットベル・キャリア・オブジェクトを選択します。ポケットベル・キャリアの情報が、右側の詳細ビューに表示されます。

ポケットベル・キャリアのテスト

1. ポケットベル・キャリア・オブジェクトをマウスの右ボタンでクリックし、「テスト」メニュー項目を選択します。PIN を要求するダイアログが表示されます。
2. ポケットベルが英数字ポケットベルであれば、PIN を入力し、「OK」をクリックして続行します。数字ポケットベルの場合、このフィールドは空白のままにしておきます。

電子メール通知およびポケットベル通知の設定

SMTP ゲートウェイの設定

Oracle Enterprise Manager では、SMTP を使用した電子メール通知の送信がサポートされています。管理者が電子メール通知を使用できるようにするには、スーパー管理者が、SMTP 電子メール・システムで使用される SMTP メール・ゲートウェイを指定する必要があります。

SMTP は、TCP/IP ベースのメール・プロトコルで、これを使用するには、コンソール・マシン上で TCP/IP サービスを設定しておく必要があります。

スーパー管理者は、Enterprise Manager コンソールで「システム」メニューの「SMTP ゲートウェイを構成」を選択して、次の情報を指定する必要があります。

フィールド	説明
SMTP メール・ゲートウェイ	SMTP メール・ゲートウェイが存在するマシン名 (mailserver.company.com など) を入力します。
送信者の SMTP メール・アドレス	自身を識別するための送信者の名前 (Enterprise Manager Mail など) を指定します。 注意: SMTP サーバーには、空白を処理できないものがあります。このような場合には、“Enterprise Manager Mail” のように、引用符で囲んで指定します。ここで指定した名前が、電子メール通知の送信者として表示されます。

スーパー管理者が前述の情報を指定しない場合、管理者が自分の電子メールを構成しようとすると、エラー・メッセージが表示されます。

電子メールとポケットベルの通知の設定

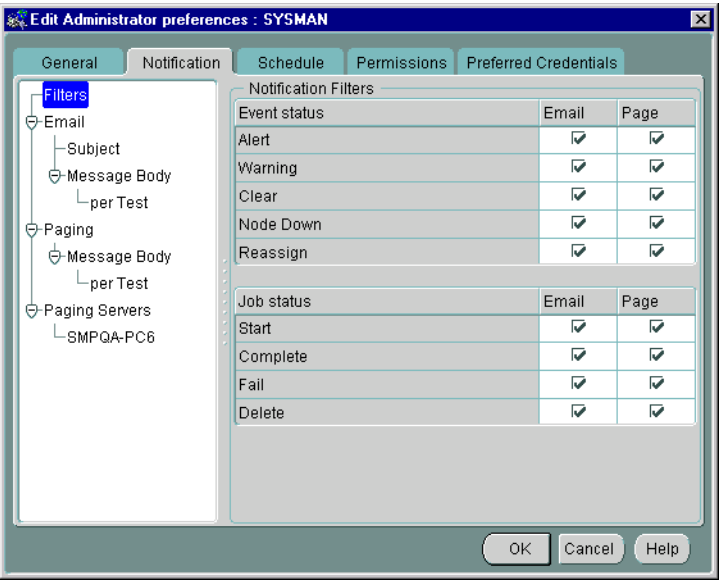
管理者は、それぞれの電子メールまたはポケットベルの通知に対する作業環境を定義する必要があります。Enterprise Manager コンソールで、「システム」メニューの「作業環境」を選択します。「編集 管理者作業環境」プロパティ・シートが表示されます。「通知」タブをクリックして、「通知」ページにアクセスします。

「通知」ページでは、管理者のポケットベルおよび電子メールの通知方法を設定できます。このページは、階層ツリー・リストと、ナビゲータで選択されたオブジェクトに伴い変化する

る詳細表示領域で構成されます。ツリー・リストは、ログインしたユーザーのタイプによって、次の3つあるいは4つのトップレベル・オブジェクトで構成されます。

- フィルタ（デフォルトで選択）
- 電子メール
- ポケットベル
- ポケットベル・サービス（スーパー管理者のみが使用できる）

図 6-6 管理者の通知作業環境



フィルタ

通知フィルタにより、各管理者は、電子メール通知をいつ送信するかを指定できます。これに対してポケットベル通知は、ジョブまたはイベントのステータスが変わると送信されます。

- **イベント通知フィルタ**： イベント通知フィルタを使用すると、管理者へ送信する電子メールやポケットベルをイベントの重大度レベルに基づいてフィルタできます。フィルタは、このプロパティ・シート・ページで「電子メール」および「ポケットベル」オプションのチェックを付けるか外すかして、ユーザー・レベルで設定します。次のイベント重大度を任意に組み合わせることができます。たとえば、警戒がある場合には管理者に電子メールで通知し、警告がある場合にはポケットベル・システムで通知するように

フィルタを設定できます。重大度のすべてのレベルを選択すると、フィルタは行われません。

- 警告
- 警戒
- 消去
- ノード停止
- 再割当

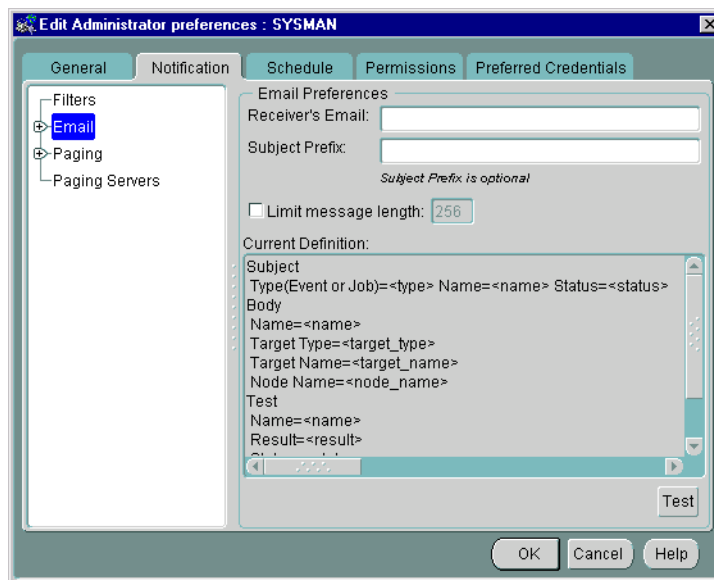
ジョブ通知フィルタ ジョブ通知フィルタを使用すると、管理者へ送信する電子メールやポケットベルをジョブのステータスに基づいてフィルタできます。イベント通知フィルタと同様に、フィルタは、希望のオプションのチェックを付けるか外すかしてユーザー・レベルで設定します。すべてのジョブのステータスを選択すると、フィルタは行われません。

- 実行中
- 完了
- 失敗
- 削除（ジョブ削除）

電子メール

このページでは、電子メールの通知パラメータを指定できます。

図 6-7 管理者の通知作業環境： 電子メール



- **受信者の電子メール：** メールを送信先の管理者の電子メール・アドレスを入力します。
- **サブジェクトの接頭辞：** 電子メール通知に付加するオプションの接頭辞を入力します。これにより、管理者は Enterprise Manager からのメール・メッセージをすばやく識別できます。
- **メッセージ長の制限：** 電子メール通知のメッセージ本文の最大長を指定できます。デフォルトでは、この長さには制限はありません。
- **現行の定義：** 電子メール通知の書式および内容の現行設定が表示されます。デフォルト・パラメータを設定または変更するには、ツリー・リストで「電子メール」オブジェクトを拡張します。サブジェクト行およびメッセージ本文については、書式および内容のオプションを選択できます。「メッセージ本文」オブジェクトをさらに拡張すると、「テストごと」レベルのオプションを指定できます。
- **テスト：** 「テスト」ボタンをクリックして、電子メール構成が有効かどうかを確認します。テスト電子メールの状態を示すメッセージが表示されます。

電子メールのサブジェクトの定義 このページでは、電子メールのサブジェクト行の内容および書式を選択できます。デフォルトでは、「タイプ」、「名前」および「ステータス」が選択されています。左矢印または右矢印を使用して、「使用可能」リストと「選択」リスト間で項目を移動します。

項目を選択した後は、リストでその項目を選択して（「選択」リストのすぐ右側にある）上矢印または下矢印を使用してリスト内の項目の位置を変えると、項目の表示順序を制御できます。

注意： 次の情報は、電子メールまたはポケットベルのメッセージ本文に内容を挿入する場合にも適用されます。

- **使用可能：** 使用可能な内容が一覧表示されます。
- **選択：** 現在選択されている内容とその内容の表示順序が一覧表示されます。
- **略称の使用：** 「タイプ」（イベントまたはジョブ）、「ステータス」および「ターゲット・タイプ」では、「略称の使用」オプションを選択できます。システムでは次の略称が使用されます。

ターゲット・タイプ

- DB = Database（データベース）
- L = Listener（リスナー）
- N = Node（ノード）

ステータス

- S = Started（実行中）
- CO = Completed（完了）
- F = Failed（失敗）
- D = Deleted（削除済）
- W = Warning（警戒）
- A = Alert（警告）
- C = Cleared（消去）
- NU = Node Unreachable（接続できないノード）
- R = Reassign（再割当）

タイムスタンプの書式

このオプションは、「選択」リストから「タイムスタンプ」が選択されている場合に使用可能です。プルダウン・メニューを使用して、いずれかの事前定義書式を選択します。

タイトルを含めない

これを選択すると、「ステータス」、「サービス名」および「タイムスタンプ」などの分類タイトルがメッセージから省かれます。

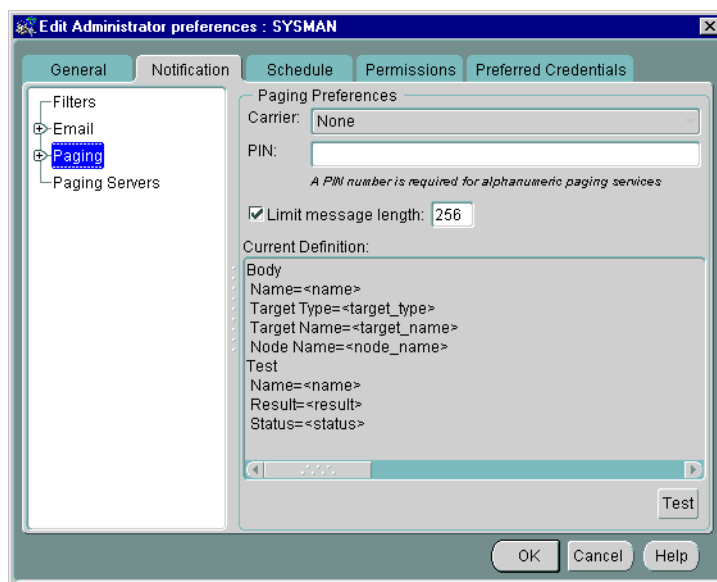
ジョブ出力の追加

これを選択すると、通知の終わりにジョブ出力が追加されます。ジョブ出力が大きい場合は、メッセージ長の限度を指定できます。ジョブ出力で通知の長さが指定された限度を超えた場合は、メッセージそのものでなくジョブ出力が切り捨てられます。

ポケットベル

このページでは、ポケットベルの通知パラメータを指定できます。

図 6-8 管理者の通知作業環境： ポケットベル



- **キャリア**： スーパー管理者がポケットベル・サーバーを指定した後、ポケットベル・キャリア・サービス名とそれに対応するポケットベル・キャリアの構成が完了したら、プルダウン・リストからポケットベル・キャリア・サービスの名前を選択します。

- **Pin:** ポケットベル・キャリアの PIN を入力します。この入力、英数字ポケットベルの場合にのみ要求されます。
- **メッセージ長の制限:** ポケットベル通知のメッセージの最大長を指定できます。デフォルトでは、この長さは 256 文字に設定されます。
- **現行の定義:** ポケットベル通知の書式および内容の現行設定が表示されます。これらのパラメータを設定または変更するには、ツリー・リストで「ポケットベル」オブジェクトを拡張します。メッセージ本文については、書式および内容のオプションを選択できます。「メッセージ本文」オブジェクトをさらに拡張すると、「テストごと」レベルのオプションを指定できます。
- **テスト:** 「テスト」ボタンをクリックして、ポケットベル構成が有効かどうかをチェックします。英数字ポケットベルの場合は、PIN 番号を入力してください。数字ポケットベルの場合は、“700” というメッセージが送信されます。

「送信」ボタンをクリックして、指定したポケットベルにテスト送信します。テスト送信のステータスを知らせるメッセージが表示されます。

テストが失敗した場合は、ログ・ファイルを確認してください。ポケットベルに対してトレースが使用可能になっている場合は、ポケットベル・サーバーが置かれたマシンの `ORACLE_HOME¥sysman¥log` ディレクトリにあるポケットベル・トレース・ログ・ファイルも参照できます。

数字ポケットベルのポケットベル・ステータス・コード

数字ポケットベルは、次のように解釈されます。

ジョブ通知の場合、ジョブ・ステータスを表す 3 桁の数値を受信します。

イベント通知の場合、ステータス・コードを受信します。

イベントのステータス・コードおよびジョブのステータス・コードは、次のようになります。

100 = ジョブ実行中

200 = ジョブ完了

300 = ジョブ失敗

400 = ジョブ削除

500 = イベント消去

600 = イベント警戒

700 = イベント警告

800 = イベント・ノード停止

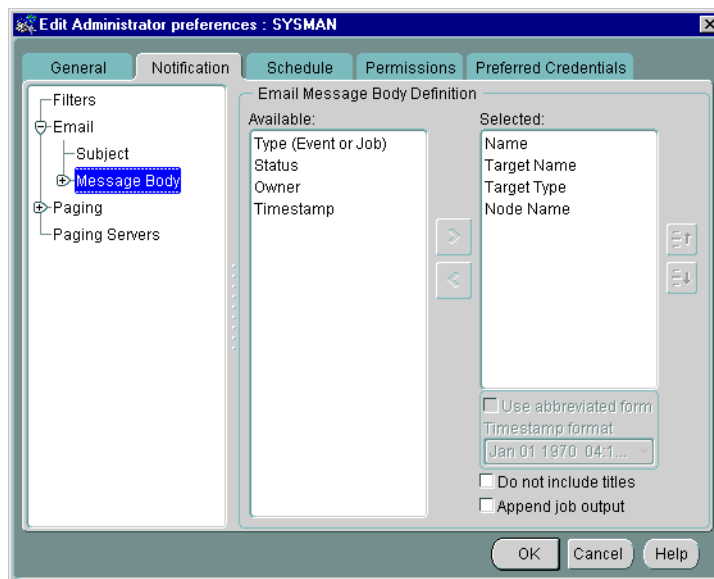
900 = イベント不明

1000 = イベントの受取先変更

電子メール / ポケットベルのメッセージ本文の定義

このページでは、電子メールまたはポケットベルのメッセージ本文の内容および書式を選択できます。デフォルトでは、「名前」と「ステータス」が選択されます。左矢印または右矢印を使用して、「使用可能」リストと「選択」リスト間で項目を移動します。

図 6-9 管理者の通知作業環境： 電子メール / ポケットベル



ナビゲータで「メッセージ本文」オブジェクトを拡張して「テストごと」を選択すると、テスト単位で次のオプション設定のサブセットを使用できます。メッセージ内容の操作の詳細は、6-31 ページの「[電子メールのサブジェクトの定義](#)」を参照してください。

- **使用可能：** 使用可能な内容が一覧表示されます。
- **選択：** 現在選択されている内容が一覧表示されます。
- **略称の使用：** 「タイプ」（イベントまたはジョブ）、「ステータス」および「ターゲット・タイプ」では、「略称の使用」オプションを選択できます。システムでは次の略称が使用されます。

ターゲット・タイプ

- DB = Database (データベース)
- L = Listener (リスナー)
- N = Node (ノード)

ステータス

- S = Started (実行中)
- CO = Completed (完了)
- F = Failed (失敗)
- D = Deleted (削除済)
- W = Warning (警戒)
- A = Alert (警告)
- C = Cleared (消去)
- NU = Node Unreachable (接続できないノード)
- R = Reassign (再割当)

タイムスタンプの書式

このオプションは、「選択」リストから「タイムスタンプ」が選択されている場合に使用可能です。プルダウン・メニューを使用して、いずれかの事前定義書式を選択します。

タイトルを含めない

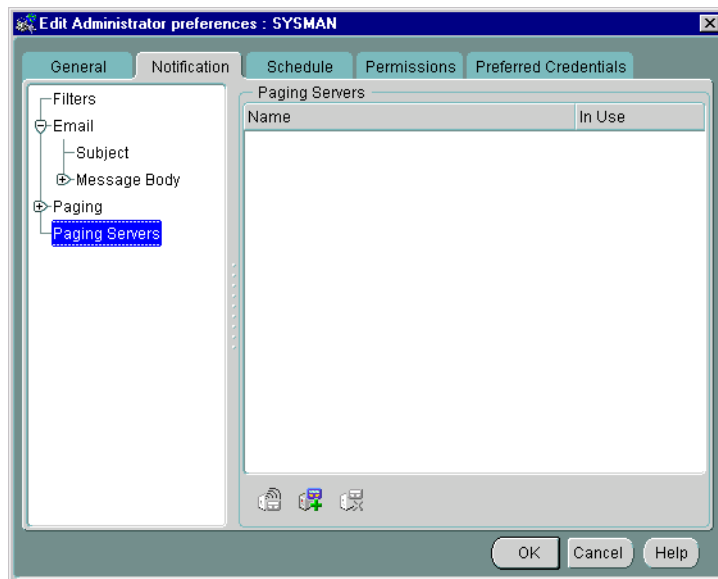
これを選択すると、「ステータス」、「サービス名」および「タイムスタンプ」などの分類タイトルがメッセージから省かれます。

ポケットベル・サーバー

ポケットベル・サーバー・オブジェクトは、スーパー管理者のみが使用できます。

このページには、Enterprise Manager により認識されているすべての使用可能なポケットベル・サーバーが一覧表示されます。複数列リストは、ポケットベル・サーバー名と、それが現在使用されているかどうかを示す 2 つの列で構成されます。

図 6-10 管理者の通知作業環境： ポケットベル・サーバー



次の項目の詳細は、6-18 ページの「[ポケットベル・サービスの構成および起動](#)」を参照してください。

- [ポケットベル・サーバーの追加](#)
- [ポケットベル・キャリアの追加](#)
- [ポケットベル・サーバーの削除](#)
- [ポケットベル・サーバーに関する情報の表示](#)
- [ポケットベル・キャリアの削除](#)
- [ポケットベル・キャリアの編集](#)

「ポケットベル・サーバーの追加」アイコン以外のアイコンは、リストから特定のポケットベル・サーバーを選択しない限りは、グレー表示になっています。

Management Server 接続にダイヤルアップ回線を使用する場合のコンソールの構成

注意： DHCP によるダイナミック IP アドレスは、Management Server または Intelligent Agent を実行しているノードではサポートされません。DHCP は、Enterprise Manager クライアントでのみサポートされます。

コンソールの接続にダイヤルアップ回線を使用する場合は、コンソール・マシンでダイナミック IP アドレスが取得されます。このダイナミック IP アドレスは、オペレーティング・システム（Windows 2000、Windows NT、Windows 95、Windows 98）によってアプリケーション（コンソール）に送信されます。

オペレーティング・システムが正しい IP アドレスを返すには、ネットワーク通信プロトコル（TCP-IP）を、Dynamic Host 構成プロトコル（DHCP）を使用して、IP アドレスが取得されるように構成する必要があります。この設定は、次のように指定します。

1. 「スタート」メニューから「設定」を選択します。
2. 「コントロール パネル」→「ネットワーク」を選択します。
3. 「プロトコル」を選択します。
4. 「TCP-IP プロトコル」をダブルクリックします。

重要： イーサネットを介して同じマシンをネットワークに接続するときに、設定を元に戻せるように、前の設定を控えておいてください。「IP アドレス」、「サブネット マスク」および「デフォルト ゲートウェイ」で指定した設定は、ファイルにコピーしてください。

5. 「IP アドレス」ページで「DHCP サーバーから IP アドレスを取得する」を選択します。
6. 「OK」ボタンをクリックします。
7. ダイヤルアップ回線を介して、ネットワークに接続します。これで、コンソールを起動できるようになります。

注意： Web ブラウザから実行していない場合には、変更後、システムを再起動する必要があります。

バックアップまたは SYSDBA 管理のためのリモート・データベースの構成

バックアップ管理ウィザードを使用する前、または Oracle Enterprise Manager によってデータベースを停止する前に、リモート SYSDBA 管理のデータベースを設定する必要があります。

次の手順は、サーバーとクライアントが Database Configuration Assistant によってすでに実行されている場合に、サーバーとクライアントの両方で必要な処理の概要です。

追加情報： システムのパスワード・ファイル作成ユーティリティの正確な名前は、ご使用の Oracle データベースのオペレーティング・システム固有のドキュメントを参照してください。

サーバー側（Windows NT または Windows 2000）

1. コマンド・プロンプトから、ORAPWD 実行ファイルを実行して、新規パスワード・ファイルを作成します。

注意： ORAPWD 実行可能ファイルの名前は、データベースのバージョンによって異なります。

- Oracle 7.3.X: ORAPWD73
 - Oracle 8.0.X: ORAPWD80
 - Oracle 8.1.X: ORAPWD
-

たとえば、次のように指定します。

```
$ORACLE_HOME\bin\orapwd file=<fname> password=<password> entries=<users>
```

ここで

fname はパスワード・ファイルの名前です（必須）。

password は、SYS のパスワードです（必須）。

entries は、異なる DBA および OPER の最大数です（オプション）。

等号 (=) の前後には空白を入れません。

<fname> は、Oracle_Home\Database ディレクトリに作成されます。

2. Oracle_Home\Admin\<SID>\pfile ディレクトリの init.ora ファイルを編集します。init.ora ファイルのパラメータ remote_login_passwordfile=exclusive を追加または変更します。

3. データベースを停止し、「コントロールパネル」→「サービス」で再起動します。
4. リモート DBA 操作を実行するユーザーに、SYSDBA または SYSOPER のロール（あるいはその両方）を付与します。

注意： ユーザーがこの権限セットを持っている場合でも、この権限付与は必要です。パスワード・ファイルが定義されている場合、GRANT コマンドを実行すると、ユーザー名とパスワードがそのパスワード・ファイルにフラッシュされます。パスワード・ファイルをリセットまたは再作成した後は、その都度 SYSOPER および SYSDBA を持つすべてのユーザーをリセットして、パスワード・ファイルにすべての必要なユーザー名が格納されていることを確認する必要があります。

5. V\$PWFIL_USERS ビューを使用して、パスワード・ファイル内に定義されているユーザーを確認します。このビューには、パスワード・ファイルに現存するユーザーが表示されます。

サーバー側 (UNIX)

1. ソフトウェアの所有者（たとえば、Oracle）としてログインし、環境変数を設定します。次に CSH の例を示します。

```
setenv ORACLE_HOME the_database_home
setenv ORACLE_SID the_database_sid
```

2. Oracle ホームの dbs ディレクトリに移ります。

```
cd $ORACLE_HOME/dbs
```

3. `init.ora` ファイルを編集します。`init.ora` ファイルのパラメータ `remote_login_passwordfile=exclusive` を追加または変更します。
4. データベースをいったん停止してから再起動します。

- a. SQL*Plus Worksheet を起動します。
- b. SYSDBA ロールを持つユーザーとしてログインします。
- c. 次のコマンドを入力します。

```
shutdown immediate
startup
```

データベースに `init.ora` ファイルの変更を反映させるために、データベースを停止する必要があります。

5. ORAPWD 実行可能ファイルを実行して、新しいパスワード・ファイルを作成します。

注意： ORAPWD 実行可能ファイルの名前は、データベースのバージョンによって異なります。

- Oracle 7.3.X: ORAPWD73
 - Oracle 8.0.X: ORAPWD80
 - Oracle 8.1.X: ORAPWD
-
-

たとえば、次のように指定します。

```
$ORACLE_HOME/bin/orapwd file=<fname> password=<password> entries=<users>
```

fname はパスワード・ファイルの名前です（必須）。

password は、SYS のパスワードです（必須）。

entries は、異なる DBA および OPER の最大数です（オプション）。

等号 (=) の前後には空白を入れません。

<fname> は、\$Oracle_Home/dbs ディレクトリに作成されます。

6. リモート DBA 操作を実行するユーザーに、SYSDBA または SYSOPER のロール（あるいはその両方）を付与します。

注意： ユーザーがこの権限セットを持っている場合でも、この権限付与は必要です。パスワード・ファイルが定義されている場合、GRANT コマンドを実行すると、ユーザー名とパスワードがそのパスワード・ファイルにフラッシュされます。パスワード・ファイルをリセットまたは再作成した後は、その都度 SYSOPER および SYSDBA を持つすべてのユーザーをリセットして、パスワード・ファイルにすべての必要なユーザー名が格納されていることを確認する必要があります。

7. V\$PWFIL_USERS ビューを使用して、パスワード・ファイル内に定義されているユーザーを確認します。このビューには、パスワード・ファイルに現存するユーザーが表示されます。

日付書式の設定

Oracle Enterprise Manager コンソールおよび DBA Studio で日付要素を表示する順序を設定するには、次の環境変数を設定する必要があります。

- 年月日の場合、NLS_DATE_FORMAT
`mm-dd-yyyy`
- 日時の場合、NLS_TIMESTAMP_FORMAT
`mm-dd-yyyy hh:mi pm`

注意： 設定できるのは要素の表示順序のみであり、表示内容は設定できません。

Windows プラットフォーム

環境変数は次のように設定します。

```
set NLS_DATE_FORMAT = mm-dd-yyyy
set NLS_TIMESTAMP_FORMAT = mm-dd-yyyy hh:mi pm
```

UNIX

環境変数は次のように設定します。

```
setenv NLS_DATE_FORMAT mm-dd-yyyy
setenv NLS_TIMESTAMP_FORMAT mm-dd-yyyy hh:mi pm
```

リリース 1.x のリポジトリからリリース 2.2 のリポジトリへの移行

Oracle Enterprise Manager Migration Assistant では、Oracle Enterprise Manager と Oracle Enterprise Manager Management Pack のデータの移行をサポートしています。

この章では、リリース 1.x の複数のリポジトリ・スキーマを、リリース 2.2 の既存の 1 つの共有リポジトリ・スキーマに移行する方法について説明します。

注意： 移行の前に、Enterprise Manager Configuration Assistant を使用してリリース 2.2 のリポジトリを作成しておく必要があります。移行は、リリース 1.x のリポジトリから既存の 2.2 のリポジトリに対して行われます。

Oracle Enterprise Manager リリース 1.x のリポジトリ・スキーマは、Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 の共有リポジトリ・スキーマとは異なります。Enterprise Manager リリース 1.x では、各管理者が個別のリポジトリ・スキーマを持っており、そこにネットワーク内の現行のビューとユーザー固有の情報が格納されていました。Enterprise Manager リリース 2.2 では、1 つの共有リポジトリ・スキーマに、それぞれの管理者がアカウントを持ち、そのアカウントに各人の作業環境が保存されています。

リリース 2.2 のリポジトリは、リリース 1.x のリポジトリと同じスキーマには置けません。リリース 2.2 のリポジトリとリリース 1.x のリポジトリは同じデータベース内に配置できませんが、同じスキーマには配置できません。

注意： リリース 1 のリポジトリがない場合は、この章を省略してください。

Migration Assistant では、リリース 2.2 の既存のリポジトリに対する次の情報の移行をサポートしています。

- 検出情報
- 優先接続情報リスト
- ジョブ情報
- イベント情報
- グループ

注意： Migration Assistant は Windows NT でしか稼働しませんが、ソースおよび宛先リポジトリ・データベース・プラットフォームに関係なく、リポジトリ・データは、リリース 1.x の任意のリポジトリからリリース 2.2 のリポジトリに移行できます。

重要な注意

注意： 移行を開始する前に、データベースおよびリリース 1.x のリポジトリをバックアップして、移行が失敗した場合でも、現在の Oracle Enterprise Manager リリース 1.x の環境とリリース 2.2 の環境を確実に回復できるようにしておいてください。

注意： リリース 1.x のリポジトリをリリース 2.2 に完全に移行した後で、リリース 2.2 で操作を行うと、リリース 1.x のリポジトリでは操作できなくなります。リリース 2.2 へのリポジトリの移行で問題が発生した場合は、移行前のステップが完了しており、リリース 2.2 の環境で作業を開始していない場合のみ、リリース 1.x へロールバックできます。

移行の段階

リリース 1.x のリポジトリの移行の段階は、次のとおりです。

1. [リポジトリ移行の準備](#)
 - a. [リリース 2.2 の新しい管理者の作成](#)
 - b. [リリース 1.x のコンソールの全サービスのリフレッシュ](#)

- c. リリース 1.x の現在のリポジトリの情報確認
- d. リリース 1.x の既存のリポジトリのバックアップ
2. Migration Assistant を使用したリポジトリの移行
3. リリース 1.x のコンソールからのすべてのアクティブ・ジョブおよびイベントの削除と登録解除。リリース 1.x コンソールからアクティブ・ジョブおよびイベントの削除と登録解除を行わないと、その Intelligent Agent で実行されるジョブに重複が生じる可能性があります。イベントは「not unique」エラーのために、登録に失敗します。
4. 移行成功の確認

リリース 1.x とリリース 2.2 の違いが移行に与える影響

リポジトリを移行すると、リリース 1.x の既存のリポジトリは、いくつかの点で変更されます。

リリース 1.x のオブジェクトの包括的なリストとそれらのリリース 2.2 への移行の可否は、7-18 ページの「[リリース 1.x のオブジェクト・リファレンス](#)」を参照してください。

リポジトリ

Oracle Enterprise Manager Migration Assistant は、リリース 1.6.5 のリポジトリをリリース 2.2 に移行します。リリース 1.6.5 より前のリポジトリで Oracle Enterprise Manager Migration Assistant を実行する場合は、まずリポジトリをリリース 1.6.5 にアップグレードし、次にリリース 2.2 にアップグレードします。Oracle Enterprise Manager では、リリース 1.2 以降のみがリリース 1.6.5 へのアップグレードをサポートします。対象のリポジトリがリリース 1.6.5 より古い場合は、移行の後では、Oracle Enterprise Manager リリース 1.x では機能しなくなります。リポジトリを移行する前に、スキーマまたは表領域（あるいはその両方）をバックアップしておいてください。

優先接続情報リスト

ユーザー名、パスワードおよびロールが移行されます。リリース 1.x の複数のリポジトリを、リリース 2.2 の 1 人の管理者の 1 つのリポジトリに移行する場合には、リリース 1.x の複数のリポジトリに存在していたサービスに最初に移行された優先接続情報リストが、リリース 1.x のリポジトリから最初に移行される優先接続情報リストとなります。

グループ

リリース 1.x では、複数のジョブやイベントを 1 つのグループに登録することが可能で、登録されたものは、1 つのジョブやイベントとしてコンソールに表示されます。リリース 2.2 では、1 つのジョブまたはイベントを 1 つのグループに登録すると、コンソールには、そのジョブやイベントが登録されたサービスごとに、個別のジョブまたはイベント・オブジェクトが表示されます。リリース 1.x で 1 つのグループに登録されたジョブまたはイベントをリリース 2.2 に移行すると、リリース 2.2 のコンソールには、そのジョブまたはイベントが登録されたグループのサービスごとに、個別のジョブまたはイベント・オブジェクトが表示されます。

ジョブ

- 修正ジョブ以外のアクティブ・ジョブと、リリース 2.2 の頻度制限内のアクティブ・ジョブのみが、Oracle Enterprise Manager のジョブ制御システムに自動的に発行されます。
- すでに NAME と名付けられたジョブがあるターゲット・データベースに同じ名前のジョブを移行すると、そのジョブは移行時に NAME(1) と名前が変更されます。すでに NAME(1) がある場合は NAME(2) というように、順次名前が変更されます。

バックアップ・ジョブ

リリース 1.x でバックアップ・ジョブの実行中にそのデータを移行すると、ジョブはリリース 2.2 で tcl ジョブとして表示されます。

注意： ジョブ・ライブラリ内のバックアップ・ジョブは、移行されません。Oracle Enterprise Manager コンソールでは、マネージャのバックアップ・ジョブと表領域のバックアップ・ジョブは異なります。

修正ジョブ

リリース 1.x の修正ジョブはリリース 2.2 のジョブ・ライブラリに移行されますが、この移行は自動的に発行されません。リリース 2.2 の修正ジョブは、移行後に、リリース 2.2 のジョブ・ライブラリから手動で再発行する必要があります。リリース 1.x のイベントとそれに関連付けられたリリース 1.x の修正ジョブは分離され、リリース 2.2 のイベント・ライブラリとリリース 2.2 のジョブ・ライブラリに、それぞれ（発行されずに）格納されます。移行後に、リリース 2.2 のイベント・ライブラリでリリース 2.2 のイベントを編集し、リリース 2.2 で手動で再発行した修正ジョブにもう一度関連付ける必要があります。

イベント

- 修正ジョブに関連付けられていない登録済イベントと、リリース 2.2 の頻度制限内のイベントのみが、自動的に発行されます。
- すでに NAME と名付けられたイベントがあるターゲット・データベースに同じ名前のイベントを移行すると、そのイベントは移行時に NAME(1) と名前が変更されます。すでに NAME(1) がある場合は NAME(2) というように、順次名前が変更されます。
- 修正ジョブをイベントに関連付けるには、イベントの宛先タイプをリリース 2.2 と同様に設定します。たとえば、リリース 1.x のイベントをサービス・タイプ「データベース」で作成し、それをリリース 1.x の修正ジョブに、サービス・タイプ「ノード」の「メッセージの配布」などで関連付けたとします。サービス・タイプの異なるリリース 1.x のイベントとリリース 1.x の修正ジョブは、関連付けて一緒に登録できます。リリース 2.2 では、イベントと修正ジョブを関連付けて一緒に登録するには、修正ジョブの宛先タイプと同一にする必要があります。

前述の例のように、イベントと修正ジョブを移行する場合は、リリース 1.x の修正ジョブで「類似作成」を実行し、このジョブのリリース 2.2 の宛先タイプをリリース 2.2 のイベントと同一になるように変更してください。

イベント・セット

- リリース 1.x のアーキテクチャでは、検出されたサービスに登録されていた個別のイベントの集合をイベント・セットといいます。リリース 2.2 のアーキテクチャでは、イベントは、個別のテストの集合を表します。リリース 2.2 のイベントは、リリース 1.x のイベント・セットに類似しています。リリース 2.2 では、リリース 1.x の個々のイベントをテストといいます。それぞれのテストは、リリース 1.x のイベントと同じ機能や設定を持ち、イベントは、リリース 1.x のイベント・セットと同じように定義できます。リリース 1.x のイベント・セットを移行すると、イベント・セット内の各イベントは、リリース 2.2 に別のイベントとして移行されます。
- リリース 2.2 のイベントの場合、頻度、頻度の単位および修正ジョブがイベント（最上位）レベルに割り当てられます。これらの項目は、リリース 1.x ではイベント（下位）レベルに割り当てられていました。リリース 1.x のイベント・セットで、すべてのイベントについてこれらの項目が異なる場合は、各イベントは、リリース 2.2 の個別のイベントに移行されます。リリース 1.x のイベント・セットで、すべてのイベントについてこれらの項目が同じ場合は、リリース 1.x のイベント・セット全体が、リリース 2.2 の 1 つのイベントに移行されます。

頻度

リリース 2.2 のジョブとイベントに対する頻度のオプションは、リリース 1.x と異なります。リリース 1.x でのみサポートされており、リリース 2.2 ではサポートされていない頻度が定義されているジョブまたはイベントは、リリース 2.2 の環境でもう一度発行またはスケジューリングしてください。たとえば、次のようになります。リリース 2.2 のイベントでは、24 時間未満のポーリング間隔をサポートしています。リリース 1.x では、24 時間を超えるポーリング間隔もサポートしています。

Performance Manager/Capacity Planner

リリース 1.x の Performance Manager と Capacity Planner では、任意の数のリポジトリをリリース 2.2 のリポジトリに移行できますが、それぞれリリース 2.2 の一意の管理者に関連付けられている必要があります。

Oracle Change Management Pack

注意： Change Manager リリース 1.5.5 のリポジトリを移行する場合は、最初の移行プロセスとして、移行前に、リポジトリをリリース 1.6.5 にアップグレードします。このアップグレードは元に戻すことはできません。このリポジトリで Change Manager リリース 1.5.5 は使用できなくなります。したがって、Change Manager リリース 1.5.5 でリリース 1.5.5 リポジトリを継続して使用するには、リリース 1.5.5 のリポジトリをバックアップし、移行後に復元します。

- Oracle Change Management Pack リリース 1.x のそれぞれのリポジトリは、リリース 2.2 のリポジトリの中で、どの管理者についても変更計画やベースラインがないものに移行する必要があります。管理者に変更の計画またはベースラインがある場合は、Change

Management Pack リリース 1.x のリポジトリを移行する前に、その計画またはベースラインを削除してください。削除しないと、Change Management Pack の移行は失敗します。この場合には、`sysman¥temp¥vobmgr.log` ファイルに、リリース 2.2 のリポジトリの中で、どの管理者が削除する必要のある計画またはベースラインを持っているかを識別するメッセージが含まれます。変更計画の削除には Plan Manager を、基準の削除には DB Capture を使用します。

Expert

Oracle Expert リリース 1.x のリポジトリの表は、Oracle Expert チューニング・セッションのエクスポートおよびインポートの方法を使用して、リリース 2.2 のリポジトリに移行されます。リリース 1.x のリポジトリにあるすべてのデータベースのチューニング・セッションは、すべて（データベースに対して 1 つの）.xdl ファイルにエクスポートされ、リリース 2.2 の選択された Oracle Enterprise Manager ユーザーのリポジトリにインポートされます。

ポケットベル・サービス

- リリース 1.x ユーザーのスケジュール情報は、リリース 2.2 の管理者に移行されません。それぞれのユーザーは、リリース 2.2 の環境でポケットベルの新しいスケジュールを定義する必要があります。
- ポケットベルの構成情報は、リリース 2.2 には移行されません。それぞれのユーザーは、リリース 2.2 の環境でポケットベルの新しい構成情報を定義する必要があります。

電子メール・サービス

- リリース 1.x ユーザーのスケジュール情報は、リリース 2.2 の管理者に移行されません。それぞれのユーザーは、リリース 2.2 の環境で電子メールの新しいスケジュールを定義する必要があります。
- 電子メールの構成情報は、リリース 2.2 には移行されません。それぞれのユーザーは、リリース 2.2 の環境で電子メールの新しい構成情報を定義する必要があります。

手動で検出されたノードおよび手動で追加されたサービス

手動で検出されたノードおよび手動で追加されたサービスは、移行されません。

リポジトリ移行の準備

移行を成功させるためには、次の手順を完了してください。

- Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 をインストールします。詳細は、対象のデータベース・リリースのインストレーション・ガイドを参照してください。
- [リリース 2.2 の新しい管理者の作成](#)。
- [リリース 1.x のコンソールの全サービスのリフレッシュ](#)。
- [リリース 1.x のコンソールとリリース 2.2 の Management Server の停止](#)。
- [リリース 1.x の現在のリポジトリの情報確認](#)。
- [リリース 1.x の既存のリポジトリのバックアップ](#)。

リリース 2.2 の新しい管理者の作成

Migration Assistant を使用して、リリース 1.x の 1 つのリポジトリをリリース 2.2 の 1 つのリポジトリへ移行することも、リリース 1.x の複数のリポジトリをリリース 2.2 の 1 つのリポジトリへ移行することもできます。

いずれの場合も、最初に新しい管理者を作成し、リリース 1.x のリポジトリ情報が管理者のリリース 2.2 のアカウントに移行されるようにします。

各 Enterprise Manager 管理者は、そのリポジトリ・データベース・アカウントでは、個別のユーザーです。

注意： リリース 2.2 の新しい管理者を作成しない場合、移行オブジェクトは、すべて SYSMAN アカウントに移行されます。SYSMAN アカウントは、Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 をインストールすると提供される、デフォルトのスーパー管理者アカウントです。

新規管理者を作成するには、次の手順に従ってください。

1. Management Server を起動します。

Management Server 起動の詳細は、[第 3 章「Management Server の管理」](#)を参照してください。

2. SYSMAN アカウントを使用して、Oracle Enterprise Manager コンソールのリリース 2.2 にログインします。Enterprise Manager コンソール起動の詳細は、[第 6 章「コンソールの設定」](#)を参照してください。
3. コンソールの「システム」メニューから、「管理者の管理」を選択します。「管理者の管理」ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. 「管理者の管理」ダイアログ・ボックスの「追加」ボタンをクリックします。「管理者アカウントの作成」ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. Enterprise Manager 管理者の一意のユーザー名とパスワードを入力し、その管理者に使用可能なアクセス権を確認します。

Enterprise Manager 管理者の管理の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

リリース 1.x のコンソールの全サービスのリフレッシュ

移行前に、移行の必要なサービスがすべて、リリース 1.x のコンソールによって正常にリフレッシュされていることを確認してください。

リフレッシュされなかったサービスは、移行できません。

リリース 1.x のコンソールとリリース 2.2 の Management Server の停止

リリース 1.x のコンソールと Management Server が稼働している場合は、停止してください。リモート Intelligent Agent は実行されたまま、既存のキュー・ファイルはそのまま残ります。

リリース 1.x の現在のリポジトリの情報確認

移行の際に情報が消失しないように、リリース 1.x のリポジトリの現在の情報を確認してください。この情報は、リリース 2.2 へ移行した後に情報が現在のものであるかどうかを確認するために使用します。

リリース 1.x リポジトリでは、次の情報を確認してください。

1. 検出情報について、リリース 1.x の環境で検出されたホストとサービスの数をカウントします。
2. 最低 1 つのノードの接続情報を参照します。
3. ジョブ情報については、注意すべき関連情報として次のものがあります。
 - ジョブ数
 - ジョブのタイプ
 - ジョブの状態
 - ジョブの履歴情報
4. イベント情報については、次のような関連情報に注意してください。
 - イベント・グループ数
 - 各グループ内のイベント数
 - 各グループが登録されているノード
 - イベントの現在の状態

リリース 1.x の既存のリポジトリのバックアップ

移行中に予期せぬエラーが発生した場合、Migration Assistant では自動リカバリはサポートされていません。リリース 1.x のリポジトリとリリース 2.2 のリポジトリをバックアップし、移行が失敗した場合でも、現在の Oracle Enterprise Manager リリース 1.x の環境とリリース 2.2 の環境を確実に回復できるようにしておいてください。

注意： SYS ユーザーで作成したリポジトリは、エクスポートできません。

リポジトリのバックアップには、Enterprise Manager のエクスポート・ウィザード、または Oracle データベース・サーバーに同梱されている基本ユーティリティ、EXPORT ユーティリティのどちらを使用してもかまいません。データ管理の各種ウィザード使用の詳細は、Oracle Enterprise Manager のオンライン・ヘルプを参照してください。

次の例は、Oracle 8.0 サーバーが 1 つ稼働している NT 環境のものです。

```
exp80 user/password@service owner=oemv1schema file=oemv1.dmp
```

ここで、USER は移行する Oracle Enterprise Manager リポジトリのユーザー名、PASSWORD はそのユーザーのパスワードです。

この例では、保存されたりポジトリは、oemv1.dmp に書き込まれます。

エクスポートの終了時には、エクスポートが無事完了したかどうかを知らせる次のメッセージが表示されます。

```
Export terminated successfully without warnings.
```

エクスポート・ユーティリティの詳細は、『Oracle8i ユーティリティ・ガイド』を参照してください。

Migration Assistant を使用したリポジトリの移行

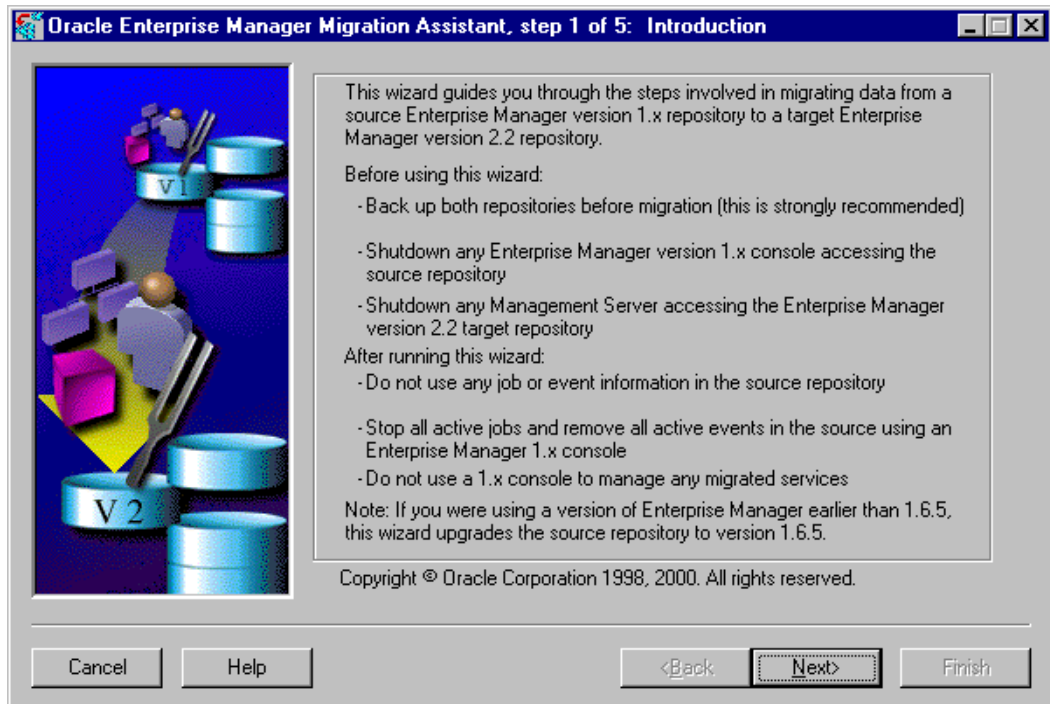
移行対象のリリース 1.x の Oracle Enterprise Manager 環境の各データベースの指示に従ってください。

Windows NT の「スタート」メニューから、Enterprise Manager Migration Assistant を起動します。

ステップ1「イントロダクション」

Migration Assistant を起動すると、「イントロダクション」ページが現れ、Migration Assistant の目的と、移行を成功させるために必要な前提条件についての重要情報が表示されます。

図 7-1 イントロダクション



イントロダクションを読み、「次へ」を押して操作を続けます。

1 つ以上の Management Pack がインストールされている場合は、7-11 ページの「[ステップ 2「コンポーネントの選択」](#)」に進んでください。

Management Pack がインストールされていない場合は、7-12 ページの「[ステップ 3「ソース・リポジトリ・ログイン」](#)」に進んでください。

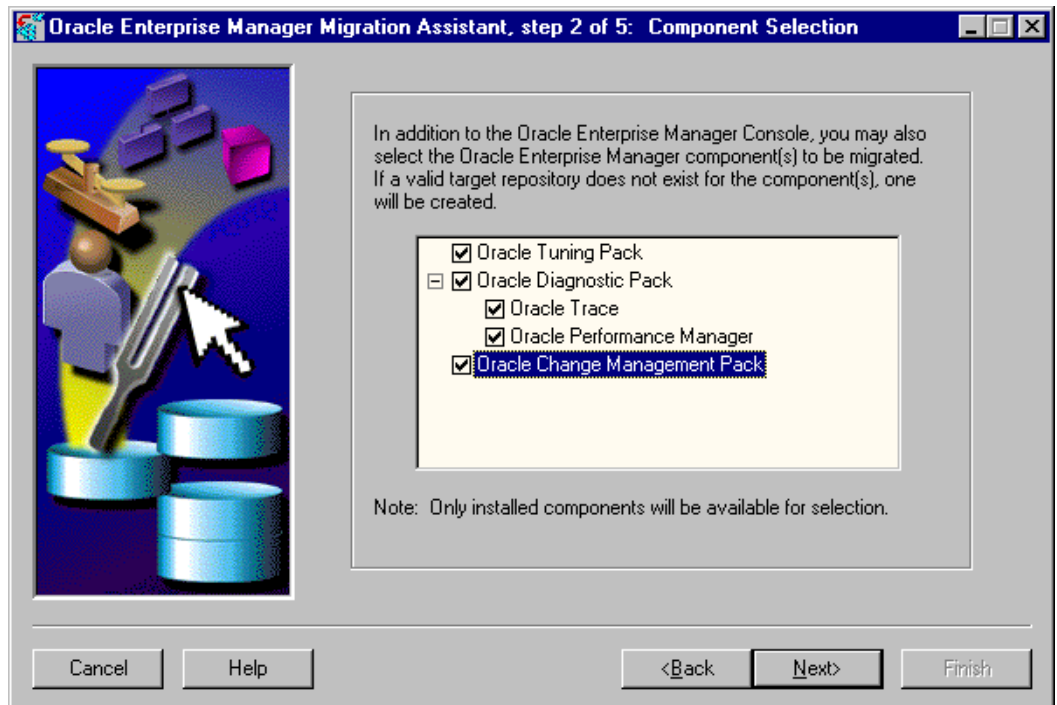
ステップ2「コンポーネントの選択」

注意： 1つ以上の Management Pack がインストールされている場合にのみ、「コンポーネントの選択」ページが現れます。

移行するリポジトリ・コンポーネントを選択します。

選択できるのはインストールされているコンポーネントのみです。コンポーネントに有効なターゲット・リポジトリがない場合は、1つ作成されます。

図 7-2 コンポーネントの選択

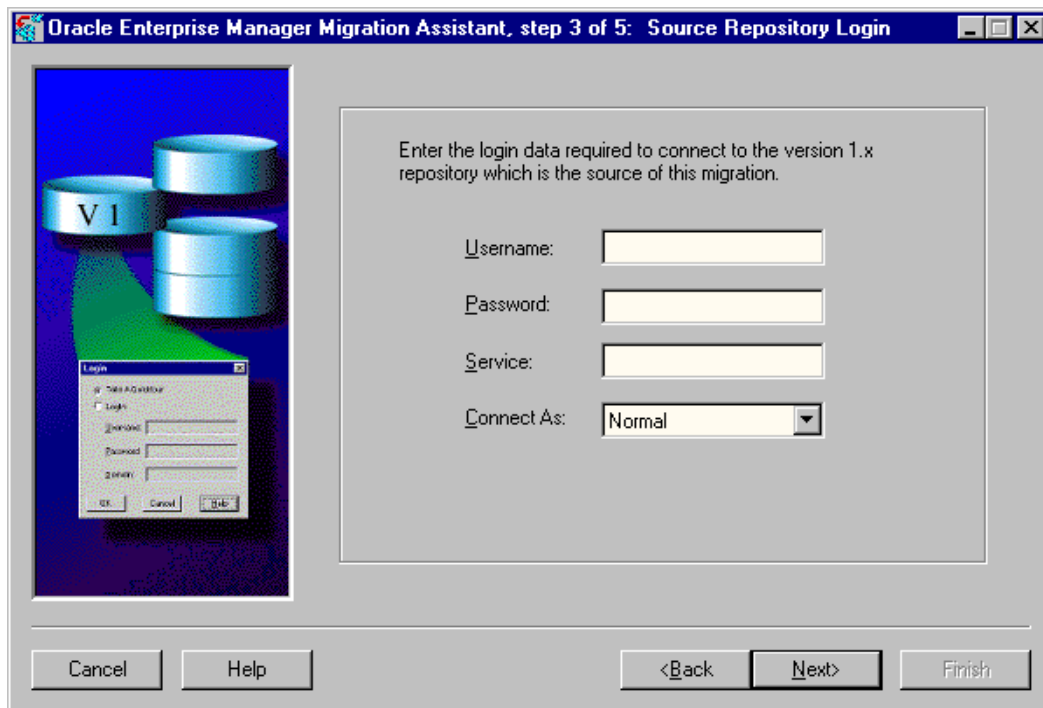


選択が終了したら、「次へ」を押して操作を継続します。

ステップ3「ソース・リポジトリ・ログイン」

リリース 1.x のリポジトリが格納されているデータベースにログインします。

図 7-3 ソース・リポジトリ・ログイン



Oracle Enterprise Manager Migration Assistant, step 3 of 5: Source Repository Login

Enter the login data required to connect to the version 1.x repository which is the source of this migration.

Username:

Password:

Service:

Connect As:

Cancel Help <Back Next> Finish

ユーザー名とパスワード： リリース 1.x のリポジトリが格納されているデータベースの有効なユーザー名を指定します。

サービス： 標準の SQL*Net リリース 2 または Net8 の構文を使用します。サービス名は、tnsnames.ora ファイルに示されるとおりのデータベース名です。

接続モード：「標準」で接続します。

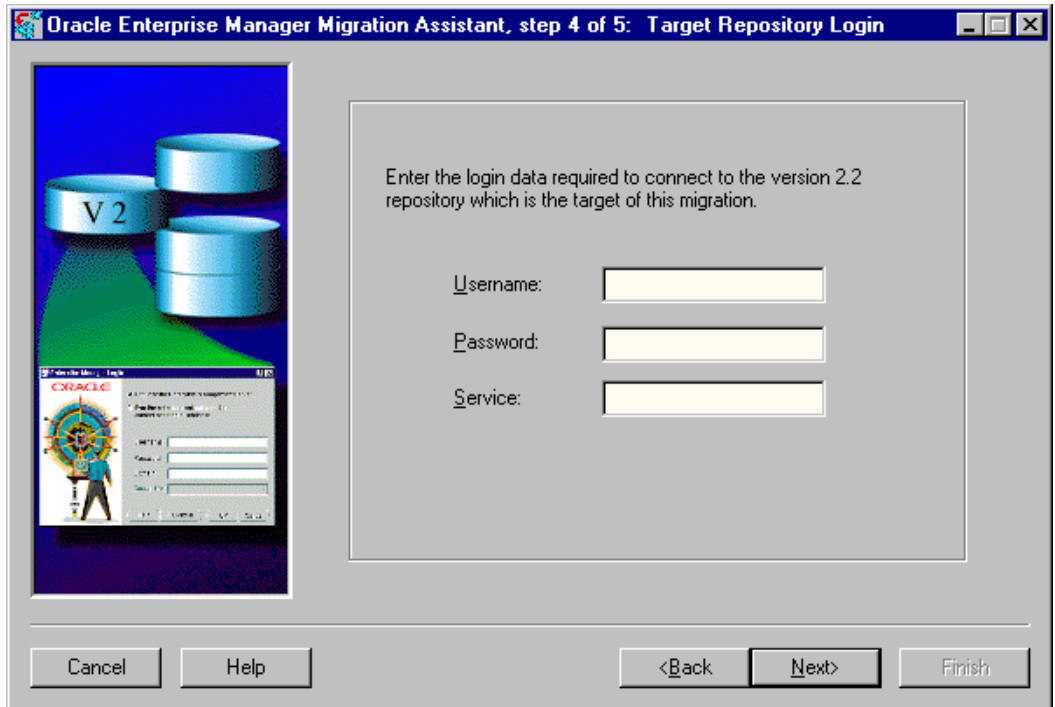
「次へ」を押して、操作を継続します。

入力した情報が有効で、これに該当する有効なリリース 1.x のリポジトリが存在する場合は、7-13 ページの「ステップ4「ターゲット・リポジトリ・ログイン」」に進みます。

ステップ4「ターゲット・リポジトリ・ログイン」

リリース 2.2 の新しいリポジトリに対するユーザー名、パスワードおよびサービス名を入力します。

図 7-4 ターゲット・リポジトリ・ログイン



Oracle Enterprise Manager Migration Assistant, step 4 of 5: Target Repository Login

Enter the login data required to connect to the version 2.2 repository which is the target of this migration.

Username:

Password:

Service:

Cancel Help <Back Next> Finish

ユーザー名とパスワード： Oracle Enterprise Manager のユーザー名は、リリース 2.2 のリポジトリを作成したユーザー名と同じものを使用してください。つまり、ユーザー名とパスワードは、リポジトリ・スキーマの所有者の接続情報となります。Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 のリポジトリは、Oracle データベース・スキーマです。ユーザー名とパスワードは、Oracle Enterprise Manager のユーザー・ログイン時のものではありません。

サービス： 標準の SQL*Net リリース 2 または Net8 の構文を使用します。サービス名は、`tnsnames.ora` ファイルに示されるとおりのデータベース名です。

「次へ」を押して、操作を続けます。

リリース 2.2 の有効なリポジトリに対して、有効なリポジトリ名、パスワードおよびサービスを入力した場合は、7-14 ページの「ステップ5「管理者データ」」へ進みます。Oracle Enterprise Manager Migration Assistant では、移行する情報がリリース 2.2 のリポジトリに

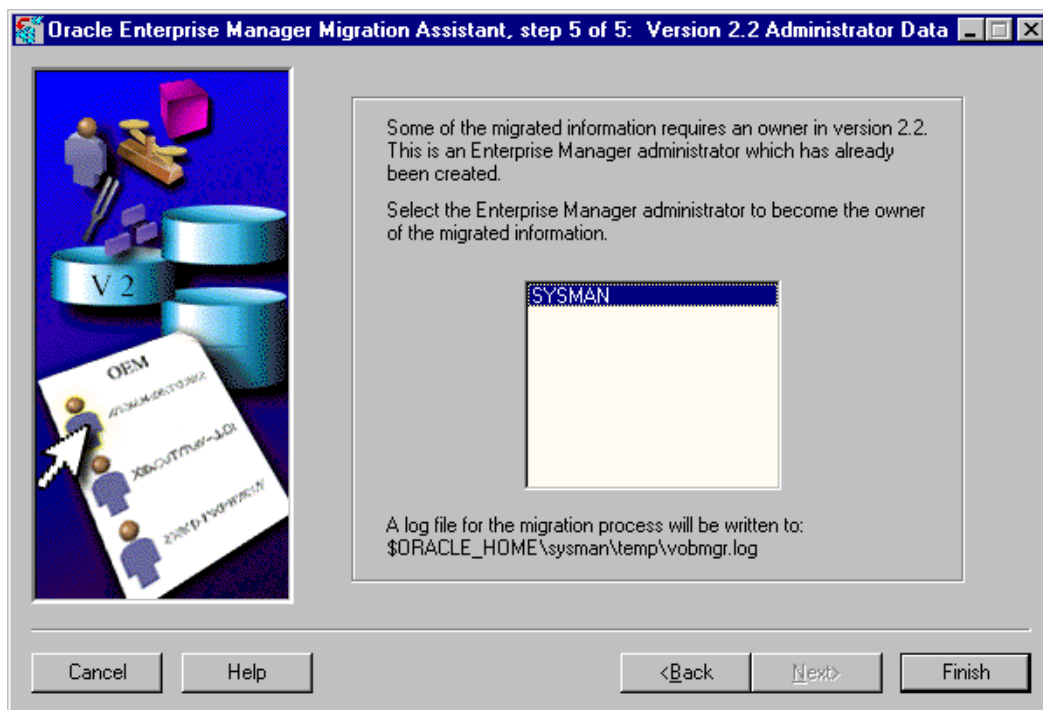
すでに存在しているかどうか、情報の書式がリリース 1.x の書式と異なるかどうか、この情報がどのように変換されたかが、ダイアログ・ボックスによって通知されます。

ステップ 5 「管理者データ」

リリース 2.2 で情報の移行先となる管理者を指定します。

注意： リリース 2.2 で新しい管理者を作成していない場合は、移行オブジェクトはすべて、SYSMAN 管理者アカウントに移行されます。

図 7-5 リリース 2.2 管理者データ



「完了」をクリックして移行プロセスを開始するか、「戻る」をクリックして前のページに戻り、設定を変更します。

進行中の作業

「進行中の作業」ウィンドウが現れ、作業の進捗状況が知らされます。「進行中の作業」ウィンドウの情報は、`%oracle_home%\sysman\temp` ディレクトリにある `vobmgr.log` ファイルにすべて記録されます。

注意： Change Management Pack をインストール済かつ、Change Management Pack アプリケーションをまだ使用していないリリース 1.x のリポジトリを移行すると、Change Management オブジェクトがリリース 2.2 の新しいリポジトリ内に自動的に作成されます。

リリース 1.x のコンソールからのすべてのアクティブ・ジョブおよびイベントの削除と登録解除

リリース 1.x のリポジトリからリリース 2.2 環境のリポジトリへ移行するには、調整が必要です。移行プロセスには、リリース 1.x のアクティブなジョブとイベントをすべて手動で削除および登録解除するプロセスが含まれます。

リリース 1.x のリポジトリで定義されたジョブとイベントの情報は、リリース 2.2 のリポジトリにコピーされます。

リポジトリの移行を実行したら、次の手順に従ってください。

1. リリース 1.x のコンソールを起動し、移行されたリリース 1.x のリポジトリに接続します。
2. アクティブなジョブとイベントをすべて、手動で削除または登録解除します。アクティブ・ジョブおよびイベントの削除と登録解除を行わないと、その Intelligent Agent で実行されるジョブに重複が生じる可能性があります。イベントは「not unique」エラーのために、登録に失敗します。

注意： Management Server を起動する前に、情報を移行し、リリース 1.x のコンソールを起動せずに、ジョブおよびイベントを削除すると、最初の起動時に、イベントの登録とジョブの発行が試行されます。ジョブは登録されますが、イベントは、リリース 1.x のコンソールからすでに Intelligent Agent に登録されているため、失敗することがあります (Intelligent Agent のイベントの一意性に対する制約)。

コンソールでは失敗したことが表示されます。リリース 1.x のイベントを登録解除し、リリース 2.2 のコンソールで、失敗したイベント登録から「類似作成」を使用して再登録を行います。

3. リリース 1.x のコンソールを停止します。
4. Management Server を起動します。

注意： リリース 1.x のそれぞれのリポジトリを、リリース 2.2 の 1 つのリポジトリへ移行するには、同じステップを繰り返します。

移行成功の確認

Migration Assistant によって、リリース 1.x のリポジトリ情報が、リリース 2.2 の指定された管理者に移行された後、その管理者でリリース 2.2 のコンソールにログインして移行を確認します。

検出、優先接続情報リスト、ジョブおよびイベント情報の移行成功をチェックして、リポジトリの移行後にすべての情報があることを確認してください。

1. 検出情報について、移行後にコンソールのナビゲータに、ホストとサービスが表示されていることを確認します。

注意： Migration Assistant は、手動で検出された対象は移行しません。

2. 移行された接続情報を使用してデータベースにアクセスするために、リリース 2.2 のコンソールのナビゲータで、最低 1 つのノードの接続情報が表示されるようにします。

注意： リリース 2.2 のコンソールで、移行されたサービス名と、リリース 1.x のコンソールで使用された接続情報の表に格納されているサービス名が一致しない場合は、移行後にリリース 2.2 のコンソールを使用して、関連するサービスに対して優先接続情報リストを再入力してください。

3. ジョブ情報については、チェックすべき関連情報として、ジョブ数、ジョブのタイプ、ジョブの状態、および関連のジョブ履歴情報があります。リリース 1.x のジョブの中には、リリース 2.2 に移行されないタスクが含まれているものもあります。これらのジョブについても考慮する必要があります。移行されないジョブ・タスクの情報は、7-18 ページの「[リリース 1.x のオブジェクト・リファレンス](#)」を参照してください。
4. イベント情報については、注意すべき関連情報として、イベント数、各イベント内のテスト数、各グループが登録されているノード、およびイベントの現在の状態があります。移行されないイベント・テストの情報は、7-18 ページの「[リリース 1.x のオブジェクト・リファレンス](#)」を参照してください。

5. 正常に移行された Performance Manager の記録とユーザー定義のグラフの数については、移行ログ・ファイル、`sysman¥temp¥vobmgr.log` を確認します。
6. Oracle Expert 移行プロセスの情報は、`sysman¥temp¥vobmgr.log` ファイルと、さらに詳細な `sysman¥temp¥xpomigr.log` ファイルを調べます。
7. Change Management については、リリース 1.x の Plan Manager と DB Capture のベースラインと変更計画の数をカウントし、リリース 2.2 に移行された数と比較する必要があります。

移行の取消し

移行中に予期せぬ問題が発生した場合、Oracle Enterprise Manager 環境を前の状態に復元しなければならないことがあります。Oracle Enterprise Manager 環境を復元するには、次のようになります。

1. DBA Studio の Security Management を使用して、リリース 1.x のリポジトリ・ユーザーを削除します。Security Management の詳細は、Oracle Enterprise Manager のオンライン・ヘルプを参照してください。
2. インポート・ウィザードまたは IMPORT ユーティリティ (Oracle データベース・サーバーに付随している基本ユーティリティ) を使用して、リリース 1.x で保存されているリポジトリ・ユーザーをインポートします。ユーザーは、インポート時に再作成されます。インポート・ウィザードの使用の詳細は、Oracle Enterprise Manager のオンライン・ヘルプを参照してください。次の例では、IMPORT ユーティリティを使用します。

```
imp user/password@service file=oemv1.dmp
```

スキーマをインポートすると、リリース 1.x のリポジトリが移行前の状態で再作成されます。

注意： ジョブとイベントが登録解除されている場合は、再登録する必要があります。

インポート・ユーティリティの詳細は、『Oracle8i ユーティリティ・ガイド』を参照してください。

リリース 1.x のオブジェクト・リファレンス

リリース 1.x のオブジェクトの包括的なリストとそれらのリリース 2.2 への移行の可否は、次の項を参照してください。

リリース 2.2 へ移行されるリリース 1.x のオブジェクト

リリース 1.x の次のオブジェクトは、リリース 2.2 へ移行できます。

優先接続情報リスト

ユーザー名、パスワードおよびロールが移行されます。リリース 1.x の複数のリポジトリを、リリース 2.2 の 1 人の管理者の 1 つのリポジトリに移行する場合には、リリース 1.x の複数のリポジトリに存在していたサービスに最初に移行された優先接続情報リストが、リリース 1.x のリポジトリから最初に移行される優先接続情報リストとなります。

サービス

データベース、ノードおよびリスナーは、最後の検出およびリフレッシュのステータスが成功であれば、移行されています。

グループ： リリース 1.x では、ジョブとイベントは 1 つのオブジェクトとしてグループに登録されます。リリース 1.x のグループに 1 つのジョブまたはイベントが登録されている場合は、そのジョブまたはイベントが登録されているサービスごとに個別のジョブまたはイベントが作成され、リリース 2.2 に移行されます。

グループは論理エンティティとして移行されないので、ジョブまたはイベントはグループには移行されません。リリース 2.2 にはグループはありません。リリース 1.x のすべてのグループ・メンバーは、リリース 2.2 に個別に移行されます。リリース 2.2 でグループを再作成し、移行されたメンバーをもう一度追加する必要があります。

ジョブ

DBA スクリプトの実行	データベースの起動	TCL の実行
SQL*Plus の実行	メッセージの配布	リスナーの停止
データベースの停止	OS コマンドの実行	リスナーの起動

修正ジョブ

すべてのスケジュール情報	優先接続情報リストの上書き	ジョブ履歴
従属ジョブ	ジョブ・ライブラリ	アクティブ・ジョブ

イベント

警告	プローブ	動作・停止 (データベース)	バッファ・キャッシュ
データ・ディクショナリ・キャッシュ	ディスク I/O	ライブラリ・キャッシュ	ネット I/O
SysStat 表	SysStat 表デルタ	データファイル制限	ロック制限
プロセス制限	セッション制限	ユーザー制限	アーカイブ満杯
小容量	ダンプ満杯	最大エクステント	ユーザー・ブロック
連鎖行	動作・停止 (リスナー/SQL*Net)	動作・停止 (ノード)	CPU ページング率
CPU 使用率	ディスク満杯	スワップ満杯	アーカイバの停止
中断したジョブ	データ・ブロック破壊	遅延トランザクション	エラー・トランザクション
失敗したジョブ	セッション終了	スケジュール解除されたジョブ	空きバッファ
メモリー・ソート	索引再作成	REDO ログ割当	ロールバック競合
警告ファイル過大	セグメントの高速拡張	複数エクステント	スナップショット・ログ満杯
表領域満杯	ユーザー監査	Data Gatherer 警告	Data Gatherer 動作・停止

その他

イベント・ライブラリ	登録	サードパーティ・イベント
トリガー・イベントに関連付けられた修正ジョブ	頻度	バック・リポジトリ

再作成が必要なリリース 1.x のオブジェクト

次のオブジェクトは、再作成する必要があります。

ジョブ

Oracle Enterprise Manager ジョブからの 表領域のバックアップ	エクスポート
インポート	ロード

その他

SNMP トラップ	ポケットベル・サービス	電子メール・サービス
管理者リスト	手動で追加されたサービス	手動で検出されたターゲット

使用不可になるリリース 1.x のオブジェクト

リリース 1.x の次のオブジェクトは、リリース 2.2 では使用できません。

ジョブ

製品のアンインストール	パッケージの削除
パッケージの配布	パッケージのインストール

イベント

Rdb データベース・イベント	Rdb サービス・イベント
イベント履歴	未処理のイベント

その他

マップ

DBA Studio の設定

DBA Management Pack の中心機能は、DBA Studio と SQL*Plus Worksheet です。

DBA Studio は、複数のデータベース・ツールとマスター・ビューの詳細を組み合わせて、1つのツールからデータベース管理者機能にアクセスし、複数のデータベースを管理できるようにします。DBA Studio は、次の要素で構成されます。

- Instance Management: データベースの起動または停止、データベースの初期化パラメータの編集、リソースの割当てとユーザー・セッションの管理を行います。
- Schema Management: スキーマ・オブジェクトの作成、編集および調査を行います。
- Security Management: ユーザー、権限およびプロファイルを管理します。
- Storage Management: 表領域、データファイル、ロールバック・セグメントおよび REDO ログを管理します。制御ファイルとアーカイブ・ログ情報も参照できます。
- Replication Management: 管理者が Oracle レプリケーション環境の設定、構成および管理を迅速に行えるようにします。
- JServer Management: ネームスペースの管理、ネームスペース内に公開された CORBA および EJB コンポーネントの参照、公開コンポーネントに対する権限の変更、スキーマに常駐する Java クラス内の main() メソッドの実行、および出力の表示が可能になります。
- Cache Management: Oracle8i Cache によって作成されたキャッシュを設定、管理および監視できます。Oracle8i Cache では、インテリジェント中間層キャッシュが追加されるため、Web アプリケーション、エンタープライズ・リソース計画 (ERP) アプリケーション、垂直アプリケーションなどのアプリケーションの能力が向上します。Oracle8i Cache を使用して、頻繁に使用するデータを中間層ノードでキャッシュに格納すると、使用環境で処理できる要求の数が増加します。

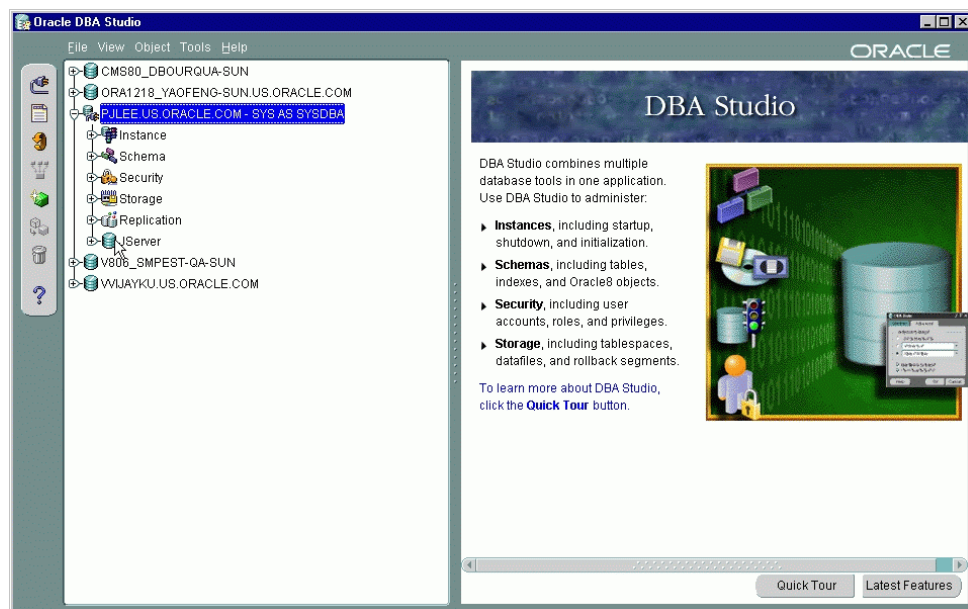
Enterprise Manager の以前のリリースでは、個別のデータベース・ツール (Instance Manager、Schema Manager、Storage Manager、Security Manager および Replication Manager) がありました。高度に統合された DBA Studio を使用せずに個別の独立ツールを引き続き使用する場合は、カスタム・インストール・オプションを使用してそれらのツールをインストールする必要があります (Replication Manager および Cache Manager を除く)。

DBA Studio を使用すると、データベース管理作業を実行し、リリース 7.3.4 以降の Oracle データベースをサポートできます。

また、分析ウィザード、バックアップ管理ウィザード、データ管理ウィザード、ディメンション作成ウィザード、サマリー・アドバイザ・ウィザード、表作成ウィザードおよびビュー作成ウィザードも使用可能です。

注意： 非 DBA ユーザーとして SQL*Plus Worksheet 以外の DBA Studio および DBA Management Pack アプリケーションを使用する場合、SELECT_CATALOG_ROLE 権限が必要です。SELECT_CATALOG_ROLE は、Oracle8 以上のデータベースでのみ使用可能です。SELECT_CATALOG_ROLE の作成の詳細は、8-17 ページの「[7.3.4 データベースに対して DBA Studio への非 DBA ユーザー・アクセスを設定](#)」を参照してください。

図 8-1 DBA Studio



注意： 同時に2つのオブジェクトが編集された場合、最後にコミットされた編集内容が、前にコミットされた変更内容を警告なしで上書きします。

この章の内容は、次のとおりです。

- スタンドアロンまたは Oracle Management Server (OMS) モードの DBA Studio
- スタンドアロン・モードの DBA Studio の設定
- OMS モードの DBA Studio の設定
- DBA Studio のその他の手順

スタンドアロンまたは Oracle Management Server (OMS) モードの DBA Studio

DBA Studio を起動する際には、データベースに直接接続することも（スタンドアロン・モード）、Oracle Management Server を介してデータベースに接続することも（OMS モード）できます。

データベースへの直接接続

ジョブ、イベント、グループ・システムを必要としない基本的な管理タスクを実行する場合は、DBA Studio をスタンドアロン・モードで実行します。スタンドアロン・モードで接続すると、DBA Studio は、データベースのローカル・レコードに設定したデータベースにアクセスできるようになります。

注意： データベースに直接接続された DBA Studio（スタンドアロン・モード）のみを実行する場合は、Management Server とリポジトリは必要ありません。

Oracle Management Server による接続

次の場合には、DBA Studio を OMS モードで実行します。

- Oracle Enterprise Manager のフレームワークを使用する場合
- イベント、ジョブまたはグループを必要とする基本管理作業を実行する場合（たとえば、バックアップ管理ウィザードおよびデータ管理ウィザードの使用）
- コンソールで以前に検出されたすべてのデータベースにアクセスする場合

- Web ブラウザを使用して DBA Studio を実行する場合

Oracle Management Server に接続すると、DBA Studio は、検出されたノードのすべてのデータベースにアクセスできるようになります。DBA Studio を接続するには、Oracle Management Server が稼働している必要があります。

スタンドアロン・モードの DBA Studio の設定

DBA Studio をスタンドアロン・モードで実行する場合は、Oracle Enterprise Manager またはリポジトリを設定する必要はありません。

DBA Studio をスタンドアロン・モードで設定するには、次の作業を実行します。

- DBA Studio の起動
- DBA Studio のナビゲータ・ツリーで管理対象のデータベースを選択または追加

スタンドアロン・モードでの DBA Studio の起動

1. DBA Studio を起動します。

- Windows NT の場合

Windows の「スタート」メニュー→「プログラム」→
「Oracle-<Oracle_Home_Name>」→「Database Administration」→「DBA Studio」
を選択して、DBA Studio を起動できます。

コマンド行から次のコマンドを使用して、DBA Studio を起動することもできます。

```
oemapp dbastudio
```

- UNIX の場合

コマンド行から次のコマンドを使用して、DBA Studio を起動できます。

```
oemapp dbastudio
```

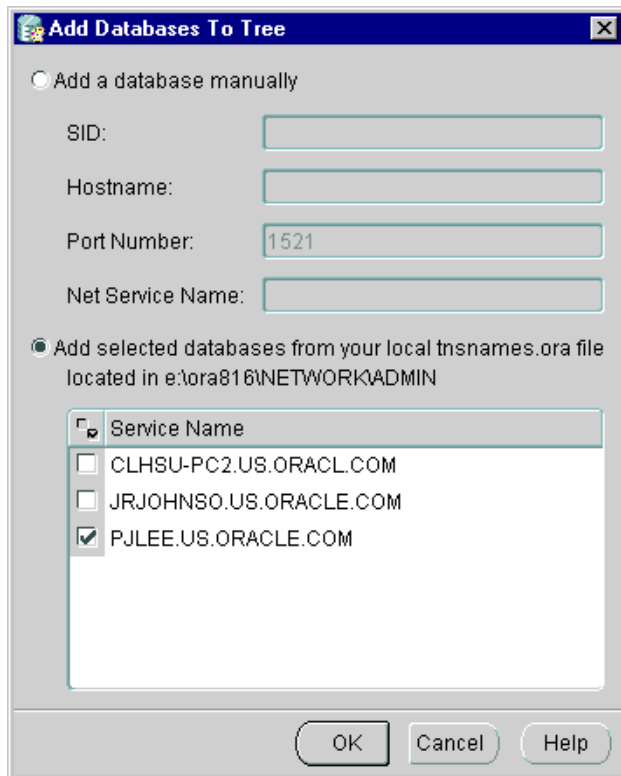
2. ログイン・ダイアログ・ボックスが表示されます。ここで「データベースに直接接続」を選択し、「OK」をクリックします。

DBA Studio を最初に起動した時点では、管理対象のデータベースが追加されていないため、DBA Studio の左側のパネルには何も表示されません。「データベースをツリーに追加」ダイアログ・ボックスが自動的に表示され、ここでナビゲータ・ツリーにデータベースを追加できます。

スタンドアロン・モードの DBA Studio のツリーにデータベースを追加

DBA Studio を最初に起動すると、「データベースをツリーに追加」ダイアログ・ボックスが自動的に表示されます。このダイアログ・ボックスは、「ファイル」メニューからも選択できます。

図 8-2 「データベースをツリーに追加」



「データベースをツリーに追加」ダイアログ・ボックスでは、ネット・サービス名を手動で入力するか、またはローカルの `tnsnames.ora` ファイルから追加できます。

手動によるデータベースの追加

次のフィールドに情報を指定して、DBA Studio のナビゲータ・ツリーに手動でデータベースを追加できます。

- **SID:** データベース・システムの識別子で、通常は `ORCL` などのインスタンス名。
- **ホスト名:** データベースが格納されているマシン名またはノード名。

- ポート番号： データベース・リスナーのポート・アドレスで、通常は 1521 または 1526。
- ネット・サービス名： マシンへの接続時にデータベースを一意に識別する名前。通常はグローバル・データベース名です。たとえば、次のようになります。ORCL.world.

注意： データベースを手動で追加すると、
<Oracle_Enterprise_Manager_Home>/network/admin ディレクトリ
の tnsnames.ora ファイルが自動的に更新されます。

選択したデータベースをローカル tnsnames.ora ファイルから追加

Oracle Enterprise Manager ホームのローカル tnsnames.ora ファイルからデータベース・サービス名を読み込み、DBA Studio のナビゲータ・ツリーに移入できます。「データベースをツリーに追加」ダイアログ・ボックスには、tnsnames.ora ファイルに保存されているデータベースがリスト表示され、ここでデータベースを選択または選択解除できます。「サービス名」の左側の列ヘッダーをクリックし、すべてのデータベースを選択または選択解除します。すべてのデータベースを選択解除した場合は、チェックボックスでデータベースを個別に選択できます。

注意： 現在、DBA Studio で手動で入力できるのは、TCP/IP サービス名のみです。ネットワーク・プロトコルが必要な場合は、Net8 Configuration Assistant を使用して tnsnames.ora ファイルにプロトコルを入力して追加します。tnsnames.ora ファイルから選択したサービスをインポートする場合には、すべてのプロトコルがサポートされます。

スタンドアロン・モードの DBA Studio でデータベースへ接続

DBA Studio でデータベースに接続するには、次の 4 通りの方法があります。

- DBA Studio のナビゲータ・ツリーのコンテナの隣にあるプラス記号をクリックします。接続情報が設定されていない場合は、優先接続情報リストが使用されます。
- DBA Studio のナビゲータ・ツリーでデータベースのアイコンをダブルクリックします。接続情報が設定されていない場合は、優先接続情報リストが使用されます。
- データベースを選択し、「ファイル」メニューの「接続」を選択します。
- データベースを選択し、ツールバーの「接続」アイコンを選択します。

Oracle Enterprise Manager コンソールで優先接続情報リストが設定されていない場合は、「データベース接続情報」ダイアログ・ボックスが表示されます。優先接続情報リストが設定されている場合は、このログイン情報を使用してデータベースに接続します。

「データベース接続情報」ダイアログ・ボックスで、次の情報を指定してデータベースに接続します。

ユーザー名

接続するデータベースに対する Oracle ユーザー名を指定します。

たとえば、次のようになります。system

パスワード

接続するデータベースに対する Oracle パスワードを指定します。

たとえば、次のようになります。manager

接続モード

プルダウン・リストから、「NORMAL」、「SYSOPER」または「SYSDBA」のどの権限でデータベースに接続するかを選択できます。一般ユーザーとしてデータベースに接続する場合は、NORMAL を選択します。データベースの停止や起動など、特別な処理権限でデータベースに接続する場合は、SYSOPER を選択します。ユーザーに任意の権限を付与するなど、対象データベースに対してすべての権限を持つユーザーとしてデータベースに接続する場合は、SYSDBA を選択します。

SYSOPER 権限と SYSDBA 権限を使用するには、パスワード・ファイルまたは OS グループの認証を作成し、データベースに設定する必要があります。

ローカル優先接続情報リストとして保存

優先接続情報リストを保存するオプションも用意されており、これを使用して、ユーザー名、パスワード、ロール（NORMAL、SYSOPER または SYSDBA）などのログイン情報をローカル・ファイルに保存できます。パスワードは、必ず暗号化されて保存されます。

データベースへの接続が確立したときに、そのつどユーザー名とパスワードを入力するのではなく、かわりにこのログイン情報が使用されます。

「ローカル優先接続情報リストとして保存」チェックボックスを選択するか、「ファイル」メニューから「ローカル優先接続情報リストの編集」ダイアログ・ボックスを使用して、優先接続情報リストを設定できます。

このチェックボックスはデフォルトで選択されています。

スタンドアロン・モードの DBA Studio のローカル優先接続情報リストの編集

優先接続情報リストを保存または編集するオプションも用意されており、これによって、ユーザー名、パスワード、ロール（NORMAL、SYSOPER または SYSDBA）などのログイン情報を格納できます。パスワードは、必ず暗号化されて保存されます。

注意： パスワードは、別のマシンにコピーされて別のユーザーに使用されないように、ローカル・ファイル内で暗号化されます。

データベースへの接続時には、その都度ユーザー名とパスワードを入力しなくても、このログイン情報が使用されます。

DBA Studio には、DBA Studio のナビゲータ・ツリーに表示されるデータベースのリストが格納されています。これらのデータベースのいずれかの優先接続情報リストが指定されると、ユーザー名、暗号化されたパスワードおよびロールが、ローカル・ファイルに追加されます。

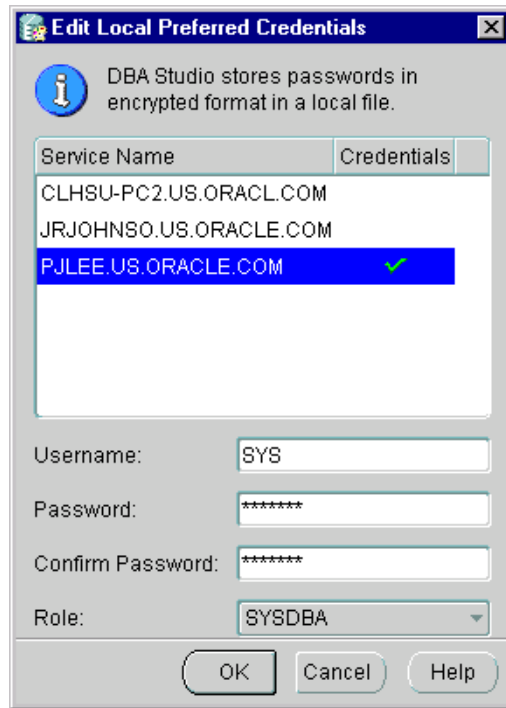
DBA Studio は、ログイン接続情報のローカル・レコードを、Oracle Management Server から個別に更新します。

注意： ローカルの優先接続情報リストを編集できない場合は、DBA Studio がスタンドアロン・モードになっているかどうかを確認してください。

サービスのローカル優先接続情報リストを保存または編集するには、次のステップを実行します。

1. 「ファイル」メニューの「ローカル優先接続情報リストの編集」を選択します。「ローカル優先接続情報リストの編集」ダイアログ・ボックスに、サービスのリストが表示されます。

図 8-3 「ローカル優先接続情報リストの編集」



2. 「ローカル優先接続情報リストの編集」ダイアログ・ボックスで、データベースのサービス名を選択し、データベースに接続するための接続情報を入力または更新します。
 - ユーザー名： ユーザー名を入力します。パスワードが入力されている場合は、このフィールドは必須です。
 - パスワード： パスワードを入力します。データベースへの接続時にパスワードを入力するように要求されない場合は、このフィールドは空白のままでもかまいません。
 - パスワード確認： パスワードを確認します。
 - ロール： プルダウン・リストからロールを選択します。データベースを起動または停止するには、SYSDBA または SYSOPER のロールでログインする必要があります。
3. 「ローカル優先接続情報リストの編集」ダイアログ・ボックスで「OK」ボタンをクリックし、更新した内容を保存します。

注意：「データベース接続情報」ダイアログ・ボックスで「ローカル優先接続情報リストとして保存」チェックボックスを選択し、優先接続情報リストを保存または上書きできます。

OMS モードの DBA Studio の設定

DBA Studio を OMS モードで実行するには、次の条件が必要です。

- リポジトリおよび Management Server が設定されていること
- 分散サービスが置かれたノードで Intelligent Agent が起動されていること
- データベースが起動済みで検出されていること

Management Server へ接続するための DBA Studio の設定

Oracle Management Server へ接続するための DBA Studio を設定するには、次の指示に従ってください。

1. 管理対象のノードで Oracle Intelligent Agent が起動されていることを確認します。Intelligent Agent の起動の詳細は、[第 5 章「Intelligent Agent の起動および停止」](#)を参照してください。
2. Oracle Management Server が起動されていることを確認します。リポジトリおよび Management Server の設定の詳細は、[第 2 章「リリース 2.2 のリポジトリの作成」](#)を参照してください。Management Server の起動の詳細は、[第 3 章「Management Server の管理」](#)を参照してください。
3. コンソールを起動します。コンソールの起動の詳細は、[第 6 章「コンソールの設定」](#)を参照してください。

検出ウィザードを使用して、対象のデータベースが保存されているノードを検出します。ノード検出の詳細は、[第 6 章「コンソールの設定」](#)を参照してください。DBA Studio は、検出されたデータベースにアクセスできるようになります。

注意： Oracle Management Server に接続されている DBA Studio のナビゲータ・ツリーにデータベースを追加する場合は、Oracle Enterprise Manager コンソールから検出ウィザードを使用してください。ナビゲータ・ツリーには、リポジトリからデータベースが移入されます。これは DBA Studio で変更することはできません。

4. Oracle Enterprise Manager コンソールを終了します。

OMS モードでの DBA Studio の起動

1. DBA Studio を起動します。

■ Windows NT の場合

Windows の「スタート」メニュー→「プログラム」→
「Oracle-<Oracle_Home_Name>」→「Database Administration」→「DBA Studio」
を選択して、DBA Studio を起動できます。

コマンド行から次のコマンドを使用して、DBA Studio を起動することもできます。

```
oemapp dbastudio
```

■ UNIX の場合

コマンド行から次のコマンドを使用して、DBA Studio を起動できます。

```
oemapp dbastudio
```

2. ログイン・ダイアログ・ボックスが表示されます。ここで「Oracle Management Server
へログイン」を選択します。

図 8-4 「Oracle Enterprise Manager ログイン」



3. Enterprise Manager ユーザー・アカウントの次の接続情報を指定します。

管理者: sysman、またはスーパー管理者が作成した Enterprise Manager ユーザーを入力します。

パスワード: oem_temp、または新しいパスワード (oem_temp を変更した場合) を入力します。

Management Server: Oracle Management Server が稼働しているノード名を入力します。

4. 「OK」ボタンを押します。DBA Studio が表示されます。ナビゲータ・ツリーには、Oracle Enterprise Manager コンソールで検出されたデータベースが移入されます。

OMS モードの DBA Studio でデータベースへ接続

DBA Studio でデータベースに接続するには、次の 4 通りの方法があります。

- DBA Studio のナビゲータ・ツリーのコンテナの隣にあるプラス記号をクリックします。接続情報が設定されていない場合は、優先接続情報リストが使用されます。
- DBA Studio のナビゲータ・ツリーでデータベースのアイコンをダブルクリックします。接続情報が設定されていない場合は、優先接続情報リストが使用されます。
- データベースを選択し、「ファイル」メニューの「接続」を選択します。
- データベースを選択し、ツールバーの「接続」アイコンを選択します。

Oracle Enterprise Manager コンソールで優先接続情報リストが設定されていない場合は、「データベース接続情報」ダイアログ・ボックスが表示されます。優先接続情報リストが設定されている場合は、このログイン情報を使用してデータベースに接続します。

「データベース接続情報」ダイアログ・ボックスが表示されます。ここで、データベースに接続するための次の情報を指定します。

ユーザー名

接続するデータベースに対する Oracle ユーザー名を指定します。

たとえば、次のようになります。system

パスワード

接続するデータベースに対する Oracle パスワードを指定します。

たとえば、次のようになります。manager

接続モード

プルダウン・リストから、「NORMAL」、「SYSOPER」または「SYSDBA」のどの権限でデータベースに接続するかを選択できます。一般ユーザーとしてデータベースに接続する場合は、NORMAL を選択します。データベースの停止や起動など、特別な処理権限でデータベースに接続する場合は、SYSOPER を選択します。ユーザーに任意の権限を付与するなど、対象データベースに対してすべての権限を持つユーザーとしてデータベースに接続する場合は、SYSDBA を選択します。

SYSOPER 権限と SYSDBA 権限を使用するには、パスワード・ファイルまたは OS グループの認証を作成し、データベースに設定する必要があります。

優先接続情報リストとして保存

優先接続情報リストを保存するオプションも用意されており、これを使用して、ユーザー名、パスワード、ロール (NORMAL、SYSOPER または SYSDBA) などのログイン情報をリポジトリに保存できます。パスワードは、必ず暗号化されて保存されます。

データベースへの接続が確立したときに、その都度ユーザー名とパスワードを入力するのではなく、かわりにこのログイン情報が使用されます。

このチェックボックスはデフォルトで選択されています。

DBA Studio のその他の手順

この項では、次のトピックについて説明します。

- [DBA Studio の Quick Tour へのアクセス](#)
- [データベースに別のユーザーとして接続](#)
- [DBA Studio への接続で使用しているロールの参照](#)
- [スタンドアロン・モードの DBA Studio のツリーからデータベースを削除](#)
- [OMS モードのナビゲータからデータベースを削除](#)
- [OMS モードの DBA Studio のナビゲータ・ツリーにデータベースを追加](#)
- [OMS モードからスタンドアロン・モードへの変更](#)
- [スタンドアロン・モードから OMS モードへの変更](#)
- [JServer への接続](#)
- [7.3.4 データベースに対して DBA Studio への非 DBA ユーザー・アクセスを設定](#)

DBA Studio の Quick Tour へのアクセス

DBA Studio の Quick Tour にアクセスするには、まず、データベースまたは任意のノードを選択し、右側のウィンドウで「Quick Tour」ボタンをクリックします。

データベースに別のユーザーとして接続

DBA Studio では、別のユーザーとして再接続するために、データベースから切断する必要はありません。

あるデータベースに接続している場合に、別のユーザーとして再接続する場合には、次のいずれかの処理を行います。

- データベースのアイコンを右クリックし、コンテキスト依存メニューで「接続」を選択します。

- 「ファイル」メニューの「接続」を選択します。
- ツールバーの「接続」アイコンをクリックします。

「データベース接続情報」ダイアログ・ボックスが表示され、別のユーザー名を入力して「OK」をクリックします。

これで、データベースからの切断と再接続が自動的に行われます。

DBA Studio への接続で使用しているロールの参照

データベースへの接続が確立されると、DBA Studio のツリーのデータベース・アイコンの上部に、接続アイコンが表示されます。

データベース名の隣には、SYSDBA ロールで接続した場合と同じように、ユーザー名とロールが表示されます。たとえば、sys AS SYSDBA と示されます。

スタンドアロン・モードの DBA Studio のツリーからデータベースを削除

DBA Studio のナビゲータ・ツリーからデータベースを削除するには、次のステップを実行します。

1. 削除するデータベースを選択します。
2. 「ファイル」メニューの「データベースをツリーから削除」を選択します。
3. 「データベース <name> をツリーから削除します。実行しますか。」というメッセージが表示されます。「はい」をクリックします。

注意： データベースを削除すると、DBA Studio のナビゲータ・ツリーからエントリが削除されます。ただし、tnsnames.ora ファイルのエントリまたはデータベースが物理的に削除されるわけではありません。必要な場合は、ナビゲータ・ツリーにデータベースをもう一度追加できます。

注意： ナビゲータ・ツリーからデータベースを削除できるのは、スタンドアロン・モードで DBA Studio に接続している場合のみです。

OMS モードのナビゲータからデータベースを削除

Oracle Management Server に接続されている DBA Studio のナビゲータ・ツリーからデータベースを削除するには、Oracle Enterprise Manager コンソールからデータベースを削除してください。

1. Oracle Enterprise Manager コンソールを起動します。
2. 削除するデータベースが定義されているノードを選択します。
3. 「ナビゲータ」メニューの「データベースの削除」を選択します。
4. Oracle Enterprise Manager コンソールを終了します。
5. DBA Studio の「表示」メニューの「リフレッシュ」を選択します。対象のデータベースが定義されているノードが、ナビゲータ・ツリーから消去されます。

OMS モードの DBA Studio のナビゲータ・ツリーにデータベースを追加

Oracle Management Server に接続されている DBA Studio のナビゲータ・ツリーにデータベースを追加する場合は、Oracle Enterprise Manager コンソールから検出ウィザードを使用してください。

注意： Oracle Management Server または Oracle Intelligent Agent は停止しないでください。

1. Oracle Enterprise Manager コンソールを起動します。
2. 「ナビゲータ」メニューの「ノードの検出」を選択し、検出ウィザードを起動します。サービス検出の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。
3. 対象のデータベースが定義されているノードを指定し、そのノードを検出します。DBA Studio がデータベースにアクセスできるようになります。
4. Oracle Enterprise Manager コンソールを終了します。
5. DBA Studio の「表示」メニューの「リフレッシュ」を選択します。対象のデータベースが定義されているノードが、ナビゲータ・ツリーに表示されます。

OMS モードからスタンドアロン・モードへの変更

DBA Studio が Oracle Management Server に接続されると、DBA Studio のナビゲータ・ツリーに、Enterprise Manager コンソールで検出されたデータベースが移入されます。

次のステップで、これらのデータベースをコピーして、スタンドアロン・モードで使用できるようにする方法について説明します。

ナビゲータ・ツリーに表示されているデータベースは、ローカル・ファイルに保存されている `tnsnames.ora` ファイル、およびそれに関連する優先接続情報リストに追加できます。

1. 「ファイル」メニューから「`tnsnames.ora` ファイルの更新」ダイアログ・ボックスを使用して、ローカルの `tnsnames.ora` ファイルにコピーするサービスを選択します。
2. 優先接続情報リストをローカル・ファイルに保存する場合は、「`tnsnames.ora` ファイルの更新」ダイアログ・ボックスの「優先接続情報リストをローカルに保存」チェックボックスを選択します。

注意： 他のマシンからファイルを使用されないようにするために、パスワードは暗号化されてローカル・ファイルに保存されます。

これらのデータベースをスタンドアロン・モードで使用できるようにするには、次のステップを実行します。

1. データベースに直接接続されている DBA Studio を起動します。
2. 「ファイル」メニューの「データベースをツリーに追加」を選択します。
3. 「データベースをツリーに追加」ダイアログ・ボックスで、追加するネット・サービス名をローカルの `tnsnames.ora` ファイルから選択します。

スタンドアロン・モードから OMS モードへの変更

スタンドアロン・モードの DBA Studio を使用している場合は、ナビゲータ・ツリーに表示されるデータベースのリストは、ローカル・ファイルから取得されます。

将来、ジョブ、イベントおよびグループの管理において、Web ブラウザからの DBA Studio の実行、バックアップ作業、データ管理作業を行う可能性があります。これらの作業では、DBA Studio を Oracle Management Server に接続して実行します。

現在、DBA Studio を Oracle Management Server に接続して稼働している場合は、ナビゲータ・ツリーに表示されているデータベースは、スタンドアロン・モードで表示されるものとは異なる場合があります。Oracle Management Server に接続している場合は、データベースのリストは、ローカル・ファイルではなくリポジトリから取得されるためです。

スタンドアロン・モードの DBA Studio で有効になっていたデータベースを追加する際に、そのデータベースが、Oracle Management Server に接続されている DBA Studio で有効に

なっていない場合は、Oracle Enterprise Manager コンソールでサービスを検出する必要があります。サービス検出の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

注意： スタンドアロン・モードの DBA Studio から OMS モードへ切り替える場合は、DBA Studio を閉じて再起動する必要があります。

JServer への接続

JServer が 2481 以外のポート用に構成されている場合、「JServer URL 構成」ダイアログ・ボックスでそのポート番号を変更しない限り、JServer コンテナは拡張されません。

このダイアログ・ボックスにアクセスするには、コンテナをマウスの右ボタンでクリックし、「JServer に接続」メニュー項目を選択します。次に接続ボタンを選択します。「JServer URL 構成」ダイアログ・ボックスが表示されたら、適切な「GIOP ポート番号」を入力します。

7.3.4 データベースに対して DBA Studio への非 DBA ユーザー・アクセスを設定

非 DBA ユーザーとして SQL*Plus Worksheet 以外の DBA Studio および DBA Management Pack アプリケーションを使用する場合、SELECT_CATALOG_ROLE 権限が必要です。SELECT_CATALOG_ROLE は、Oracle8 以上のデータベースでのみ使用可能です。

Oracle8 より前の Oracle データベースに対して SELECT_CATALOG_ROLE を作成するには、後述のスクリプトを実行します。

注意： SELECT_CATALOG_ROLE に権限を付与するためには、このスクリプトを SYS として実行する必要があります。

オンライン・ヘルプからスクリプト・テキストを切り取って貼り付けると、簡単にスクリプトを作成できます。

```
sc_role.sql
CREATE ROLE SELECT_CATALOG_ROLE NOT IDENTIFIED;
grant select on SYS.V_$CONTROLFILE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$LOG to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$THREAD to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$PROCESS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$BGPROCESS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$SESSION to SELECT_CATALOG_ROLE;
```

```
grant select on SYS.V_$LICENSE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$TRANSACTION to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$LOCKED_OBJECT to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$LATCH to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$LATCH_CHILDREN to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$LATCH_PARENT to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$LATCHNAME to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$LATCHHOLDER to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$LATCH_MISSES to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$RESOURCE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$ _LOCK to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$LOCK to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$SESSTAT to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$MYSTAT to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$SYSSTAT to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$STATNAME to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$ACCESS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$OBJECT_DEPENDENCY to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$DBFILE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$FILESTAT to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$LOGFILE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$ROLLNAME to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$ROLLSTAT to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$SGA to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$PARAMETER to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$SYSTEM_PARAMETER to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$ROWCACHE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$ENABLEDPRIVS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$LIBRARYCACHE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$TYPE_SIZE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$ARCHIVE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$CIRCUIT to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$DATABASE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$INSTANCE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$DISPATCHER to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$LOGHIST to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$SQLAREA to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$SQLTEXT to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$SQLTEXT_WITH_NEWLINES to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$SQL to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$DB_PIPES to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$DB_OBJECT_CACHE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$OPEN_CURSOR to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$PQ_SYSSTAT to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$PQ_SLAVE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$QUEUE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$MTS to SELECT_CATALOG_ROLE;
```

```
grant select on SYS.V_$DBLINK to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$PWFILERS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$REQDIST to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$SGASTAT to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$WAITSTAT to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$SHARED_SERVER to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$TIMER to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$RECOVER_FILE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$LOG_HISTORY to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$RECOVERY_LOG to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$DATAFILE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$FIXED_TABLE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$FIXED_VIEW_DEFINITION to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$INDEXED_FIXED_COLUMN to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$SESSION_CURSOR_CACHE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$SESSION_WAIT to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$SESSION_EVENT to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$SESSION_CONNECT_INFO to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$SYSTEM_EVENT to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$EVENT_NAME to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$EXECUTION to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$SYSTEM_CURSOR_CACHE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$SESS_IO to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$COMPATIBILITY to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$COMPATSEG to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$RECOVERY_STATUS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$RECOVERY_FILE_STATUS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$SHARED_POOL_RESERVED to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$SORT_SEGMENT to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$SQL_CURSOR to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$SQL_BIND_METADATA to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$SQL_BIND_DATA to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.V_$SQL_SHARED_MEMORY to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_ROLES to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_PROFILES to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_CATALOG to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_CLUSTERS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_CLU_COLUMNS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_COL_COMMENTS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_COL_PRIVS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_DB_LINKS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_EXP_OBJECTS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_EXP_VERSION to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_EXP_FILES to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_INDEXES to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_IND_COLUMNS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_OBJECTS to SELECT_CATALOG_ROLE;
```

```
grant select on SYS.DBA_ROLLBACK_SEGS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_ROLE_PRIVS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_SYS_PRIVS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_SEQUENCES to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_SYNONYMS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_TABLES to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_TAB_COLUMNS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_TAB_COMMENTS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_TAB_PRIVS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_TS_QUOTAS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_USERS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_VIEWS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_CONSTRAINTS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_CLUSTER_HASH_EXPRESSIONS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_CONS_COLUMNS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.SYSCATALOG_ to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.PSS1$ to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.PS1$ to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_2PC_PENDING to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_2PC_NEIGHBORS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_UPDATABLE_COLUMNS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_OBJ_AUDIT_OPTS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_STMT_AUDIT_OPTS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_PRIV_AUDIT_OPTS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_AUDIT_TRAIL to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_AUDIT_SESSION to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_AUDIT_STATEMENT to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_AUDIT_OBJECT to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_AUDIT_EXISTS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_ERRORS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_SOURCE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_TRIGGERS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_TRIGGER_COLS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_DEPENDENCIES to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.CODE_PIECES to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.CODE_SIZE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.PARSED_PIECES to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.PARSED_SIZE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.SOURCE_SIZE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.ERROR_SIZE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_OBJECT_SIZE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_JOBS_RUNNING to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_JOBS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.ORA_KGLR7_OBJECTS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.SYS_OBJECTS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_SEGMENTS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_EXTENTS to SELECT_CATALOG_ROLE;
```

```
grant select on SYS.DBA_FREE_SPACE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_FREE_SPACE_COALESCED_TMP1 to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_FREE_SPACE_COALESCED_TMP2 to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_FREE_SPACE_COALESCED to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_DATA_FILES to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.FILEEXT$ to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_TABLESPACES to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.SM$TS_AVAIL to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.SM$TS_USED to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.SM$TS_FREE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.SM$AUDIT_CONFIG to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.SM$INTEGRITY_CONS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DEFSCHEDULE to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DEFERROR to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DEFERRCOUNT to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DEFTRAN to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DEFTRANDEST to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DEFDEFAULTDEST to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_SNAPSHOTS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_SNAPSHOT_LOGS to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_RCHILD to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_RGROUP to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_REFRESH to SELECT_CATALOG_ROLE;
grant select on SYS.DBA_REFRESH_CHILDREN to SELECT_CATALOG_ROLE;
```

ディレクトリ構造

この付録では、Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 をインストールしたときに作成されるディレクトリ構造について説明します。

Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 のディレクトリ構造

Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 をインストールすると、次のディレクトリが作成されます。

`$ORACLE_HOME/sysman` のディレクトリ構造

`$ORACLE_HOME/sysman` のディレクトリ構造は、次のとおりです。

- `$ORACLE_HOME/sysman/admin`
- `$ORACLE_HOME/sysman/config`
- `$ORACLE_HOME/sysman/dbapp`
- `$ORACLE_HOME/sysman/doc/readme`
- `$ORACLE_HOME/sysman/log`
- `$ORACLE_HOME/sysman/mesg`
- `$ORACLE_HOME/sysman/temp`
- `$ORACLE_HOME/sysman/ifiles`
- `$ORACLE_HOME/sysman/report`

`$ORACLE_HOME/sysman/admin`

`$ORACLE_HOME/sysman/admin` ディレクトリには、Enterprise Manager Configuration Assistant で使用される SQL スクリプトおよびレジストリ・ファイルが含まれています。内容は変更しないでください。

\$ORACLE_HOME/sysman/config

\$ORACLE_HOME/sysman/config ディレクトリには、いくつかの構成ファイルが含まれています。ユーザーが変更できるのは、次のファイルです。

- clientconfig.properties
- dbappscfg.properties
- omsconfig.properties
- paging.cfg.template

このディレクトリの他のファイルは変更できません。

Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 のコンポーネントのトレース情報は、omsconfig.properties および clientconfig.properties ファイルに格納されます。

dbappscfg.properties ファイルには、SQL*Plus worksheet の設定が格納されます。

dbappscfg.properties ファイルは、SQL*Plus に追加の環境変数を指定する際に使用されます。

デフォルトでは、次のように設定されます。

```
SQLPLUS_ENDOFBUFTOKEN=OEM_sqlplus_input_finished
```

paging.cfg.template ファイルにより、Oracle Enterprise Manager Paging Server 2.2 のトレースが使用可能になります。

\$ORACLE_HOME/sysman/ifiles

Instance Management ツールの使用中に init.ora パラメータをファイルに保存すると、そのファイルは、デフォルトで \$ORACLE_HOME/sysman/ifiles ディレクトリに保存されます。

\$ORACLE_HOME/sysman/log

\$ORACLE_HOME/sysman/log ディレクトリには、ディスクにリダイレクトされたトレースの出力が入っています。このディレクトリには、oms.log および oms.nohup ファイルが含まれています。oms.nohup ファイルには、Management Server の起動前に表示される Management Server のエラー・メッセージが含まれています。oms.log ファイルには、Management Server の起動時および実行時に生成されるメッセージが含まれています。

\$ORACLE_HOME/sysman/mesg

\$ORACLE_HOME/sysman/mesg ディレクトリには、メッセージ・ファイルが入っています。

\$ORACLE_HOME/sysman/doc/readme

\$ORACLE_HOME/sysman/doc/readme ディレクトリには、英語 readme ファイルが入っています。

\$ORACLE_HOME/sysman/report

\$ORACLE_HOME/sysman/report ディレクトリには、その場で生成されたレポートが入っています。

\$ORACLE_HOME/sysman/temp

\$ORACLE_HOME/sysman/temp ディレクトリには、管理操作の処理中に作成される可能性のあるテンポラリ・ファイルが入っています。

その他の重要なディレクトリ

前述のディレクトリの他に、重要なディレクトリとして次のものがあります。

\$ORACLE_HOME/RelNotes/EM

Enterprise Manager の英語 Readme は、すべてこのディレクトリにインストールされます。

\$ORACLE_HOME/Doc/EM

Enterprise Manager に付随する HTML および PDF 形式の英語ドキュメントは、このディレクトリにインストールされます。UNIX および Windows プラットフォームの場合、ドキュメントは個別の CD に保存されているため、Enterprise Manager をインストールしてもドキュメントはインストールされません。

Configuration Assistant の操作

Enterprise Manager Configuration Assistant を使用して、リポジトリを作成、削除および更新し、ローカルな Management Server の構成パラメータをメンテナンスします。

リポジトリ作成については、2-1 ページの「[リリース 2.2 のリポジトリの作成](#)」で説明しています。

この付録では、次のことを説明します。

- リリース 2.0 または 2.1 のリポジトリをリリース 2.2 のリポジトリへアップグレードする方法
- リポジトリの削除方法
- 異なるリポジトリを使用するため、またはリポジトリ・ユーザーのパスワード変更に対応するために、ローカル Management Server をリダイレクトする方法

omsconfig.properties ファイルにアクセスできない場合の、リポジトリ作成およびパラメータ構成についての情報も提供しています。

Enterprise Manager のリリース 1.x を使用している場合に、リリース 1.x のリポジトリをリリース 2.2 のリポジトリへ直接移行するには、リリース 2.2 のリポジトリを作成した後で、Enterprise Manager Migration Assistant を使用して追加のステップを実行する必要があります。リリース 1.x の 1 つ以上のリポジトリをリリース 2.2 の共有リポジトリ・スキーマへ移行する場合の詳細は、[第 7 章「リリース 1.x のリポジトリからリリース 2.2 のリポジトリへの移行」](#)を参照してください。

リリース 2.0 または 2.1 のリポジトリからリリース 2.2 の リポジトリへのアップグレード

リリース 2.0 または 2.1 のリポジトリからリリース 2.2 のリポジトリへアップグレードする場合は、リポジトリをアップグレードする前に、Intelligent Agent 以外のすべての Oracle Enterprise Manager 製品をリリース 2.2 にアップグレードする必要があります。

注意： 旧 2.x リリースの Oracle Enterprise Manager フレームワークおよび Management Packs をリリース 2.2 にアップグレードする際のガイドラインは、1-17 ページの「[Oracle Enterprise Manager フレームワークおよび Management Pack のアップグレード](#)」を参照してください。

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant は、既存のリポジトリを取得して、それを直接アップグレードします。アップグレードが終了すると、リポジトリが新しいリリースになります。

注意： アップグレード時にもリポジトリは同じスキーマ内に残す必要があります。たとえば、リポジトリをエクスポートしてから別のスキーマにインポートしてアップグレードすることはできません。この場合、接続情報は使用できなくなります。

Enterprise Manager リポジトリは共有されるため、リポジトリのアップグレードを、リポジトリを共有するすべてのマシン上の新しい Oracle Enterprise Manager ソフトウェアのインストールと調整することが重要です。リポジトリをアップグレードしない場合、新しいリリースのソフトウェアは、旧リリースのリポジトリと一緒に動作しなくなります。

しかし、リポジトリをアップグレードすると、旧バージョンのソフトウェアは、新しいリリースのリポジトリと一緒に動作しなくなります。

Management Server を含む Oracle Enterprise Manager の基本システムと Oracle Enterprise Manager パックはどちらも 1 つのリポジトリを共有するため、引き続きすべてのユーザーが作業を実行する場合は、リポジトリのアップグレードが、関連するすべてのマシンにおけるソフトウェア・アップグレードと調整されていることを必ず確認してください。

リポジトリをアップグレードするには、DBA 権限を持つユーザーとしてデータベースに接続してください。

注意： リポジトリをアップグレードする前に、データベースまたはリポジトリ・スキーマをバックアップしてください。リポジトリのアップグレード中に失敗すると、そのリポジトリは使用できなくなります。失敗したリポジトリは、アップグレード可能なリポジトリとしてリストに表示されなくなります。

リポジトリをアップグレードするには、次の項のステップに従ってください。

Enterprise Manager Configuration Assistant の起動の詳細は、2-5 ページの「[Enterprise Manager Configuration Assistant の起動](#)」を参照してください。

注意： リポジトリのアップグレードを実行する前に、対象のリポジトリを使用しているすべての Management Server および Oracle Enterprise Manager アプリケーションを停止してください。Management Server が対象のリポジトリを使用している場合は、リポジトリをアップグレードすると、サーバー・エラーが発生します。

ステップ 1 「構成操作」

Enterprise Manager Configuration Assistant を起動すると、「構成操作」ページが表示されます。

構成操作のリストから「既存のリポジトリを更新」を選択し、「次へ」を押して処理を続行します。「リポジトリのデータベースを選択」ページが表示されます。

ステップ 2 「リポジトリのデータベースを選択」

アップグレードするリポジトリが含まれているデータベースにログインします。データベースには DBA 権限を持つユーザーとして接続してください。

注意： Enterprise Manager Configuration Assistant によって作成されたリポジトリ・スキーマには、このステップに必要な DBA 権限がありません。セキュリティの問題が発生しないようにするため、リポジトリ・スキーマ・ユーザーに必要以上の権限を付与しないでください。データベースには、DBA 権限を持つ別のユーザーとして接続してください。たとえば、system/manager を使用します。

リポジトリが含まれているデータベースへのログインの詳細は、2-7 ページの「[ステップ 2 「リポジトリのデータベースを選択」](#)」を参照してください。

ログインに成功すると、「リポジトリを選択」ページが表示されます。

ステップ 3 「リポジトリを選択」

Enterprise Manager Configuration Assistant で、指定したデータベースに以前のリリース 2.x のリポジトリが検出されると、そのリポジトリが表示されます。該当するリポジトリを選択し、「次へ」ボタンを押して操作を続行します。

注意： このような場合、Enterprise Manager Configuration Assistant ではリリース 2.2 のリポジトリは表示されません。これらのリポジトリは最新リリースなので、アップグレードする必要がないためです。

指定されたデータベースにリリース 2.2 のリポジトリが含まれていない場合は、リポジトリのリストは空でグレー表示され、「データベースでリポジトリが見つかりませんでした。」というメッセージが表示されます。「取消」ボタンをクリックして Enterprise Manager Configuration Assistant を終了するか、「戻る」ボタンをクリックして前のページに戻り、情報を変更します。

ステップ 4 「リポジトリへのログイン情報」

「リポジトリへのログイン情報」ページに、リポジトリ・ユーザー・パスワードを指定します。

リポジトリの作成時に、Enterprise Manager Configuration Assistant は、指定されたユーザー名とパスワードを使用して、リポジトリの所有者であるデータベース・ユーザー（リポジトリ・スキーマ・ユーザー）を作成しました。

リポジトリをアップグレードするには、リポジトリ・データベースに対して、このユーザーでログインする必要があります。

前のページで選択した結果として、「ユーザー名」フィールドには、リポジトリ・ユーザー名が挿入されます。ただし、パスワードは入力する必要があります。

「次へ」を押して、操作を続行します。「リポジトリ・サマリーの更新」ページが表示されます。

ステップ 5 「リポジトリ・サマリーの更新」

「リポジトリ・サマリーの更新」ページには、リポジトリのアップグレード中に、ウィザードで指定したすべての情報の概要が表示されます。「完了」をクリックしてリポジトリのアップグレードを開始するか、「戻る」をクリックして前のページに戻り、設定を変更します。

ステップ 6 「Configuration Assistant の進行」

「完了」ボタンをクリックすると、「Configuration Assistant の進行」ウィンドウが表示され、実行された処理と、実行中の操作の処理ステップが表示されます。各処理ステップは、1 行のテキストで表示されます。

詳細な情報が必要な場合は、「詳細表示」ボタンをクリックしてダイアログ・ボックスを拡張し、テキスト領域を表示します。テキスト領域は、「詳細を非表示」ボタンを押せば隠せます。

結果のいかんにかかわらず、処理が完了すれば、「取消」ボタンは「閉じる」ボタンに変わります。

エラーなくすべてのステップが完了した場合、「処理完了」メッセージが表示されます。

「取消」ボタンをクリックすれば、要求された操作を完了前に取り消せます。ただし、操作を取り消すと、リポジトリは使用不可能になります。

注意： リポジトリをアップグレードする前に、データベースまたはリポジトリ・スキーマをバックアップしてください。リポジトリのアップグレード中に失敗すると、そのリポジトリは使用できなくなります。失敗したリポジトリは、アップグレード可能なリポジトリとしてリストに表示されなくなります。

終了したら「閉じる」ボタンをクリックします。

Configuration Assistant のアップグレード操作中、Oracle Management Service が存在していなければ作成されます。

既存リポジトリの削除

リポジトリを削除するには、DBA 権限を持つユーザーとして、データベースに接続してください。

リポジトリを削除するには、この後の各項で説明する手順に従ってください。

Enterprise Manager Configuration Assistant の起動の詳細は、2-5 ページの「[Enterprise Manager Configuration Assistant の起動](#)」を参照してください。

注意： リポジトリを削除する前に、対象のリポジトリを使用しているすべての Management Server および Oracle Enterprise Manager アプリケーションを停止してください。このリポジトリを使用中の Management Server がある場合、リポジトリを削除するとサーバー・エラーが生じます。

ステップ1「構成操作」

Enterprise Manager Configuration Assistant を起動すると、「構成操作」ページが表示されます。

構成操作リストから「既存のリポジトリの削除」を選択し、「次へ」を押して操作を続けます。「リポジトリのデータベースを選択」ページが表示されます。

Configuration Assistant で omsconfig.properties ファイルに書き込めない場合、「構成ファイルにアクセス不能」ページが表示されます。

ステップ2「リポジトリのデータベースを選択」

削除するリポジトリが含まれているデータベースにログインします。データベースには DBA 権限を持つユーザーとして接続してください。

注意： Enterprise Manager Configuration Assistant によって作成されたりポジトリ・スキーマには、このステップに必要な DBA 権限がありません。セキュリティの問題が発生しないようにするため、リポジトリ・スキーマ・ユーザーに必要以上の権限を付与しないでください。データベースには、DBA 権限を持つ別のユーザーとして接続してください。たとえば、system/manager を使用します。

リポジトリが含まれているデータベースへのログインの詳細は、2-7 ページの「[ステップ2「リポジトリのデータベースを選択」](#)」を参照してください。ログインに成功すると、「リポジトリを選択」ページが表示されます。

ステップ3「リポジトリを選択」

Enterprise Manager Configuration Assistant で、指定されたデータベースにリリース 2.2 のリポジトリが検出されると、それらのリポジトリが表示されます。該当するリポジトリを選択し、「次へ」ボタンを押して操作を継続します。

指定されたデータベースにリリース 2.2 のリポジトリが含まれていない場合は、リポジトリのリストは空でグレー表示され、「データベースでリポジトリが見つかりませんでした。」というメッセージが表示されます。「取消」ボタンをクリックして Enterprise Manager Configuration Assistant を終了するか、「戻る」ボタンをクリックして前のページに戻り、情報を変更します。

ステップ4「リポジトリの削除オプションを選択」

「リポジトリの削除オプションを選択」ページから、リポジトリ・ユーザーとそのスキーマ・オブジェクトをすべて削除することも、リポジトリ・オブジェクトのみを削除することもできます。

リポジトリのみを削除する場合は、リポジトリ・ユーザーのパスワードを指定する必要があります。これは、Enterprise Manager Configuration Assistant でリポジトリに接続し、Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 の SQL の削除スクリプトを呼び出せるようにするためです。リポジトリ・オブジェクトのみが削除されます。リポジトリのその他のスキーマ・オブジェクトは残ります。

リポジトリ・ユーザーとそのすべてのスキーマ・オブジェクトを削除する場合、パスワードは不要です。

注意： このステップを継続する前に、そのスキーマに他に重要なオブジェクトがないか確認してください。これを確認しないと、貴重なデータが失われる可能性があります。

Configuration Assistant では、管理対象のリポジトリが `omsconfig.properties` ファイルで指定されていることが認識されても、そのリポジトリを削除しない場合は、Management Server の構成は変更されません。

管理対象のリポジトリを削除すると、Configuration Assistant では、Management Server の構成が消去されます。

「次へ」を押して、操作を継続します。「リポジトリ削除のサマリー」ページが表示されます。

ステップ5「リポジトリ削除のサマリー」

「リポジトリ削除のサマリー」ページには、リポジトリ削除ウィザード操作時に指定した全情報のサマリーが表示されます。「完了」をクリックしてリポジトリ削除を開始するか、または「戻る」をクリックして前のページに戻り、情報を変更します。

ステップ6「Configuration Assistant の進行」

「完了」ボタンをクリックすると、「Configuration Assistant の進行」ウィンドウが表示され、実行された処理と、実行中の操作の処理ステップが表示されます。各処理ステップは、1行のテキストで表示されます。

詳細な情報が必要な場合は、「詳細表示」ボタンをクリックしてダイアログ・ボックスを拡張し、テキスト領域を表示します。テキスト領域は、「詳細を非表示」ボタンを押せば隠せます。

結果のいかんにかかわらず、処理が完了すれば、「取消」ボタンは「閉じる」ボタンに変わります。

エラーなくすべてのステップが完了した場合、「処理完了」メッセージが表示されます。

「取消」ボタンをクリックすれば、要求された操作を完了前に取り消せます。

終了したら「閉じる」ボタンをクリックします。

構成パラメータの編集

次の作業を実行する場合、「構成パラメータの編集」を選択します。

- 既存リポジトリを管理するように Management Server を設定します。
- 同一または別のデータベース内の別のリポジトリを使用するように Management Server 構成を変更します。
- Management Server の起動時にリポジトリへのログインで使用するパスワードを変更します。他のユーザーがリポジトリ・ユーザー・パスワードを変更した場合は、パスワードを変更する必要があります。そうしないと、Management Server は起動に失敗します。構成パラメータの編集時に Enterprise Manager Configuration Assistant により変更されるのは、omsconfig.properties ファイルのみです。データベース内のリポジトリ接続情報は変更されません。

Configuration Assistant では、それが稼働しているマシンの構成パラメータ (omsconfig.properties ファイル) のみ設定または変更できます。Configuration Assistant では、別のマシンの構成パラメータは変更できません。リポジトリを使用 (共有) している他の Management Server それぞれで、「構成パラメータの編集」オプションを使用して Configuration Assistant を実行し、各マシンの構成パラメータを変更してください。

リポジトリ接続情報（ユーザー名、パスワード、サービス）を設定または変更して、正しいリポジトリを指定してください。同じリポジトリを使用（共有）するすべての Management Server マシンでは、構成パラメータが一致している必要があります。

注意： リポジトリの所有者であるデータベース・ユーザー・アカウントのパスワードを変更する場合は、対象リポジトリを使用しているすべての Management Server で、対応する Management Server の構成パラメータも変更する必要があります。変更しない場合は、Management Server を起動できなくなります。

Management Server 構成パラメータを編集するには、この後の各項で説明する手順に従ってください。

注意： Management Server 構成パラメータは、データベースがアクセス不可能な場合でも変更できます。

Enterprise Manager Configuration Assistant の起動の詳細は、2-5 ページの「[Enterprise Manager Configuration Assistant の起動](#)」を参照してください。

ステップ 1 「構成操作」

Enterprise Manager Configuration Assistant を起動すると、「構成操作」ページが表示されます。

構成操作のリストから「構成パラメータの編集」を選択し、「次へ」を押して操作を続けます。「構成パラメータ」ページが表示されます。

ステップ 2 「構成パラメータ」

希望のパラメータを設定または変更します。この情報は、同じマシンで Management Server を次に初期化する際に使用されます。無効な情報があると、Management Server は起動しません。

ユーザー名

リポジトリのユーザー名を入力して、Management Server の構成を別のリポジトリを使用するように変更します。このユーザー名はデータベースのユーザー名で、Oracle Enterprise Manager の管理者名ではありません。

パスワード

リポジトリ・ユーザーのパスワードを入力して、Management Server で起動時にリポジトリへのログインに使用されるパスワードを変更します。

パスワードを変更する場合、「確認」フィールドもそれに合わせて変更してください。

サービス

リポジトリが存在するサービスまたはデータベースを入力し、別のデータベースのリポジトリを使用するように Management Server を変更します。

注意： 次のページに進むには、このページのパラメータを少なくとも 1 つ変更する必要があります。何も変更せずに「次へ」ボタンを押すと、「構成パラメータは変更されていません。変更するか、取り消してください。」というエラー・メッセージが表示されます。この場合、Enterprise Manager Configuration Assistant では、次のページに移動できません。

ステップ 3 「構成パラメータを変更」

「構成パラメータを変更」ページには、Management Server パラメータ変更ウィザード操作時に指定した全情報のサマリーが表示されます。「完了」をクリックして変更を開始するか、または「戻る」をクリックして前のページに戻り、設定を変更します。

注意： 「構成パラメータの編集」を使用してパラメータを変更すると、Configuration Assistant により、構成ファイル `ORACLE_HOME/sysman/config/omsconfig.properties` に格納されている Management Server 構成パラメータが変更されます。これらのパラメータによって、Management Server が適切なデータベース内のリポジトリ・ユーザーに接続できるように、必要な入力データが Management Server に提供されます。リポジトリが作成されると、Configuration Assistant では、リポジトリ自体のリポジトリ・ユーザー名およびパスワードは変更されません。Configuration Assistant では、リポジトリ・ユーザーの作成時に、リポジトリ作成時点でのリポジトリ・ユーザーのパスワードが操作されるのみです。

構成ファイルにアクセス不能

リポジトリの作成または削除を選択し、omsconfig.properties ファイルにアクセス不能の場合、「構成ファイルにアクセス不能」ページが表示されます。

omsconfig.properties ファイルに書き込み許可が設定されていないため、アクセスできないことがあります。

omsconfig.properties ファイルを変更せずにリポジトリの操作を継続することも、操作を中止することもできます。

「操作を実行します」を選択した場合、「次へ」ボタンが使用可能になり、通常の順序でリポジトリの作成または削除の操作を継続できます。ただし、この場合には、omsconfig.properties ファイルは変更されません。

リポジトリの作成を実行中の場合、Configuration Assistant によりリポジトリは作成されますが、omsconfig.properties ファイルは作成されません。Configuration Assistant で構成プロパティがファイルに書き込まれるために、ユーザーにはファイルに対する書き込みアクセスが必要です。Management Server を起動するためには、適切なパラメータがファイル内に存在している必要があります。

サマリー・ページには、構成ファイルを更新できないことが示され、「Configuration Assistant の進行」ウィンドウには、処理中のステップとして「構成パラメータを設定。」が表示されません。

後で omsconfig.properties ファイルに対する書き込み権限を取得した際に、「構成パラメータの編集」オプションを使用して、Management Server が使用するリポジトリのデータベース・ユーザー名、パスワードおよびサービス情報を入力できます。構成ファイルが更新されると、Management Server を起動できるようになります。

「リポジトリ操作を実行しない」を選択した場合、「構成ファイルにアクセス不能」ページが最後のページになります。「次へ」ボタンは使用不可になります。変更は実行されません。この場合には、前のページに戻るか、処理を取り消します。

Intelligent Agent および Data Gatherer の アップグレード

Intelligent Agent のアップグレード

Intelligent Agent は、新しくリリースされるたびにパフォーマンス、機能および信頼性が向上しています。このため、ご使用のプラットフォームで使用可能な最新バージョンに Intelligent Agent をアップグレードすることをお勧めします。Enterprise Manager のジョブまたはイベントが新しい Agent の移行による影響を受けることがないようにするには、Enterprise Manager 環境の不可欠な一部として、特定のステップを実行する必要があります。

Enterprise Manager リリース 2 での Agent アップグレードのガイドライン

1. 新しい Oracle ホームに最新の Intelligent Agent をインストールします。
2. 引き続き保持するジョブまたはイベントが、それぞれジョブ・ライブラリまたはイベント・ライブラリに格納されていることを確認します。ジョブ / イベントをジョブ / イベント・ライブラリに追加するには、「ジョブ」 / 「イベント」画面からジョブ / イベントを選択し、マウスの右ボタンを使用して該当のエントリをクリックし、ポップアップ・メニューから「ライブラリへのコピー」を選択します。
3. イベント警告をイベント履歴に移動します。「履歴」画面の内容は、保存することも消去することもできます。

注意： イベントが複数のターゲットに対して登録されている場合、「類似作成」メニュー・オプションを使用してターゲットごとに個別のイベントを作成し、これらのイベントを「イベント・ライブラリ」に保存します。

4. Enterprise Manager コンソールで、既存イベントの登録を解除し、アップグレードする Agent が置かれたノードに対してスケジュールされているアクティブ・ジョブを削除します。
5. 古い Agent を停止します。
6. 新しい Agent を起動します。
7. OEM コンソールの「ナビゲータ」で、ノードをリフレッシュします。
8. 保存したジョブおよびイベントを新しい Agent に対して再発行します。

Enterprise Manager ジョブ / イベントの 8.1.5 または 8.1.6 の Agent から 8.1.7 の Agent への移行

既存のジョブ / イベントがリリース 8.1.5/8.1.6 の Intelligent Agent に対して発行されている場合に、ジョブの再発行やイベントの再登録を行わずにリリース 8.1.7 の Agent にアップグレードするには、次の手順で既存のジョブ / イベント全部を移行する必要があります。

1. リリース 8.1.7 の Agent を別の ORACLE_HOME にインストールします。
2. コマンド行で `lsnrctl dbsnmp_stop` と入力して、リリース 8.1.x の古い Agent を停止します。
3. 古い Agent の ORACLE_HOME/network/agent ディレクトリ内のすべてのファイル (*.q ファイル、*.inp ファイル、tcl*. ファイル) をリリース 8.1.7 の Agent の ORACLE_HOME/network/agent ディレクトリにコピーします。ディレクトリはコピーしないでください。これらのファイルの所有者が、リリース 8.1.7 の Agent をインストールしたユーザーになります。新しい Agent のディレクトリ内にあるこれらのファイルの所有権を確認してください。
4. `lsnrctl dbsnmp_start` と入力して、リリース 8.1.7 の Agent を起動します。
5. 新しい Agent により検出されたサービス（データベース、リスナーなど）が、古い Agent により検出されたサービスと同じであることを確認します。

古い Agent と新しい Agent の ORACLE_HOME/network/agent/services.ora ファイル内のサービス名および定義をただちに比較して確認することをお勧めします。

6. Enterprise Manager コンソールで、Agent のノードをリフレッシュします。

移行後には、以前のジョブまたはイベントすべてが前と同じように実行されます。

旧バージョンの Data Gatherer のアップグレード

新しいバージョンの Oracle Data Gatherer は、旧バージョンとは別の Oracle ホームにインストールできます。そうする場合は、次のステップに従ってください。

1. 旧バージョンの Oracle Data Gatherer を停止します。Oracle Data Gatherer を停止する方法の詳細は、『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』の「NT および UNIX でのデータ収集サービスの運用制御」を参照してください。
2. 新しいバージョンの Oracle Data Gatherer をインストールします。ただし、まだ起動しないでください。
3. 旧バージョンの Oracle Data Gatherer と関連付けられた容量計画構成ファイル（状態ファイル）およびデータ・ファイルを、新しいバージョンの Oracle Data Gatherer をインストールした Oracle ホームに移動します。

Oracle Data Gatherer の状態ファイルおよびデータ・ファイルは、`$ORACLE_HOME/odg/reco` ディレクトリ内にあります。Oracle Capacity Planner を使用して新バージョンの Oracle Data Gatherer に接続し、新しい収集を設定する前に、これらのファイルを新しい `$ORACLE_HOME/odg/reco` ディレクトリにコピーしておく必要があります。

これらのファイルを移動しない場合、次のような問題が発生します。

- a. バイナリ・データがロードされません。

Oracle Data Gatherer によって作成されたが Capacity Planner データベースにロードされていないバイナリ・データ・ファイルは、ロードされません。

- b. データ収集定義が保持されません。

Capacity Planner データ収集を再定義する必要があります。

新しいバージョンの Oracle Data Gatherer を旧バージョンと同じ Oracle ホームにインストールした場合、または Oracle Capacity Planner を使用していない場合は、状態ファイルおよびデータ・ファイルを移動しないでください。

4. 新しいバージョンの Oracle Data Gatherer を起動します。Oracle Data Gatherer の起動する方法の詳細は、『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』の「NT および UNIX でのデータ収集サービスの運用制御」を参照してください。

トラブルシューティング

Oracle Enterprise Manager をインストールまたは使用する前に、『Oracle Enterprise Manager 日本語リリース・ノート』の互換表を確認してください。

この章では、考えられるトラブルシューティングの問題を説明します。

- [オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問題の報告](#)
- [ロギングとトレースの設定](#)
- [Management Server のトラブルシューティング](#)
- [ポケットベル・サービスのトラブルシューティング](#)
- [Web ブラウザのトラブルシューティング](#)
- [パスワードの再設定](#)
- [Enterprise Manager Configuration Assistant のトラブルシューティング](#)
- [omsconfig.properties ファイルに関する許可の変更](#)
- [SGA サイズの決定](#)
- [ジョブ通知のトラブルシューティング](#)

オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問題の報告

Oracle Enterprise Manager をご使用の際に問題が発生した場合は、多くの有効な情報を取得できます。

オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問合せになる前に、まず、マニュアルや『Oracle Enterprise Manager 日本語リリース・ノート』を調べてみてください。Oracle Enterprise Manager のマニュアルのリストは、「はじめに」の xii ページの「[ドキュメント・セット](#)」に出ています。

マニュアル

特に利用価値の高いマニュアルは、次のとおりです。

- 『Oracle Enterprise Manager 日本語リリース・ノート リリース 2.2』には、Oracle Enterprise Manager の最新情報に関する重要な説明とその他の最新ニュースに加えて、製品の実際の動作とドキュメントの説明との違いが記載されています。
- 『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』では、Oracle Intelligent Agent の管理方法が説明され、トラブルシューティング情報が提供されています。
- 『Oracle Enterprise Manager メッセージ・マニュアル リリース 2.2』には、Oracle Enterprise Manager のエラーについて、考えられる原因と推奨される処置が記載されています。

MetaLink

マニュアルとオンライン・ヘルプの他に、オラクル社では Oracle MetaLink を提供しています。これは、Oracle Metal (Gold, Silver, Bronze) カスタマが、24 時間年中無休で利用できる電子的なサポート・サービスです。カスタマは、<http://www.oracle.com/support> からオンラインで登録できます。

MetaLink 2.0 には、次の機能が用意されています。

- My Headlines

プッシュ・テクノロジーを使用して、情報を事前にお届けします。My Headlines には、MetaLink の「My Headlines」セクションにアクセスしたときに、必要な情報のみを取得できるようにするなど、ユーザー・プロファイルの情報をカスタマイズする機能が用意されています。また、この情報を電子メールで受信できるように設定することも可能です。配布される情報は、News & Notes、Knowledge Base、Patches、Bugs、TAR Updates、Product Lifecycle および Forum Updates に分類され、製品とプラットフォームに応じて独自に設定することもできます。

- User Administration

企業に対して、MetaLink ユーザーのアクセスを、サポート ID (CSI) レベルで管理できるようにします。MetaLink のいくつかの領域に対して、サイトの特定のユーザーのみアクセスできるようにする場合は、この機能によって制御できます。たとえば、社内のヘルプ・デスクの担当者のみが、MetaLink に TAR (Technical Assistance Request) を作成できるように許可できます。

- User Profile

連絡先情報の更新、サポート ID の追加と削除、同じサポート ID に登録されている他のユーザーの参照、MetaLink のカスタマイズ、パスワードの変更、各自のライセンス情報の参照を行います。MetaLink インタフェースを表示する言語（英語、ドイツ語、フランス語）を選択することもできるようになりました。

- Technical Libraries

このライブラリは製品とプラットフォームごとに分類されています。これを使用して、ユーザーは、サポート・アナリストが「インストール作業や Oracle 製品の使用において有効である」と見なした情報にアクセスします。情報には、ドキュメント、ホワイト・ペーパー、問題と解決方法などがあります。

- Forums

技術アナリストに対して質問を送信すると、営業日の 2 日以内に回答を受信できます。すべての Oracle ユーザーは、ここでやりとりする情報やアイデアを共有できます。

- File Access

以前の Download に相当するもので、このセクションでは、パッチおよびパッチ・セットを MetaLink から直接ダウンロードできます。パッチ・セットで修正されたバグを特定するには、『Oracle Enterprise Manager 日本語リリース・ノート』を参照してください。

- Knowledge Base Search

オラクル社カスタマ・サポート・センターの内部リポジトリで、テキストの全文検索を行います。高度な検索もできます。

- Bug Search

問合せを行って、Oracle Bug Database で公開されているヘッダーと概要にアクセスできます。

オラクル社カスタマ・サポート・センター

マニュアルと MetaLink では問題が解決しない場合には、オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡し、次の情報をお知らせください。

1. どのような問題か。
2. 問題が発生したときに何をしていたか。
 - 問題が発生した製品またはコンポーネント。
 - 実行していた操作。問題が再現可能か。問題を調べるために取った処置。
3. ご使用の環境。
 - ご使用のオペレーティング・システムとバージョン。
 - ご使用の Oracle Enterprise Manager のリリースとインストール場所。
 - ご使用の Intelligent Agent のリリースとインストール場所。
 - ご使用のデータベースのリリースとインストール場所。
 - Management Server のインストール場所。

- ご使用のデータ収集サービスのリリースとインストール場所。
 - スキーマ、データ、スクリプトまたはご使用の環境についての関連情報。可能な場合は、問題を再現できるようにログ・ファイルもお送りください。
4. 表示されたエラー・メッセージと番号。
 5. (可能な場合は) トレースを実行し、トレース情報を提供してください。
 6. (ログ・ファイルがある場合は) 調査して、ログ情報を提供してください。

ロギングとトレースの設定

Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 のシステムでは、トレースとロギングをサポートしています。情報提供のために、データを画面に記録することをトレースといいます。ロギングは、トレース情報のファイルへのリダイレクションです。

この項では、次の事項について説明します。

- [Management Server のトレースとロギング](#)
- [クライアントのトレース](#)
- [Web ブラウザのトレース](#)
- [ポケットベルのトレース](#)

Intelligent Agent のロギングおよびトレースの詳細は、『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Management Server のトレースとロギング

Management Server のロギングとトレースは、`$ORACLE_HOME/sysman/config` ディレクトリにある `omsconfig.properties` ファイルで指定します。

ロギング・プロパティとトレース・プロパティ

ロギング・プロパティとトレース・プロパティは、次のとおりです。

TRACING.ENABLED = <true>|<false>

トレース機能を有効または無効にします。デフォルトは FALSE です。

LOGGING.ENABLED = <true>|<false>

ロギング機能を有効または無効にします。デフォルトは FALSE です。

LOGGING.DIR = <directory_spec>

デフォルトは、`$ORACLE_HOME/sysman/log` となります。

注意： LOGGING.DIR を c:¥temp ディレクトリに設定するには、「¥¥」を使用して、LOGGING.DIR=c:¥¥temp と設定する必要があります。

このように指定しない場合は、c:¥temp の「¥t」がタブ文字と解釈され、Management Server を起動できなくなります。

TRACING.LEVEL = <oem_trace_levels>

トレース可能な場合に、収集のためのトレース情報の詳細を指定するための値を設定します。

<oem_trace_levels> の有効値は次のとおりです。

- 5 - user: 重要またはエラーのレベルのメッセージのみ表示します。
- 3 - admin: ユーザー・トレース・レベル・メッセージと警告メッセージを表示します。
- 2 - dev: admin トレース・レベルのすべてのメッセージ他に、情報メッセージとデバッグ・メッセージを表示します。

LOGGING.FILENAME = <filename>

filename は、デフォルトでは oms.log.0、oms.log.1、oms.log.2 のようになります。

LOGGING.MAX_SIZE = <integer>

ログ・ファイルの合計最大サイズを制御します。LOGGING.MAX_SIZE プロパティに指定する値の単位は、MB です。デフォルト値は 50 で、最大 25MB のログ・ファイルが 2 つになります。パラメータを 0 に設定すると、1 つのログ・ファイルがサイズ制限なしで使用されます。

LOGGING.MAX_FILE_CNT = <integer>

特定の時間に、ログが対象とするファイルの最大数を定義します。すべてのファイル・サイズの合計は、LOGGING.MAXSIZE プロパティで設定した値以下になるようにします。

デフォルトは 2 となります。

LOGGING.MAX_SIZE=0（ログ・サイズの制限がない）場合は、LOGGING.MAX_FILE_CNT は意味がなくなるため、無効になります。

注意： LOGGING.MAX_SIZE および LOGGING.MAX_FILE_CNT により、Management Server ログ・ファイルに使用されるディスク領域の大きさが決まります。これらのパラメータを使用して、ログ・ファイルのサイズおよびディスク使用を指定できます。

LOGGING.SAVE_PREVIOUS_LOG = <true>|<false>

TRUE は、Management Server で、前回のコールのときから、既存のログ・ファイル名を変更することを表します。このようなログ・ファイルは、名前が変更される際に、(yyyyMMddHHmmss の形式の) タイムスタンプが付加されます。

デフォルトは FALSE です。

注意： ロギングおよびトレースを使用可能にすると、Backup Management と Data Management のログインおよびトレースが自動的に使用可能になります。

Management Server ログ

Management Server では、トレース・メッセージはすべて Management Server のログ・ファイル (oms.log.0、oms.log.1、oms.log.2 など) に格納されます。まず 1 つのログ・ファイルに、それがいっぱいになると次のファイルに書き込み、最後の 2 ファイルがリサイクルされます。

Management Server のログ・ファイルにはサイズ制限があります。デフォルトでは、Management Server の起動時に、25MB のログ・ファイルしか作成できません。最初のログ・ファイル名は oms.log.0 です。そのファイルが 25MB の上限に達すると、別のログ・ファイルが作成されます。別のログ・ファイル名は oms.log.1 です。そのファイルが 25MB 制限に達すると、oms.log.0 ファイルが削除され、新しいログ・ファイル、oms.log.2 が作成されます。最後の 2 つのログ・ファイルが保存されます。

重要な注意： Management Server が起動すると、oms.log.* という名前のそれまでのログ・ファイルは、すべて自動的に削除されます。

クライアントのトレース

Enterprise Manager に統合されているすべてのクライアント・アプリケーションのクライアント・トレースを有効にするには、\$ORACLE_HOME/sysman/config ディレクトリに格納されている clientconfig.properties ファイルに、次のパラメータと値を追加して保存します。

```
TRACING.ENABLED=TRUE
TRACING.LEVEL=2
```

さらに、Windows NT の場合のみ、DOS ウィンドウを開いて、次の環境変数を設定します。

```
C:\¥>SET ORACLE_OEM_CLIENTTRACE=TRUE
```

次に、OEMAPP スクリプトを使用して、コマンド行からクライアント・アプリケーションを起動します。

たとえば、次のように指定します。

```
oemapp console
```

注意： アプリケーションをトレースして、その出力をファイルにリダイレクトする場合、アイコンまたはショートカットを使用してアプリケーションを起動することはできません。

Web ブラウザのトレース

ブラウザで Oracle Enterprise Manager の起動時に問題が発生した場合は、トレース情報を収集してから、オラクル社カスタマ・サポート・センターに問題を報告してください。

ブラウザのトレースを設定するには、次の手順を実行してください。

1. ブラウザのセッションを終了します。
2. Java プラグイン・コンソールを起動します。

Windows の「スタート」メニューから、「プログラム」→「JInitiator Control Panel」をクリックします。ウィンドウが表示されます。

 - a. 「Show Java Console」チェックボックスをチェックします。
 - b. 「Java Run Time Parameters」ボックスで、行の終わりに次のものを追加します。
`-DTRACING.ENABLED = TRUE -DTRACING.LEVEL = 2`
 - c. 「適用」ボタンをクリックします。
 - d. 「Oracle JInitiator Properties」パネルを閉じます。
3. ブラウザを再起動し、Oracle Enterprise Manager を再ロードします。

Java コンソール・ウィンドウが現れ、プラグインによってロードされた Java クラスと、発生する可能性のある例外が表示されます。例外が表示されない場合は、画面いっぱいの情報が 3 回か 4 回表示されるごとに画面を消去（「消去」ボタンをクリック）してください。
4. Java コンソール・ウィンドウに例外が表示された場合は、ファイルにカット・アンド・ペーストして、問題の説明と一緒にファイルをオラクル社カスタマ・サポート・センターにお送りください。

ポケットベルのトレース

ポケットベル・サービスは、Management Server とは別にデバッグやトレースができます。ポケットベル・サーバーのトレースは、デフォルトでは使用不可になっています。トレースが使用可能な場合、サーバーによって、すべての電話回線処理や、成功または失敗についてのトレース情報が書き込まれます。ポケットベル送信のたびに情報が記録されるため、ログ・ファイルはポケットベルの送信回数に比例して大きくなります。トレース・ファイルを削除するには、ポケットベル・サーバーを停止してからファイルを削除してください。

Oracle Enterprise Manager ポケットベル・サーバーをインストールすると、ORACLE_HOME/sysman/config ディレクトリに、paging.cfg.template というテンプレート構成ファイルが用意されます。

1. paging.cfg.template ファイルを paging.cfg ファイルにコピーします。このファイルも ORACLE_HOME/sysman/config ディレクトリにあります。

このファイルの名前を変更せずにコピーして、情報を保持しておくことをお勧めします。このファイルをコピーしない場合は、ポケットベル構成に関するコメントがすべて削除されます。また、Enterprise Manager が更新された場合は、すべての構成が失われ、元に戻すことはできません。

2. paging.cfg.template ファイルの指示に従って、トレース使用の要件に合わせて paging.cfg ファイルを変更し、保存します。

paging.cfg ファイルでは、次のパラメータがトレースに影響を与えます。

TRACING.ENABLED

デバッグで使用するための値を設定します。ポケットベル・サービスは、すべての電話回線操作に対するトレース文と、成功または失敗を書き込むことにより、ポケットベル通信で発生した内容をトレースします。

有効値は TRUE または FALSE です。値を TRUE に設定する場合は、TRACEFILENAME と TRACING.LEVEL に値を設定する必要があります。値を FALSE に設定する場合は、TRACEFILENAME と TRACING.LEVEL には値を指定する必要はありません。

TRACING.LEVEL

トレース可能な場合に、収集のためのトレース情報の詳細を指定するための値を設定します。

有効値は 5（重要なメッセージおよびエラー・メッセージを収集するユーザー・レベル）、3（重要なメッセージ、エラー・メッセージ、警告メッセージを収集する管理者レベル）または 2（すべてのトレース情報を収集するレベル）です。

TRACEFILENAME

トレース可能な場合に、トレースの出力結果を書き込む場所を設定します。

この値は PAGING_LOG.TRC に設定することをお勧めします。デフォルトでは、このファイルは、ポケットベル・サーバーの ORACLE_HOME/SYSMAN/LOG ディレクトリ内にあります。

別のディレクトリを指定する場合は、<Drive_Letter>:\¥<directory_path>\¥paging_log.trc のように指定してください。たとえば、トレース・ファイルを C:\¥temp¥に格納する場合は、値を C:\¥temp¥paging_log.trc に設定します。

Management Server のトラブルシューティング

この項の項目は、次のとおりです。

- [Management Server がデフォルト以外の Oracle ホームから正しく実行できない場合](#)
- [Management Server が起動されない場合](#)
- [Management Server 起動時のエラー・メッセージ](#)
- [クライアント・アクセス用の Management Server の変更](#)

Management Server がデフォルト以外の Oracle ホームから正しく実行できない場合

UNIX では、ORACLE_HOME 環境変数が、Management Server が稼働している Oracle ホームに設定されていない場合は、Management Server が正しく起動されません。Management Server では、実際の Oracle ホームではなく、デフォルトの Oracle ホームで、クラス・ファイルが検索されます。

csch

環境変数は次のように設定します。

```
setenv ORACLE_HOME '/usr/local/oracle'
```

ksh/sh

環境変数は次のように設定します。

```
ORACLE_HOME = '/usr/local/oracle'  
export ORACLE_HOME
```

UNIX システムの場合、Oracle 環境は、coraenv (CSH の場合) または oraenv (その他のシェルの場合) をコールして設定することもできます。このシェル・スクリプトにより、任意の識別子の Oracle 環境を設定します。この識別子は特定のデータベースでも、Management Server ソフトウェアが格納されている ORACLE_HOME を指すものでもかまいません。これらのスクリプトは、特定のマシンやサーバー・ベースの設定を含むようにカスタマイズできます。

coraenv および oraenv スクリプトの詳細は、特定のオペレーティング・システムの Oracle 管理ドキュメントを参照してください。

Management Server が起動されない場合

Management Server が起動されない場合のトラブルシューティングの詳細は、次のリソースを参照してください。

- oms.log ファイル
- oms.nohup ファイル
- Windows NT のイベント・ログ (Windows NT の場合)
- OEMCTRL バッチ・ファイル

oms.log ファイル

\$ORACLE_HOME/sysman/log ディレクトリには、ディスクにリダイレクトされたトレースの出力が入っています。このディレクトリには、oms.log ファイルと oms.nohup ファイルが含まれています。

Management Server では、トレース・メッセージはすべて oms.log ファイルに格納されます。oms.log ファイルには、Management Server の起動時および実行時に生成されたメッセージが含まれています。

oms.nohup ファイル

\$ORACLE_HOME/sysman/log ディレクトリ内の oms.nohup ファイルには、Management Server の起動前に表示された Management Server エラー・メッセージと、実行中の重要なメッセージが入っています。

Windows NT のイベント・ログ

Windows NT のイベント・ログにアクセスして、Management Server で記録されたイベントを表示するには、次のようにします。

1. 「スタート」メニュー→「プログラム」→「管理ツール (共通)」を選択し、「イベントビューア」項目を選択するか、または eventvwr.exe を検索します。
2. 「ログ」メニューの「アプリケーション」を選択します。
3. ログの画面が表示されます。Oracle<Oracle_Home_Name>ManagementServer サービスで記録されたイベントの中で、赤い停止記号が示されているものをダブルクリックします。これらのイベントは、Management Server によって報告されたエラーです。

Management Server によりイベント・ビューアに記録されるイベントとイベント番号は、次のとおりです。

イベント番号	メッセージ	内容
101	(OracleEM22ManagementServer) が見つかりません。次の挿入文字列を含みます： OracleEM22ManagementServer	サービス起動の問題。詳細は、ログ・ファイルおよびトレース・ファイルを参照。
105	サービスが開始されました。	通知メッセージ。
108	サービスが停止されました。	通知メッセージ。
110	サービスが本番実行モードになります。	通知メッセージ。
112	サービスが異常終了しました。	詳細は、oms.log ファイルを参照。
113	致命的なエラー プロセスは異常終了しました	詳細は、ログ・ファイルを参照。

エラーがイベント・ビューアに報告されるのは、Management Server が自発的に停止した場合のみです。

OEMCTRL バッチ・ファイル

OEMCTRL スクリプト内の JRE 起動コマンドを変更すると、デバッグの詳細情報を入手できます。

■ Windows の場合

```
SET JRE=jre -nojit -mx32m
```

を次のように変更します。

```
SET JRE=jre -nojit -mx32m -verbose
```

■ UUNIX の場合

```
JRE="jre -native -nojit -mx32m "
```

を次のように変更します。

```
JRE="jre -native -nojit -mx32m -verbose "
```

この手順を実行すると、環境またはインストールの問題が原因で発生したクラス・ロード問題を特定できます。バッチ・ファイルからデータを収集した場合は、オラクル社カスタマ・サポート・センターにその情報をお送りください。

注意： Management Server の起動時に問題が発生した場合は、まず、コンソールのトレースをオンにしてください。それでも原因を特定できない場合は、他のトラブルシューティング手順を実行してから、OEMCTRL バッチ・ファイル手順を使用してください。

Management Server 起動時のエラー・メッセージ

Management Server の起動時に次のようなエラーが表示される場合、後述の解決法を参照してください。

Could not start the Oracle<ORACLE_HOME_NAME>ManagementServer service on <HOST NAME>.
Error 0203: The system could not find the environment option that was entered.

- Management Server はインストールされていますが、構成が完了していません。Enterprise Manager Configuration Assistant を実行して、新規のリポジトリを作成するか、または既存のリポジトリを編集する必要があります。

Windows NT の場合： Enterprise Manager Configuration Assistant は実行されていますが、ユーザーがリポジトリ接続のユーザー名およびパスワードをファイルに保存しないように選択しました（セキュア Management Server モード）。

「Oracle<ORACLE_HOME_NAME>ManagementServer」サービスを選択して「コントロールパネル」の「サービス」内の「スタートアップパラメータ」フィールドにユーザー名とパスワードを入力するか、またはダイアログで要求されたときにリポジトリ接続情報を入力してください。

クライアント・アクセス用の Management Server の変更

複数 Management Server 環境で 1 つの Management Server に障害が発生した場合、影響を受けるのはそのサーバーに接続しているクライアントのみです。各 Management Server は、同じリポジトリに接続されている他の Management Server とは無関係です。

Management Server ノードを、まだ Management Server が稼働している別のノードに変更するには、次の手順に従ってください。

1. Oracle Enterprise Manager ログインで、Management Server のプルダウン・リストから、アクセスするリポジトリで構成されている Management Server が定義されているノードを選択します。

プルダウン・リストに、Management Server が稼働しているノード名が表示されない場合は、次の処理を行います。

- a. 「Management Server」ボタンをクリックします。「Management Server」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- b. 「追加」ボタンをクリックします。「Management Server の追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- c. アクセスするリポジトリで構成されている Oracle Management Server が稼働しているノード名を入力し、「OK」をクリックします。
 - d. プルダウン・リストから、Oracle Management Server が稼働しているノードを選択します。
2. Web ブラウザ経由で Oracle Enterprise Manager が稼働しているそれぞれのマシンで、EmWebSite.html のページに戻ってマシン名を変更し、Management Server が稼働しているノードを表すようにします。Oracle Enterprise Manager ログイン画面で、Management Server のマシン名を入力することはできません。

ポケットベル・サービスのトラブルシューティング

ポケットベルの通知失敗

ポケットベルの通知が失敗すると、ポケットベル・サービスは、あと 3 回ポケットベルの送信を試行します。再試行を行う時間の間隔は、変更できます。デフォルトでは、1 分の間隔で再試行されます。このデフォルト設定を変更するには、Management Server の `ORACLE_HOME/sysman/config` ディレクトリの `OMSCONFIG.PROPERTIES` ファイルを編集します。具体的には、次のプロパティ

```
OEM.PAGING.RETRYINTERVAL=<integer>
```

を `OMSCONFIG.PROPERTIES` ファイルに追加します。<integer> には、再試行の間隔を分単位で指定します。

Web ブラウザのトラブルシューティング

Web ブラウザを起動してコンソールにログインしても、コンソールが稼働しない場合は、JInitiator コンソールに次のメッセージが表示されます。

```
@org.omg.CORBA.INITIALIZE[completed=MAYBE, reason=java.net.BindException:
Cannot assign requested address]
```

次のステップを実行します。

1. JInitiator で、プロキシのブラウザ設定を使用していることを確認します。
 - a. Windows の「スタート」メニューから、「プログラム」→「JInitiator Control Panel」をクリックします。ウィンドウが表示されます。
 - b. 「Proxies」タブを選択します。
 - c. 内容を確認します。
2. ブラウザに指定した Web サーバー・アドレスに、@.us.oracle.com などのドメイン名を追加します。

3. ブラウザの設定を編集し、そのドメインを「no proxy settings for」に追加するか、またはブラウザの設定を編集して、「Direct Connection to Internet」を選択します。

パスワードの再設定

自分の SYSMAN パスワードを忘れたために、oem_temp に再設定する場合は、次の指示に従います。

reset_sysman() プロシージャを使用する前に、まず (SQL*Plus を使用して) Management Server リポジトリに接続する必要があります。

1. コマンド行に次のように入力して、SQL*Plus を起動します。

```
sqlplus
```

2. 接続情報を要求されたら、次のように入力します。

```
<emrepository> /<emrepository-pwd> @<em-repository>
```

すると、データベースに接続します。

たとえば、次のようになります。

```
mynode/mypassword@mynode.world
```

これは、デフォルトのリポジトリ名がホスト名であるためです。

3. 次のように入力します。

```
execute smp_maintenance.reset_sysman();
```

Enterprise Manager Configuration Assistant のトラブルシューティング

Enterprise Manager Configuration Assistant のエラー

この項では、Enterprise Manager Configuration Assistant のエラー・メッセージと、考えられるそれらの原因を説明し、エラー解決の推奨処置を提示します。

構成ファイルにアクセス不能

omsconfig.properties ファイルが書込み不可の場合、「構成ファイルにアクセス不能」ページが表示されます。詳細は、B-11 ページの「[構成ファイルにアクセス不能](#)」を参照してください。

選択したデータベース・ユーザーに、必要な DBA 権限がない

選択したデータベースに DBA ユーザーとしてログインするとき、Configuration Assistant によって、ユーザーに必要な権限があるかどうかチェックされます。必要な DBA 権限がない場合は、「選択したデータベース・ユーザーに、必要な DBA 権限がありません。DBA

権限を持つユーザーとして、データベースにログインしてください。」というメッセージが表示されます。「OK」をクリックして、メッセージ・ボックスを消します。正しい接続情報を入力して、処理を続行します。接続情報を入力して、再試行します。

リポジトリ・ログイン用のデータベースの選択に失敗した

無効なユーザー名、パスワードまたはサービスを入力すると、失敗を示すエラー・メッセージが表示されます。たとえば、次のようになります。「接続に失敗しました。ORA-01017: ユーザー名 / パスワードが無効です ; ログインは拒否されました。」というメッセージが表示されます。「OK」をクリックして、メッセージ・ボックスを消します。データを入力し、再度試みてください。

ユーザーがすでに存在する

ユーザーがすでに存在しており、Enterprise Manager リリース 2 の不完全なリポジトリが含まれています。リポジトリの作成、削除またはアップグレードの操作が進行中であるか、前の操作が失敗した可能性があります。現在の操作を続行すると、不完全なコンポーネントが置き換えられて、不足しているコンポーネントがリポジトリに作成されます。

次のいずれかを選択してください。

- 別のユーザーを選択
- 処理を続行して、選択したリポジトリを使用

リポジトリ操作がすでに実行されている場合は、続行できません。同じリポジトリで複数の操作を同時に実行すると、リポジトリが破損することがあります。

ユーザー "<username>" には、最新の Enterprise Manager V2 リポジトリがすでに含まれている

ユーザー "<username>" には、最新の Enterprise Manager リリース 2 のリポジトリがすでに含まれています。現在のリポジトリを上書きするには、最初に「削除」オプションを使用します。

ユーザーはすでに存在し、V1 リポジトリが含まれている

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant で、選択したリポジトリ名が、データベースの既存のユーザーおよびスキーマの名前で存在し、その中に Oracle Enterprise Manager リリース 1.x のリポジトリが含まれていることが検出された場合は、次のメッセージが表示されます。「そのユーザーはすでに存在し、V1 リポジトリが含まれています。リリース 2 のリポジトリは、リリース 1 のリポジトリと同じスキーマに共存させられません。別のユーザー名を選択してください。」

ユーザーはこのデータベースにすでに存在する

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant で、選択したリポジトリ名がデータベースでユーザーおよびスキーマの名前としてすでに存在し、その中に Oracle Enterprise Manager リリース 2.x もリリース 1.x のリポジトリが含まれていないことが検出された場合は、次のメッセージが表示されます。「ユーザーはこのデータベースにすでに存在します。このユーザーのスキーマ内にリポジトリを作成しますか。」

「いいえ」を選択すると、異なるユーザー名を選択できます。

「はい」を選択すると、「リポジトリ作成のサマリー」ページが表示されます。詳細は、2-14 ページの「[ステップ 5「リポジトリ作成のサマリー」](#)」を参照してください。

このマシンの Management Server により、現在サービス <service_name> 内のユーザー <user_name> が所有するリポジトリが管理されている

リポジトリの作成中、Configuration Assistant で、管理対象リポジトリが omsconfig.properties ファイルですでに指定されていて、そのリポジトリと異なるリポジトリを作成している場合、次のメッセージが表示されます。「このマシンの Management Server により、現在サービス <service_name> 内のユーザー <user_name> が所有するリポジトリが管理されています。ここで、サービス <service_name> 内のユーザー <user_name> が所有するリポジトリを管理するように変更しますか。」

「はい」を選択すると、構成が更新されます。構成ファイルへの変更を有効にするには、Management Server を停止して再起動してください。「いいえ」を選択すると、構成ファイルは更新されません。選択した内容が、「リポジトリの作成サマリー」ページおよび「Configuration Assistant の進行」ウィンドウのステップに反映されます。

ユーザーのデフォルト表領域または一時表領域として SYSTEM が選択されました。

Configuration Assistant では、Oracle Enterprise Manager リポジトリに対するユーザーを作成する際に、デフォルトの表領域と一時的に使用する表領域を指定するように要求されます。いずれかの表領域に SYSTEM を選択すると、Configuration Assistant には「ユーザーのデフォルト表領域または一時表領域として SYSTEM が選択されました。SYSTEM 表領域を、データ・ディクショナリ表と SYSTEM ロールバック・セグメント専用を使用することをお勧めします。よろしいですか。」というメッセージが表示されます。別の表領域を選択してください。

リポジトリのデフォルト表領域に十分な空き領域がない

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant で、リポジトリのデフォルト表領域に十分な空き領域がないことが検出された場合、次のメッセージが表示されます。「リポジトリのデフォルト表領域には十分な空き領域がありません。」考えられる解決方法は、D-16 ページの「[リポジトリ・データベースのデフォルト表領域に十分な空き領域がない](#)」を参照してください。

リポジトリ・データベースのデフォルト表領域に十分な空き領域がない

Configuration Assistant は、リポジトリに対して選択されたデフォルトの表領域に、適切な属性および特性があるかどうか確認します。この表領域に十分な空き領域がない場合は、次のメッセージが表示されます。「リポジトリのデフォルト表領域には十分な空き領域がありません。」

OEM_REPOSITORY 表領域があれば、それを使用してください。これは、Enterprise Manager のデフォルトの表領域です。

新しいユーザーでリポジトリを作成する場合は、「リポジトリ・ユーザー表領域を選択」画面では、OEM_REPOSITORY 表領域を作成するように推奨されます。Enterprise Configuration Assistant を使用して OEM_REPOSITORY 表領域を作成すると、表領域には、必ず正しい属性および特性が定義されます。

ただし、必要に応じて別の表領域を作成したり、既存の表領域を使用することができます。既存の表領域を使用する場合は、そのサイズの拡張が必要になる場合があります。

注意： DBA Studio の Storage Management ツールを使用して、別の表領域を作成、または既存の表領域のサイズを拡張する場合は、Configuration Assistant を終了する必要はありません。

Oracle Enterprise Manager リポジトリの記憶域要件とディスクの領域割当てを決定する場合は、[付録 E 「リポジトリのサイズ設定」](#) を参照してください。

OEM_REPOSITORY 表領域が存在しない場合の作成

OEM_REPOSITORY 表領域が作成されていない場合は、Enterprise Manager Configuration Assistant の「リポジトリ・ユーザー表領域を選択」ページの「新規の OEM_REPOSITORY 表領域の作成（推奨）」オプションが有効になります。

OEM_REPOSITORY 表領域を作成する場合は、このオプションを選択します。Enterprise Manager Configuration Assistant を使用して OEM_REPOSITORY 表領域を作成すると、表領域には適切な属性および特性が定義されます。これを、ユーザーのデフォルト表領域として使用します。

別の表領域の作成

Configuration Assistant を使用して表領域を作成することをお勧めします。この方法を使用すると、サポートされているデータベース内に適切な属性で表領域が作成されるためです。デフォルトの表領域の属性は、データベースのバージョンによって異なります。

DBA Studio の Storage Management ツールを使用して新しい表領域を作成する場合は、次の項に記載されている手順に従ってください。

1. DBA Studio をスタンドアロン・モードで起動します。

■ Windows NT の場合

Windows の「スタート」メニュー→「プログラム」→「Oracle-<Oracle_Home_Name>」→「Database Administration」→「DBA Studio」を選択して、DBA Studio を起動できます。

■ UNIX の場合

コマンド行から次のコマンドを使用して、DBA Studio を起動できます。

```
oemapp dbastudio
```

ログイン・ダイアログ・ボックスが表示されます。ここで「データベースに直接接続」を選択し、「OK」をクリックします。

2. DBA Studio のナビゲータ・ツリーでデータベースのノードをクリックし、SYSDBA 権限を持つユーザーとしてデータベースに接続します。
3. 「オブジェクト」メニューの「作成」を選択し、「表領域」を選択して「作成」をクリックします。「作成 表領域」プロパティ・シートが表示されます。
4. 「作成 表領域」プロパティ・シートの「一般」ページに、新しい表領域名を入力し、この表領域を使用して永続的なデータベース・オブジェクトを保持するように指定します。
5. 「データ・ファイル」セクションに、新しいデータ・ファイルのサイズを指定します。「ファイル名」および「ファイル・ディレクトリ」の列には、デフォルトの内容が自動的に設定されます。
6. データ・ファイル名 (<name>.ora) の隣に表示されている「+」記号を右クリックし、「編集」を選択して、データファイル行をダブルクリックするか、「編集」ボタン（鉛筆型のアイコン）を選択します。「作成 データファイル」プロパティ・シートが表示されます。
7. 「作成 データファイル」プロパティ・シートの「記憶域」ページで、「満杯時に自動的にデータファイルを拡張 (AUTOEXTEND)」ボックスを選択して、データベースでこれ以上の領域が必要になった場合に、サイズが自動的に拡張されるようにします。
8. 「作成 データファイル」プロパティ・シートの「OK」ボタンをクリックします。
9. 「作成 表領域」プロパティ・シートの「記憶域」ページで、領域を管理する方法を選択します。ここで指定した方法は、後で変更できます。
10. 「作成 表領域」プロパティ・シートの「作成」ボタンをクリックします。

既存の表領域のサイズを拡張

Configuration Assistant を使用して表領域を作成することをお勧めします。この方法を使用すると、サポートされているデータベース内に適切な属性で表領域が作成されるためです。デフォルトの表領域の属性は、データベースのバージョンによって異なります。

DBA Studio の Storage Management ツールを使用して既存の表領域のサイズを拡張するには、この項で説明する手順に従ってください。

1. DBA Studio をスタンドアロン・モードで起動します。
 - Windows NT の場合
Windows の「スタート」メニュー→「プログラム」→
「Oracle-<Oracle_Home_Name>」→「Database Administration」→「DBA Studio」
を選択して、DBA Studio を起動できます。
 - UNIX の場合
コマンド行から次のコマンドを使用して、DBA Studio を起動できます。

```
oemapp dbastudio
```

ログイン・ダイアログ・ボックスが表示されます。ここで「データベースに直接接続」を選択し、「OK」をクリックします。

2. DBA Studio のナビゲータ・ツリーでデータベースのノードをクリックし、SYSDBA 権限を持つユーザーとしてデータベースに接続します。
3. Storage Management のノードを展開します。
4. 「データファイル」フォルダから、拡張するデータファイルをダブルクリックします。「データファイル」プロパティ・シートの「一般」ページが表示され、データファイルのファイル・サイズを編集できます。
5. 「一般」ページの「適用」ボタンをクリックします。
6. 「記憶域」タブをクリックします。「データファイル」プロパティ・シートの「記憶域」ページが表示されます。
7. 「満杯時に自動的にデータファイルを拡張 (AUTOEXTEND)」ボックスを選択し、「適用」ボタンをクリックします。

リポジトリ操作には不十分なデータベース・パラメータ

Oracle Management Server は、クライアントおよび管理対象ノードのかわりに作業を行っている場合には、複数のリポジトリ・データベース・セッションをオープンできません。

通常、1 つの Management Server で必要なセッション数は 3 ～ 5 個で、Management Server の負荷によって異なります。次のような状況では、通常以上のリポジトリ・データベースのセッションが必要になります。

- 多数のコンソールがジョブの発行またはイベントの登録を行っている場合
- 複数の Management Server が同じリポジトリを使用している場合
- 多数の Intelligent Agent が Management Server に通知を送信している場合

Enterprise Manager のリポジトリで使用されているデータベースに対して他のアプリケーションもアクセスすると、データベースのセッション負荷が高くなります。これは、データベースを設定する際に考慮しておく必要があります。

Oracle Enterprise Manager に対するプロセスの設定が低すぎる場合は、`Oracle_OEM_Home/sysman/log` ディレクトリの `oms.log` ファイルに、次のようなエラー・メッセージが示されます。

```
can't open a session
```

負荷が高くなった場合、またはリポジトリが定義されているデータベースに複数のアプリケーションがアクセスしている場合は、負荷に応じて、データベースの `init.ora` のプロセス・パラメータの値を増やすことが可能です。

Instance Management ツールを使用してデータベースのパラメータを変更するには、この項で説明する手順に従ってください。

1. DBA Studio をスタンドアロン・モードで起動します。

- Windows NT の場合

Windows の「スタート」メニュー→「プログラム」→
「Oracle-<Oracle_Home_Name>」→「Database Administration」→「DBA Studio」
を選択して、DBA Studio を起動できます。

- UNIX の場合

コマンド行から次のコマンドを使用して、DBA Studio を起動できます。

```
oemapp dbastudio
```

ログイン・ダイアログ・ボックスが表示されます。ここで「データベースに直接接続」を選択し、「OK」をクリックします。

2. DBA Studio のナビゲータ・ツリーでデータベースのノードをクリックし、SYSDBA 権限を持つユーザーとしてデータベースに接続します。
3. Instance Management のノードを展開します。
4. 「データベース」プロパティ・シートの「一般」ページで、「すべての初期化パラメータ」ボタンをクリックします。
5. パラメータの値を変更します。
6. 「すべての初期化パラメータ」ページで、「別名保存」ボタンをクリックします。「初期化パラメータを保存」ダイアログ・ボックスが表示されます。
7. 完全なディレクトリ・パスとファイル名を入力するか、「参照」ボタンを使用してローカルのオペレーティング・システムを検索してファイルを検出し、ファイル名を入力します。
8. 「OK」を押してファイルを保存します。

omsconfig.properties ファイルに関する許可の変更

リポジトリの作成時に、リポジトリ接続情報を omsconfig.properties ファイルに保存するように選択した場合に、このファイルに関する許可を変更して、ファイルを参照できるユーザーを制限することがあります。

ファイルに関する許可を変更すると、他のユーザーはファイルを参照できなくなります。

注意： omsconfig.properties ファイルに保存されているリポジトリ接続情報では、パスワードはプレーン・テキストではありません。パスワードが存在する場合は、暗号化されてファイルに保存されています。

UNIX の場合

ファイルの許可を変更するには、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
$ chmod 600 omsconfig.properties
```

このコマンドによって、ファイルの所有者のみが読み込みおよび書き込みできるようになります。

Windows NT の場合

ファイルの許可を変更するには、次のステップを実行します。

1. 「スタート」メニュー→「プログラム」で、「Windows NT エクスプローラ」を選択します。
2. Oracle_Home¥sysman¥config ディレクトリで、omsconfig.properties ファイルを選択します。
3. 選択したファイルでマウスを右クリックし、ポップアップ・メニューの「プロパティ」を選択します。
4. 「プロパティ」ダイアログ・ボックスの「セキュリティ」タブを選択します。

注意： このステップは、NTFS ファイル・システムにのみ適用されます。

5. 「セキュリティ」ページの「アクセス権」ボタンを押して、「ファイルのアクセス権」ダイアログ・ボックスを表示します。デフォルトでは、「Everyone」に「フル コントロール (ALL)」が設定されています。「アクセス権の種類」は「フル コントロール」です。
6. 「削除」ボタンをクリックして、このエントリを削除します。
7. 「追加」ボタンをクリックして、「ユーザーとグループの追加」ウィンドウを表示します。

8. 「ユーザーの表示」ボタンをクリックして、すべてのユーザーを表示します。
 9. Management Server を通常に起動し、Enterprise Manager Configuration Assistant を使用するユーザーを選択し、「アクセス権の種類」フィールドで、ドロップダウン・リストから「フル コントロール」を選択します。
 10. 「OK」ボタンをクリックして、「ユーザーとグループの追加」ダイアログ・ボックスを終了します。
 11. 「OK」ボタンをクリックして、「ファイルのアクセス権」ダイアログ・ボックスを終了します。
 12. 「OK」ボタンをクリックして、「プロパティ」ダイアログ・ボックスを終了します。
- 複数のユーザー名にアクセス権限を付与できます。

SGA サイズの決定

SGA のサイズは、主に 2 つの要素によって決定されます。

- インスタンスで使用できる RAM の容量
- インスタンスで予想されるアクティビティの量

インスタンスで使用できる RAM の容量とは、リポジトリのインスタンスで専用に使用されるメモリです。この中には、リポジトリのホスト・ノード上の、他のインスタンスおよびアプリケーションに必要なメモリは含まれないようにします。アクティビティの量には、有効な（発行された）ジョブ、有効な（登録されている）イベント、監視対象のホスト、接続した管理者が、すべて含まれます。アクティビティが増加すると、インスタンス上の要求も増加します。

インスタンスが Management Server リポジトリ専用である場合は、最低限必要なサイズは、次のようになります。

```
db_block_size = 2048           # EM is a strict OLTP application

db_block_buffers = 2048        # **May need increase under heavy load**

sort_area_size = 128000        # **May need increase under heavy load**

sort_area_retained_size = 128000 # **May need increase under heavy load**

log_buffer = 64000             # **May need increase under heavy load**
```

Management Server のリポジトリのトランザクションが短い傾向にあれば、ロールバック領域は問題にはなりません。トランザクション（前述のものに対するアクティビティ）が多いことが予想される場合は、REDO ログ・サイズおよび log_buffer サイズを確認してください。

ジョブ通知のトラブルシューティング

問題

ジョブ通知が配布されずに、コンソールのステータスではスケジュール済のままになります。ジョブは作動するときも、しないときもあります。ジョブを再発行すると、「ジョブはすでに発行されています。」というエラーが表示されます。

解決方法

Intelligent Agent が、異なる IP アドレスで稼働している 2 つのコンソールに対して、ジョブのステータスまたは出力を配布している可能性があります。

あるノードで使用しているリポジトリと同じ名前のリポジトリを使用して、別のノードで別の Enterprise Manager が稼働していることが考えられます。どちらのマシンが最後に登録されたかによって、一方のノードへ配布されるジョブ通知と、他方のノードへ配布されるジョブ通知があります。ノード上で稼働している Management Server を確認し、いずれかを正しい Management Server として定義する必要があります。

リポジトリのサイズ設定

この付録では、Oracle Enterprise Manager のリポジトリに対して、記憶域要件とディスクの領域割当てを決定する際のガイドラインについて説明します。

領域の要件は、使用する Oracle Enterprise Manager ツールで行う処理、および実行する作業で生成されるデータ量によって異なります。また、リポジトリが作成されるデータベースのリリースの違い（リリース 8.1.6 と 8.0.6 など）によっても、リポジトリのデータの量の増加は多少異なります。

通常のインストール・セッションから新しいリポジトリを作成する際に、リポジトリに対するデフォルトの構成を確定すると、OEM_REPOSITORY という新しい表領域が生成されます。OEM_REPOSITORY 表領域には、Oracle Enterprise Manager コンソール、DBA Management Pack、および個別にライセンスを取得できるすべてのパックのリポジトリ・オブジェクトが含まれます。これらのパックでは、インストールしたか、またはライセンスを取得したかどうかに関係なく、個別にライセンスを取得できるものがすべて対象となります。また、リポジトリが作成されるデータベースのリリースによって、リポジトリを最初に 6 ～ 26MB のハード・ディスク領域に割り当てることができます。

実際に Oracle Enterprise Manager 製品をどのように使用するかにによって、リポジトリのサイズを拡張できます。リポジトリのデータ量がどのくらい増加するかを決定するには、次の表を参照してください。リポジトリ・サイズの増加に適合できるように、デフォルトの OEM_REPOSITORY 表領域は、自動拡張に設定されています。たとえば、小規模な 1 つのデータベースに対して Capacity Planner を使用して、デフォルトの OEM_REPOSITORY 表領域を 4MB の割当てで作成したとします。しかし、実際には（大規模な 3 つのデータベースなどの）標準的な基準で Capacity Planner を使用すると、リポジトリのサイズは、概算で 16MB に増加します。このような場合には、表領域は、増加量に合わせて自動的に拡張されます。

通常のインストール・セッションから新しいリポジトリを作成し、既存の表領域を使用する場合は、次のステップに従って、リポジトリで使用するディスク領域がどのくらい増加するかを決定します。

1. 「製品」列を参照して、使用している製品を検索します。
2. それぞれの製品で実行する操作を、「状況」列で識別します。

3. それぞれの操作に対して、ハード・ディスクの領域に「割当」列の容量を追加します。これらの必要量の合計が、リポジトリの予想サイズとなります。

製品	状況	割当て
Oracle Enterprise Manager コンソールと DBA Management Pack	<ul style="list-style-type: none"> ■ コンソールと DBA Management Pack のみを使用する。 ■ ジョブ履歴にはほとんど保存しない。 	4 ～ 9MB
Oracle Diagnostics Pack	<ul style="list-style-type: none"> ■ 4MB 未満のトレース・データを収集する。 	8MB
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 小規模な 1 つのデータベースで数日 Capacity Planner を使用する。 	
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 4 ～ 20MB のトレース・データを収集する。 	30MB
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 中規模の 1 つのデータベースで数か月 Capacity Planner を使用する。 	
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 20 ～ 60MB のトレース・データを収集する。 	80MB
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 最大 3 つの大規模なデータベースで数か月 Capacity Planner を使用する。 	
Oracle Tuning Pack	次の範囲未満で保存	15MB 未満
	<ul style="list-style-type: none"> ■ チューニングされた SQL 文： 50 個 ■ 有効なチューニング・セッション： 5 ■ ジョブ履歴の表領域ジョブ： 10 個 	
	次の範囲で保存	15 ～ 45MB
	<ul style="list-style-type: none"> ■ チューニングされた SQL 文： 50 ～ 150 個 	
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 有効なチューニング・セッション： 5 ～ 15 ■ ジョブ履歴の表領域ジョブ： 10 ～ 30 個 	

製品	状況	割当て
	次の範囲を超えるものを保存 <ul style="list-style-type: none"> ■ チューニングされた SQL 文： 150 個 ■ 有効なチューニング・セッション： 15 ■ ジョブ履歴の表領域ジョブ： 30 個 	90MB 以上
Oracle Change Management Pack	<ul style="list-style-type: none"> ■ 約 500 個のオブジェクトを持つスキーマ ベースライン： 1 個（2 つのバージョンで保存） 保存されている比較： 1 個 変更計画： 1 個（スキーマを伝播） 	10MB
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 約 500 個のオブジェクトを持つスキーマ ベースライン： 2 個（2 つのバージョンで保存） 保存されている比較： 2 個 変更計画： 5 個 	25MB
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 約 500 個のオブジェクトを持つスキーマ ベースライン： 5 個（2 つのバージョンで保存） 保存されている比較： 5 個（2 つのバージョン） 変更計画： 10 個 	50MB
Oracle Management Pack for Oracle Applications	<ul style="list-style-type: none"> ■ 小規模な 1 つのデータベースで数日 Capacity Planner を使用する。 	4MB
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 中規模の 1 つのデータベースで数か月 Capacity Planner を使用する。 	10MB

製品	状況	割当て
	<ul style="list-style-type: none"> 最大 3 つの大規模なデータベースで数か月 Capacity Planner を使用する。 	20MB
Oracle Standard Management Pack ¹	<ul style="list-style-type: none"> 約 500 個のオブジェクトを持つスキーマ ベースライン： 1 個（2 つのバージョンで保存） 保存されている比較： 1 個 	10MB
	<ul style="list-style-type: none"> 約 500 個のオブジェクトを持つスキーマ ベースライン： 2 個（2 つのバージョンで保存） 保存されている比較： 2 個 	20MB
	<ul style="list-style-type: none"> 約 500 個のオブジェクトを持つスキーマ ベースライン： 5 個（2 つのバージョンで保存） 保存されている比較： 5 個（2 つのバージョン） 	40MB

¹ 個別にライセンスを取得できる他のパックは、Oracle8i Enterprise Edition で使用できますが、Oracle Standard Management Pack は、Oracle8i standard edition でのみ使用できます。

たとえば、次のような状況であるとします。

- コンソールと DBA Management Pack を標準で使用します。ただし、通常は大量の出力はジョブ履歴に保存しません（約 7MB）。
- 約 45MB のトレース・データを収集します（約 45MB）。
- ごく少量のデータに対して Capacity Planner を使用します（約 4MB）。
- チューニングされた SQL 文を約 100 個、有効なチューニング・セッションを 11、ジョブ履歴の表領域ジョブを 25 個保存します（約 32MB）。

この場合には、これらの領域割当ての合計は、88MB（7MB + 45MB + 4MB + 32MB）となります。したがって、リポジトリに対して約 88MB の割当てを想定できます。

重要： ここで説明している内容は、Oracle Enterprise Manager の環境のデフォルト構成に基づいたガイドラインにすぎません。実際のリポジトリのサイズ設定要件は、設定されたカスタム構成によって、異なります。コンソールおよび各種のパックで、実際にどのアプリケーションを使用しているか、パラメータをどのように構成したか、などによって、リポジトリで必要とするディスク領域は異なります。たとえば、Oracle Diagnostics Pack のデフォルトのサンプリング間隔は 5 分です。このサンプリング間隔を短くする場合は、より多くのディスク領域を割り当てる必要があります。ジョブ履歴に保存するデータ量によっても、リポジトリに必要な領域の量が異なります。40 ～ 50MB の大量の出力をジョブ履歴に保存する場合は、さらに 40 ～ 50MB のディスク領域が必要になります。

Web サーバーの構成とディレクトリ・マッピング

Enterprise Manager にデフォルトでパッケージされている Oracle HTTP Server なしで、Oracle Enterprise Manager Web サイトをインストールする場合は、サポートされている Web サーバーを後述の手順で構成します。

- Apache 1.3.9 以上 (UNIX)
- Internet Information Server (IIS) 4.0 (Windows NT または Windows 2000)

Apache 1.3.9 以上 (UNIX)

1. Enterprise Manager Web サイトを、Oracle HTTP Server なしでインストールします。
2. Apache 1.3.9 以上をインストールします。詳細は、Apache 固有の構成ドキュメントを参照してください。
3. Apache home → conf → httpd.conf/ を選択し、httpd.conf を編集します。Web リスナーを停止し、再起動します。
4. ScriptAlias は、サーバー・スクリプトがどのディレクトリに含まれるかを制御します。ScriptAlias は、基本的には Alias と同じものですが、実際のディレクトリ (realname ディレクトリ) のドキュメントが、(クライアントに送信されたドキュメントとしてではなく) アプリケーションとして処理され、要求されたときにサーバーで実行される点が異なります。

ScriptAlias では、後続の “/” は Alias の場合と同じルールで使用されます。

```
ScriptAlias /oem_webstage/cgi-bin  
"/private/oemv2/oem_webstage/cgi-bin"
```

注意: /private/oemv2/ は、Oracle ホームです。

5. 任意の数の別名を追加できます（制限はありません）。次の形式で指定します。

```
Alias fakename realname
```

fakename に後続の “/” が含まれている場合は、サーバーでは “/” も URL に含まれていると見なされます。この例では、“/icons” ではなく “/icons/” が別名となります。

```
Alias /icons/ "/usr/local/apache/icons/"
```

```
Alias /oem_webstage "/private/oemv2/oem_webstage/"
```

注意： /private/oemv2/ は、Oracle ホームです。

6. ScriptAlias で定義された CGI ディレクトリが構成されている場合は、そのディレクトリに “/apache/cgi-bin” ディレクトリを変更します。

< ディレクトリ "usr/local/apache/cgi-bin"> から

< ディレクトリ "/oem_webstage/cgi-bin"> へ

```
AllowOverride all
```

```
Allow from all
```

```
</Directory>
```

AddHandler を使用すると、特定のファイル拡張子をハンドラ（つまりファイルタイプに関連付けられていないアクション）にマップできます。ハンドラは、サーバーに組み込むことも、Action コマンドで追加することもできます。

Internet Information Server (IIS) 4.0

Internet Information Server を使用するには、oem_webstage ディレクトリとそのディレクトリ内の 2 つのサブディレクトリを指す 3 つの仮想ディレクトリを作成する必要があります。oem_webstage ディレクトリは、次のいずれかのインストールで Oracle Enterprise Manager Web サイト・コンポーネントをインストールすると、インストール手順で自動的に作成されます。

- 「Oracle8i Enterprise Edition 8.1.7.0.0」 → 「カスタム」
 - 「Oracle8i Management and Integration 8.1.7.0.0」 → 「Oracle Management Server」
 - 「Oracle8i Management and Integration 8.1.7.0.0」 → 「カスタム」
1. Enterprise Manager Web サイトを、Oracle HTTP Server なしでインストールします。
 2. Internet Information Server (IIS) 4.0 をインストールします。詳細は、Internet Information Server 固有の構成ドキュメントを参照してください。

3. Windows NT の「スタート」メニューで、「Microsoft Internet Information Server 4.0」→「Internet Service Manager」を選択し、Internet Information Server を構成します。「Microsoft Internet Service Manager」画面が表示されます。
4. 「Default Web Site」を選択して右クリックすると、関連するサブメニューが表示されます。
5. 「Properties」をクリックし、Default Web Site のプロパティ・シートを表示します。
6. ノードの IP アドレスが、プロパティ・シートに正しく設定されていることを確認します。「OK」をクリックします。
7. 「New」、「Virtual Directory」を選択します。
8. 仮想ディレクトリの名前を入力します。たとえば、oem_webstage と入力します。
9. 次のように設定します。

Alias: /oem_webstage

Path: ORACLE_HOME¥oem_webstage

Access: Read、Execute

10. 設定を保存した後、「Default Web Site」を展開して、新しい仮想ディレクトリを表示します。
11. 新しい仮想ディレクトリ oem_webstage を選択します。
12. 「Action」ボタンをクリックし、「New」、「Virtual Directory」を選択して、次の設定で追加の仮想ディレクトリを作成します。

Alias: cgi-bin

Path: ORACLE_HOME¥oem_webstage¥cgi-bin

Access: Read、Execute

13. 追加の仮想ディレクトリを “¥oem_webstage¥java-plugin” という別名で、ディレクトリ ORACLE_HOME¥oem_webstage¥java-plugin に作成し、次のように設定します。

Alias: java-plugin

Path: ORACLE_HOME¥oem_webstage¥java-plugin

Access: Read-only

注意： 実行権限を与えないようにしてください。実行権限を与えると、プラグインをダウンロードできなくなります。

キーボード・ショートカット

この付録には、一般的な Windows のキーボード・ショートカットのリストが記載されています。Windows のキーボード・ショートカットおよびナビゲーションの完全なリストは、ご使用のオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

表 G-1 一般的な Windows キーボード・ショートカット

キー	動作
[F1]	アクティブ・オブジェクトまたはウィンドウ全体のヘルプ情報を表示。
Windows キーまたは [Ctrl]+[Esc]	タスクバー上にある「スタート」メニューを開く。
[Ctrl]+[Alt]+[Del]	Microsoft Windows では、「プログラムの強制終了」ダイアログ・ボックスを開く。ここには、終了する対象のアプリケーションのリストと、「終了」、「シャットダウン」および「キャンセル」のコマンド・ボタンが表示されます。 Microsoft Windows NT では、「Windows NT のセキュリティ」ダイアログ・ボックスを開く。ここには「ワークステーションのロック」、「ログオフ」、「シャットダウン」、「パスワードの変更」、「タスク マネージャ」および「キャンセル」のオプションがあります。ログインしていない場合は、ログイン・ダイアログ・ボックスが開きます。
[Del]	選択した項目を削除。項目がファイルの場合、それらを「ごみ箱」に移します。
[Shift]+[Del]	選択した項目を削除。項目がファイルの場合、それらを「ごみ箱」に移さず、ただちに削除します。
[Ctrl]+[N]	「新規作成」ダイアログ・ボックスを開く。（「ファイル」メニューの「新規作成」コマンドを選択することもできます。）
[Ctrl]+[O]	「ファイルを開く」ダイアログ・ボックスを開く。（「ファイル」メニューの「開く」コマンドを選択することもできます。）
[Ctrl]+[P]	「印刷」ダイアログ・ボックスを開く。（「ファイル」メニューの「印刷」コマンドを選択することもできます。）

キー	動作
[Ctrl]+[S]	「ファイル名を付けて保存」ダイアログ・ボックスを開く。（「ファイル」メニューの「上書き保存」コマンドを選択することもできます。）
[Ctrl]+[X]	選択した項目を切り取り、クリップボードに移す。（「編集」メニューの「切り取り」コマンドを選択することもできます。）
[Ctrl]+[Insert] または [Ctrl]+[C]	選択した項目をクリップボードにコピー。（「編集」メニューの「コピー」コマンドを選択することもできます。）
[Shift]+[Insert] または [Ctrl]+[V]	クリップボードから、コピーした項目を貼り付ける。（「編集」メニューの「貼り付け」コマンドを選択することもできます。）
[Alt]+[Back Space] または [Ctrl]+[Z]	直前の操作を元に戻す。操作の中には元に戻せないもの（シャットダウンなど）もあることに注意してください。（「編集」メニューの「元に戻す」コマンドを選択することもできます。）
[Alt]+[Shift]+[Back Space]	直前の元に戻す操作を繰り返す。（「編集」メニューの「やり直し」コマンドを選択することもできます。）
Windows キー +[M]	すべてのウィンドウを最小化。キーボードのフォーカスは、デスクトップ上で直前に選択されていたアイコンに移ります。前に開いていたウィンドウを拡大し、最後に使用していたアプリケーションにフォーカスを戻すには、[Shift] を一緒に押します。

索引

A

admin ディレクトリ, A-1
Apache 1.3.9 以上 (UNIX), F-1

C

clientconfig.properties, A-2
Configuration Assistant
 Management Server で、起動時にリポジトリへのロ
 グインで使用するパスワードの変更, B-8
 既存のリポジトリを管理するように Management
 Server を設定, B-8
 起動, 2-5
 同一または別のデータベース内の別のリポジトリを
 使用するように Management Server 構成を変
 更, B-8
 トラブルシューティング, D-14
 リポジトリのアップグレード, 2-1, B-2
 リポジトリの削除, B-6
 リポジトリの作成, 2-1
config ディレクトリ, A-1

D

DBA Management Pack, 8-1
DBA Studio, 8-1
DBA Studio の手順
 OMS モードからスタンドアロン・モードへの変更,
 8-16
 OMS モードの DBA Studio のナビゲータ・ツリー
 にデータベースを追加, 8-15
 OMS モードのナビゲータからデータベースを削除,
 8-15
 Quick Tour へのアクセス, 8-13

 スタンドアロン・モードから OMS モードへの変更,
 8-16
 スタンドアロン・モードの DBA Studio のツリーか
 らデータベースを削除, 8-14
 接続で使用するロールの参照, 8-14
 データベースに別のユーザーとして接続, 8-13
dbappscfg.properties, A-2

H

host (マシン名), 2-8

I

ifiles ディレクトリ, A-1
init.ora ファイル, 6-38
Intelligent Agent
 UNIX, 5-4
 起動, 5-4
 ステータスの確認, 5-4
 ステータスのチェック, 5-4
 停止, 5-4
 Windows, 5-2
 起動, 5-2
 ステータスの確認, 5-3
 ステータスのチェック, 5-3
 停止, 5-3
 定義, 1-6, 1-8
Internet Information Server (IIS) 4.0, F-1, F-2

L

LOGGING.DIR, D-4
LOGGING.ENABLED, D-4
LOGGING.FILENAME, D-5

LOGGING.MAX_FILE_CNT, D-5
LOGGING.MAX_SIZE, D-5
LOGGING.SAVE_PREVIOUS_LOG, D-6
log ディレクトリ, A-1

M

Management Server

Oracle Enterprise Manager インストールからの自動
起動, 2-5
起動, 3-1
クライアント・アクセス用の変更, D-12
構成パラメータ, 編集, B-8
ステータスのチェック, 3-4
接続のダイヤルアップ回線, 6-37
定義, 1-8
停止, 3-6
トラブルシューティング, D-9
ロギングとトレース, D-4
ログ, D-6
ログイン・ダイアログ・ボックスから選択, 6-3
「Management Server」ダイアログ・ボックス, 6-3
mesg ディレクトリ, A-1
MetaLink, D-3
Migration Assistant, 7-2, 7-4
移行の段階, 7-2
起動, 7-9
重要な注意, 7-2
使用前のリリース 1.x のリポジトリ情報の確認, 7-8
リポジトリ移行の準備, 7-6
リリース 1.x のリポジトリとリリース 2.2 のリポジ
トリとの違い, 7-3

O

OEM_REPOSITORY 表領域, 2-13, D-17
oem_temp パスワード, 1-7
oemapp console コマンド, 6-2
oemclient.properties, A-2
oemctrl start oms コマンド, 3-3
oemctrl status oms コマンド, 3-4
oemctrl stop oms コマンド, 3-6
omsconfig.properties ファイル, 2-4, A-2, B-10, D-4
OMS モードの DBA Studio, 8-10
Oracle Enterprise Manager
admin ディレクトリ, A-1
config ディレクトリ, A-1

ifiles ディレクトリ, A-1
Intelligent Agent, 1-6, 1-8
log ディレクトリ, A-1
Management Server, 1-8, 3-1, 3-4, 3-6
mesg ディレクトリ, A-1
readme ディレクトリ, A-1
report ディレクトリ, A-1
temp ディレクトリ, A-1
アーキテクチャ, 1-2
コンソール, 1-6, 1-8, 6-1, 6-2, 6-14
システムおよびハードウェアの要件, 1-10
ディレクトリ構造, A-1
トレースとロギング, D-4
リポジトリ, 1-7
リポジトリの所有者, 1-7

Oracle Enterprise Manager のアーキテクチャ, 1-2
Oracle HTTP Server, 6-9

P

paging.cfg, D-8
paging.cfg.template, A-2, D-8

R

readme ディレクトリ, A-1
report ディレクトリ, A-1

S

SID (データベース・システム ID), 2-8
SMTP メール
アドレス, 6-27
ゲートウェイ, 6-27
SMTP メール・ゲートウェイ, 6-27
sysman アカウント, 1-7

T

temp ディレクトリ, A-1
TRACEFILENAME, D-8
TRACING.ENABLED, D-4, D-8
TRACING.LEVEL, D-5, D-8

W

Web サーバー, サポート, 6-9
Web ブラウザ, サポート, 6-8
Windows ユーザー・アカウント
 権限の割当て, 6-15
 作成, 6-14

い

移行の段階, 7-2

お

オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問題の
 報告, D-1

か

管理者
 スーパー, 6-5
管理対象サービスの優先接続情報リスト, 設定, 6-17
管理ユーザー
 定義, 1-7

き

キーボード・ショートカット, 一般的な Windows プ
 ラットフォーム, G-1
記憶域要件とディスクの領域割当てを決定するための
 ガイドライン, E-1
起動
 Configuration Assistant, 2-5
 DBA Studio, 8-1
 Intelligent Agent
 UNIX, 5-4
 Windows, 5-2
 Management Server, 3-1
 Migration Assistant, 7-9
 Web ブラウザからの Oracle Enterprise Manager,
 6-6
 コンソール, 6-2
 Web ブラウザから, 6-6
 Windows の「スタート」メニューから, 6-2
 コマンド行から, 6-2
 サービス検出, 6-4
基本用語, 1-7

Intelligent Agent, 1-8
Oracle Management Server, 1-8
管理ユーザー, 1-7
コンソール, 1-8
サービス検出, 1-8
優先接続情報リスト, 1-9
リポジトリ, 1-7
リポジトリの所有者, 1-7

こ

構成
 Enterprise Manager を実行する Web ブラウザ,
 6-10
 OMS モードの DBA Studio
 Management Server への接続, 8-10
 起動, 8-11
 データベースへの接続, 8-12
 Oracle Enterprise Manager, 1-12
 Web サーバーとディレクトリ・マッピング, F-1
 Apache 1.3.9 以上 (UNIX), F-1
 Internet Information Server (IIS) 4.0, F-1, F-2
 スタンドアロン・モードの DBA Studio, 8-4
 起動, 8-4
 ツリーへのデータベースの追加, 8-5
 データベースへの接続, 8-6
 ローカル優先接続情報リストの編集, 8-8
 ダイヤルアップ回線用コンソール, 6-37
 追加の Management Server, 4-2
 電子メール通知, 6-27
 ポケットベル・サービス, 6-18
 リモート SYSDBA アクセス, 6-38
 リリース 2.1 のリポジトリ, 2-1
構成パラメータのメンテナンス, 2-1
「構成ファイルにアクセス不能」ページ, B-6, B-11
コンソール
 起動, 6-2
 Web ブラウザから, 6-6
 Windows の「スタート」メニューから, 6-2
 コマンド行から, 6-2
 設定, 6-14
 定義, 1-6, 1-8

さ

サービス検出, 6-4
 定義, 1-8

作成

OEM_REPOSITORY 表領域, 2-13, D-17
omsconfig.properties ファイル, 2-4, B-10
新規パスワード・ファイル, 6-38
リポジトリの作成時のデータベース・ユーザー,
2-9

し

システムおよびハードウェアの要件

1 台のマシンからの Enterprise Manager バンドル全
体の実行, 1-10
個別マシンでの Enterprise Manager コンポーネント
の実行, 1-10
最適な環境の特性, 1-10, 1-11

す

数字ポケットベルのポケットベル・ステータス・コー
ド, 6-33
スーパー管理者, 6-5
スタンドアロン・モードの DBA Studio, 8-4
ステータスのチェック
Intelligent Agent
UNIX, 5-4
Windows, 5-3
Management Server, 3-4
ポケットベル・サービス, 6-25

せ

セキュリティ・ログイン, 6-3

設定

ORACLE_HOME 環境変数, 3-3, D-9
Windows ドメイン・ユーザー, 6-16
Windows ユーザー・アカウント, 6-14
管理対象サービスの優先接続情報リスト, 6-17
コンソール, 6-14
電子メール通知, 6-27
トレースとロギング, D-4
ポケットベル・サービス, 6-18

た

ダイヤルアップ回線, 構成, 6-37

て

停止

Intelligent Agent
UNIX, 5-4
Windows, 5-3
Management Server, 3-6
ポケットベル・サービス, 6-25
ディレクトリ構造, A-1
データベース・リスナー・ポート・アドレス, 2-8
電子メール通知, 設定, 6-27

と

トラブルシューティング

Configuration Assistant, D-14
Enterprise Manager に統合されているクライアン
ト・アプリケーションのトレース, D-6
Management Server, D-9
Management Server が Windows の「スタート」
メニューから起動されない場合, D-10
Management Server がデフォルト以外の Oracle
ホームから正しく実行できない場合, D-9
ping 間隔の設定, 3-7
クライアント・アクセス用の変更, D-12
Management Server のトレースとロギング, D-4
MetaLink の使用, D-2
omsconfig.properties ファイルに関する許可の変更,
D-21
SGA サイズの決定, D-22
Web ブラウザ, D-13
オラクル社カスタマ・サポート・センターへの情報
提供, D-3
オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問題
の報告, D-1
ジョブ通知, D-23
パスワードの再設定, D-14
ポケットベル・サービス
ポケットベルの通知失敗, D-13
リポジトリ操作には不十分なデータベース・パラ
メータ, D-19
リポジトリ・データベースのデフォルト表領域に十
分な空き領域がない, D-16
トレース, D-4
Management Server, D-4
Web ブラウザ, D-7
クライアント, D-6

の

ノードの検出, 6-4

は

パスワードの再設定, D-14
パスワード・ファイル, 6-38
バッチジョブとしてログオン, 拡張ユーザー権限,
6-14

ひ

表領域
OEM_REPOSITORY, 2-10
ROLLBACK, 2-11
SYSTEM, 2-11
TEMPORARY, 2-11
既存のサイズを拡張, D-18
作成, D-17

ふ

ファイル
clientconfig.properties, A-2
dbappscfg.properties, A-2
init.ora, 6-38
omsconfig.properties, A-2, D-4
oms.log, A-2, D-6
paging.cfg, D-8
paging.cfg.template, A-2, D-8
パスワード, 6-38

へ

編集
Management Server の構成パラメータ, B-8

ほ

ポケットベル・サービス
ステータスの問合せ, 6-25
設定, 6-18
停止, 6-25
ポケットベル通知の作業環境, 指定, 6-24
ポケットベルの構成プロパティ
TRACEFILENAME, D-8

TRACING.ENABLED, D-8
TRACING.LEVEL, D-8

ゆ

優先接続情報リスト
定義, 1-9
優先接続情報リスト, ローカル設定, 8-8

り

リポジトリ
サイズ設定, E-1
Oracle Change Management Pack, E-3
Oracle Diagnostics Pack, E-2
Oracle Enterprise Manager コンソールと DBA
Management Pack, E-2
Oracle Management Pack for Oracle
Applications, E-3
Oracle Standard Management Pack, E-4
Oracle Tuning Pack, E-2
定義, 1-7
リポジトリ, 削除, B-6
リポジトリ接続情報, 保存, 2-10
リポジトリの移行
アクティブ・ジョブおよびイベントの削除と登録解
除, 7-15
移行成功の確認, 7-16
重要な注意, 7-2
準備, 7-6
段階, 7-2
取消し, 7-17
リリース 1.x とリリース 2.2 との違い, 7-3
リリース 1.x のオブジェクト・リファレンス, 7-18
リリース 1.x の既存のリポジトリのバックアップ,
7-8
リリース 1.x のリポジトリの情報確認, 7-8
リポジトリの所有者
定義, 1-7
リモート SYSDBA アクセス, 6-38

ろ

ロギング, D-4
Management Server, D-4

